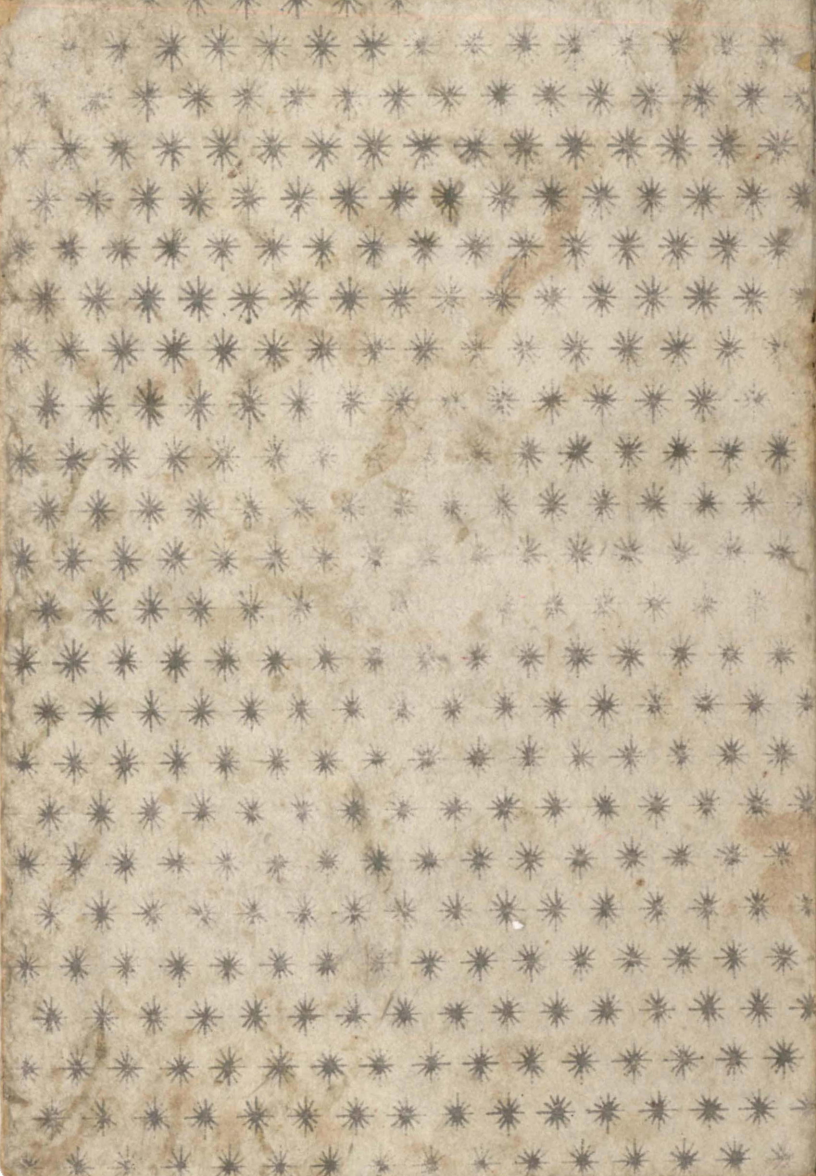




惜春譜

内藤冬代



です。新はうねり。ゴヤンだ。世の中に自
 分をみとめてくゝ人を得た時ほどの喜びは
 ゴがいませむ。真に自身を理解してあらふ事
 は、容易なことで下はゴヤンませむ。小智一
 否、四郎さ。有仰いました。一人の人が知
 り得た他人は真に少ないものです。一人もな
 ません。執に燃ゆる手を握り合ひ
 抱擁を交はし。或は人生意気に感
 應のよりに涙を流す人。ハハハ
 間にも、永久に理解を生ずること



惜春譜

内藤千代

○

淡^{うす}くれなゐの桃^{もも}畑^{はた}に、白^{しろ}う煙^{けむ}つて春^あ雨^めが降^ふる。雨^{あめ}がふる、ふる。わが
泣^なき濡^ぬれた睫^{まつげ}のやうに、萬^{まの}象^{みへ}はしつとりと露^{つゆ}を宿^{やど}してうなだれてゐる。

わたしは朝^{あさ}からぼんやりと机^{つくえ}にもたれて、くりひろげた卷^{まき}紙^{がみ}の端^{はし}に晶^{あき}
子^こ集^{しよ}の

胸^{むね}然^もゆる火^{くわ}難^{なん}の相^{さう}とたれ云^いふや藤^{とう}花^{くわ}に似^にたる黒^{くろ}髪^{かみ}の^{ひと}人

君ならずいくたびすなる變心のわれを憎まむ愛よのろひよ

すてがきす戀しうらめしうしつらし命死ぬべしまた見ざるべし

などゝ書き玩むでゐました。

ちようど一年になりますの。去年の今日もやつぱりこんな日でしたのねえ、神田の街の雨の夕を、わたしはくるり／＼蛇の目傘まはし乍ら一時間近くも、とある電車の赤柱の傍に立ちつくしてゐた。

約束の時間は疾に過ぎて了ひましたのに、……もう幾十臺の電車を空しく見迎へ見送つたことでせう。第一人目を引くことおびたらしい。あら、うぬぼれではございません。わたしも若い女ですもの。

まあ愛さま達に誘はれた帝劇行もことはつてまで出かけてきたものを

と、くやしいつたらありはしません。茫と涙に目がかすんできました。とう／＼思ひ切つて歸るつもりで四五間歩み出した時、向ふから疾走してくる電車の運轉手臺に浮く白い顔が、しきりと身悶えをしています。もしやと立止ると、やつとそれが待ちこがれた美登利さんと、憲子姉さまでありました。

双方から線路を横切つて走りよつたが……

美登利さんの俤が途中ですべつたとか轉覆たとかで、泥まみれになつたものだから、着替にもどつたりして、それで遅くなつた、と例の人懐っこい調子であやまられてみれば、おこる事も出来ず、でも、おけがはと見れば左手の掌の繻帯がいた／＼しい。

こんな思ひまでして私たちは、高等商業學校の生徒達によつて催され

る、その年ねんちう中行事ぎやうじの一たる有名いうめい(?)な、英語大えいごだい會かいへ行くためでした。
どうせ外ぐわい國語こくごの演説えんぜつやお芝居しばいなんぞわからう筈はずはないんですけれど、
一度どは見ておきませんと、友人間おともだちに對たいしても幅はばが利きかないもんですから
いつばし解わかるやうなお仲間なかまの顔かほして校門かうもんを這入はいつてまゐりましたの。

下足場げそくばの混雜こんざつの中で、いゝあんばいに今度入場券こんどきつぽうの御世話おせわを下すつた
和田様わださんとぶつかり合ひました。和田様のお背中せなかを美登利みでりさんが、たわむ
れて打つたとか打たないとかつて、御友人間ごいうじんかんの問題もんだいになつたといふのは
可笑おかしうございましたが、實際美登利じつさいみでりさんが派手はでやかな藤色ふぢいろちりめんの
お羽織はおりに、こんな場所ばしょには一寸珍ちよつとめづらしい高島田たかしまだのつや／＼しいので、たゞ
さへ美うつくしく可愛かあいらしい人ひとですのに、今や近くある君きみに嫁よめぐべくきまつた
一刻千金いくせんぎんの人生じんせいの春はる！ 申分まをしぶんなく整ふた乙女おとめ二十の花姿はななたち！ つく息いきさへ

もかぐはしく、若々しい香の打散るそのからだつきは、美しいまで豊
艶なものでありました。この女はすこしお眼が近いので、そつと銀ぶ
ちのきやいやなお眼鏡取出してかけては、幕が閉まるとあはてゝ取脱し
て袂にかくして了はれるのも、娘らしくてよいと思つた。

わたしは苦しくつて、……だつてあんまり人々の笑ふときは、自分
ばかり澄ましても居られず、プログラムの蔭に顔をかくしてごまかして
ましたが。おまけに周囲には西洋人の男女が多かつたので、すこし心細
くさへなりました。

その夜の歸りがけ、廊下の端で和田さんが、丁度來合せてゐらした小
笹の四郎さんに御紹介下さつたのです。『貴女は四郎ちゃんと御交際な
さる事によつて、きつと得られるところが少くないでせう。衷心からお

すゝめします』などゝかねゝ御噂は承つてゐたのですけれど、何故か私はこの君に對して、何等の期待も興味も有しては居りませんでした。却つて美登利さんたちの方が、小笹さんゝて懂れてゐました。〇〇にその人ありと知られた秀才、語學にきこえた君だとか何とかつて。……

二言三言は交しましたが、いつもの癖のふかく俯いて、上草履の底で床ばかりこすつてゐましたし、どんな方だつたやら、同じような制服姿の君たちも多い中。心にとまるほどの印象もなく、そのまゝお別れしてしまひました。篠を束ねたやうな土砂降となつた雨の中を、高下駄の足許あやうく。……

道々も和田様はしきりと四郎さんのことを賞讃てゐらして、さうしてこの方達が私の前途、——これからどう云ふ經路をとつて進むかと云ふ

ことやなんかに、多大の興味や同情や憂懼やの眼をそゝいでゐる、と云ふやうなことをきかされて、不思議にも感じ、またよけいな御心配ねと心の底で冷笑もしました。それほどそのころのわたくしは、人を容れる雅量を持たなかつたのです。

わづかな道程でしたが電車通りへ出るまでに、半コートの裾から下はびよつしより濡れてしまひました。したてたばかりのお召縮緬の小袖がいちどでだいなしになつてしまつて。……それは長いあひだ私の憾みのたねでございました。

「山脈や雲の匂へる遠方は

櫻咲くらむ君よ戀しき

春！ 春！ 春………になりました、ちい様。貴姉と御別れ申した英

語會の夜、それからやがて一年たちます。』

と美登利さんからの消息にもありました。

ほんとにあれつきり逢ひません、遠い／＼お國へ嫁かれたのですもの。
さう、さう、わたしはいま美登利さんへの御返事を、したゝめさしてゐ
たのでした。あはてゝ無意識に筆の穂を噛みしめました。あゝ美登利さ
ん、美登利さん、貴女は何にも知らないんですわね。

わたしと四郎さんとはその後和田様を間にはさんで、手紙のやりとり
をするやうになりました。

筆跡も美しく香の高い鮮やかな花の様な文章を書く人でした。

わたくしも最初の中こそ、ほんの通り一べんの御交際のつもりでゐまして、……御返事を書くためには心にもない感興を銜つたり、お世辭云ひ合つたりせねばならぬことが、苦痛でもあり煩はしくつて煩はしくつてたまらない時さへありました。が、度重ぬるまゝにいつか先方の、そのいかにも眞面目な初々しい、いやみのない、眞摯な熱のある態度が氣に入つてきました。

もう大概な男は自分を弄ばうとかゝつたり、敬遠したり、さげすんだりする中で、四郎さんばかりが始めて一人前の藝術家として取扱つてくれたのは、面眩いやうな氣もするけれど、大きな歡喜と權威とを覺えもしたのでありました。私の心はだん／＼四郎さんに惹きつけられて行つて、つひには無くてならない刺戟劑のやうなものになつてしまつた。

才筆の魅力か、誠實の通じたのかはぞんじません。兎に角從來に経験したことの無い、強い温かい友情を感じ出したのは事實です。二人の言行には共鳴の響きを、高く立てる點が多ございました。

『あゝあゝ以前、せめてはやるせない懷疑煩悶の時代に、今のあなたのやうなお友人が欲うございました』としみじみ述懐いたしましたら『その頃僕が居たらつて？』……………

あゝその頃に、その頃の僕がゐましたなら、……………貴女の速度を二乗して、同方向へ走つたかも知れません』……………て、……………。
しかし、しかしお互にもう時は過ぎました。花散り失せし梢のやうに……………

くろみ行く若葉のみどり!! 丁度若人達の心理状態と同じやうなもの

だと思ひます。風に揉まれ、雨に叩かれ、強烈な日光には照らされて、毛蟲が生いたり、ちりにまみれて、瑞々しい光澤も失せ、強くなり、硬くなりゆく……。

私はいちどだつて人さまに、お世話やきがましいことや忠告めいたことなんぞ、した覚えもなければ云つたこともない筈ですのに、どうしたわけかお年齢からいへば、大兄様と申上げてもし、ほどの和田様までが貴女は最初からお姉さんのやうな感じのする女だくつて有仰いますの。

まして『氣の早い、そして考へる力の足りない青年には、優しいいたはりといさめを下さる姉様が欲しい』と訴へてゐらした四郎さんは、とう／＼私をその任にお補なさいました。まあ、と私はあかくなつて

笑ひました。

でもその頃の四郎さんは、ほんとに可愛かつたんですもの。

學生にとつては試験前の、くるしいそがしい貴い時間を割いてまで書かれたものと思ふとうれしくて、わたしはいつも實のやうに四郎さんの御文を繰り返しました。そのレターペーパーにはかんばしいシガの香が強く泌みてゐました。

水無月初旬のまひるの碧空を、雲が流るゝ白い雲……さながら『迷へる羊』のやうに。

こんな時、すこし勉強に疲れたやうな顔をし乍ら、そよくと微風のそよぐ青葉の窓か欄に腰かけて、うまげにふうと吹く紫の烟の行方をみ

つめる、鼠色ねづみつばいネルの單衣ひとえの青年せいねんを、想像おもひうまへてみやうとしたけれど駄目めでした。

四郎しろうさんだつて英語會あの夜よの一瞥べつのほか、私わたしを御存ごぞんじはありません。
だにある日ひお茶ちやの水みづから甲武電車あつしやに乗のつたら、もう少しでお叩頭たたきをしてしまふとこだつたほど、貴女あなたに酷似そっくりの方がいらした、とかつてお手紙てがみにございました。

その後のちも、不思議ふしぎとよく同一電車おなじくるまに乗り合あはせるとのことでした。その人は、やわらかい藤鼠色ふぢねづみいろのきものを着きて、星ほしのやうな眸ひとみをして、色いろが透すき徹とほるほど白しろいのださうでした。それから口元くちもとがよく似にてゐると思おもひます、とのことでした。私わたしはこの小ちひさなエピソードエピソードに興きようある事ことといたく心を惹ひかれて、さうしてその女ひとが出來できるだけの美うつくしい女をんなであるやうにと願ねがは

ひました。

梅櫻桃李、鳳顔顰眉、紅唇隆鼻、幾多の美少女美少年と、紅いハートを満載して、白金の波碎くるお濠端づたひ、櫻吹雪、青嵐の中を流星の如く疾駆するといふ『つりかわ物語』や、花電車のロマンスを空想て、ひとり微笑んだりした。

が、自分から會ひたいなどとは露思ひませんでした。むしろ會つてはならないやうに、おきてづけられてゐる二人ちやあるまいか！ それを破るのは何だか罪をでも犯すやうにおもはれて、……何故なのでしやう？ ええ、たゞ何の理由もなしに……。

寫眞を見せられても、まあこんな方だつたのかしら、と嘘のやうで、わたしにはどうしても四郎さんといふ人の想像がつかなくつた。それや

たよりないやうな、歯がゆいやうな氣もいたしましたけれど、……でもまあそんな事はどうしてもよかつたのです。

その當時の私には現今よりも、もつと種々の苦勞が多ございました。四郎さんのことにばかり、屈託してゐるわけにはゆきませんでしたから。……



わたしは小さい時からびんぼうの苦勞がよく知つてゐます。

だけど、あんまり慘酷なと呪ひたくもなりません。生活難といふことがいちばん心身を苦しめました。食べるために働かねばならぬ、それも母や妹の爲に。……そして勉強や修養は何一つする餘裕もなく、金玉にも

かへがたい我が尊い若き日は、一日／＼とかくて過ぎゆく。

自由意志には義務と責任の觀念がともなひ、安全な保護の下には壓制と屈従がある。

後者より前者は一入無形の縛めを覺える。『人形の家』のノラは人格を向上させるためには、家庭も愛兒もふり切つて出ました。けれど私には私には、それだけの勇氣もないのでせうか!! えゝ心が惹かれます、心が惹かれます。扶養者の義務と云ふことに。……お金が欲しい、と痛切に感じました。身動きも出来ぬ双肩の重荷!! うら若い乙女の身には背負ひあまります。今まであらゆる周囲の迫害や嘲罵や誘惑と、筆一本で戦つておし退けては來ましたけれど。

むかし父様に逝かれた時、私たち母子に残された財産と云つては、い

ま住んでゐるこの家屋地所のほか、さしづめ葬式を出す費用にもさしつかへ、供に立つ服装にも事かくやうな有様だつた。私は銘仙一枚外出着といふものを持ちませんでした。

そんな中で育つた私の教育や智識の程度と云つたら、お話にならぬほどあはれなものだつた。どうしてそれで生涯藝術に依頼つて生きる人とならうなどと大それたこと、最初から夢にも願つたわけではないけれど。……

ゆくりなくも筆執りはじめて、……盲蛇物に怯ちずとやら。ほんの雑誌の拾ひ読みや、見覚えきゝかちりの附焼刃で、どうにか今までこぎ分けてきたのが、むしろ奇蹟な位であつた。だんく私は自分で自分に愛想が付きかけてきた。どううぬぼれてみても、文學に對する天分のある

るなんてことは、信じられなくなつて了つた。

雑誌の編輯のメ切日は眼前に近づいても、何を書かうかまだあてもなく、自分の頭脳はきつともうかちぐりのやうに、干からび切つたにちがひないと思つた。でも、

『原稿を書かなければ生活して行かない』

のだと考へると、ほんとに不思議なやうな、すまないやうな氣がしました。私のやうなものに何の價值、何の取柄があつて、……いつのまにか實力以上の虚名を博するやうなことになるてしまつたのだらう。それも心苦しいことの一つであつた。私は改めて、いろはから出直さねばならぬ人間だと、すべてをそこへ抛り出したくなつた。

これを自己嘲笑の悲哀と云ひます。

いつまで蜜のやうな空想や、憧憬を生命にして居られませうぞ。私ももう幼稚な『夢みる人』ではございません。苦い苦しい現實に目ざめかかつたのでございます。

理想と現實との矛盾から起る苦悶！ 悶え／＼てすべての理想に對する信仰を失つてしまつた私の、以前とらうとした道は『死』でした。あゝ『死』といふことが唯一の逃道であり、解決であり、權威であると信じてゐた頃は、まだ／＼心安うございましたわ。今は、今は、殺されたつて死にさうもない。生きたい、生きたい！ 生きられるだけは生きなくつちやならない！ たとへ盗みをして、獄舎に入れられても！！

あんまり生に對する執着が激しくなつたので、もしや自分は若死をす

る前兆ちやあるまいかと、身ぶるひの出ることもありました。

『毎朝顔を洗ふと頭の髪の毛がボロ／＼落ちて水に流れてしまふ。僕の生命もこんなにつきて行くのではなからうか。つく／＼秋の寂しみを感ずる。僕はどう思ふても死にたくない！』

こんな事を云つた友人は、若き終焉に悶え乍ら、廿五を一期として逝きました。浅ましき濁世に何の未練があらうぞ、卑怯なと私はさげすみました。……いまその言葉がつく／＼と思ひあたつて泣かれます。

もう／＼何にも問はないでおいて下さいまし、自分を顧るのが辛いのですもの。たゞ口もきゝたくない！眼も開きたくない！と何にも思はず考へずに、こんばいしきつた眠りばかりを食つてゐました。毎朝々々起きるのは十時過ぎですが、身體は綿の様に疲れ切つてゐます。眩し

うちらつく青葉の輝きが、痛いほど目に泌みました。小櫛執るのも物倦くて、崩れかゝつた前髪を両手で捧げるやうに掻き上げると、ふけがバラ／＼と散ります

『貴女はいま大切なターニングポイントに立つてゐらつしやる。これからどういふ御動靜をお探りになるか、好奇の目をもつて見てゐる人が澤山ありますからそのお積りで……』……つて。

えゝ、知つてゐます。自分でもどうなるかわかりませんが、『自我』といふ大きな厄介なものをもちあつかつて居りますから、すべてはそれによつて支配される事でせうと思ひますわ。

母はもとから私を秘藏で頼しいものにしてゐましたけれど、その愛は動物の盲目的なものに過ぎなかつた。私はどんな場合でも母の前には笑

顔をかくさず、太平樂なことばかり言つておもしろさうにはしやいでゐた。

友達もあまり持ちませんでした。何人に對つても調子を合せる事は忘れなかつたから、評判はわるい方ではなかつたけれど、どつちを見ても心を明し合ふやうな友人は一人も見當らなかつた。が、それを當然のことと思惟して、別に寂しくも何ともなかつた。

たつた一人の妹は、去年高等小學校を卒業して、十七になつてゐました。引詰の束髪、肩揚げの深いきものを裾短に着て、紅めりんすの半幅帯など、ちよこんと締めておりますが、もうその胸や腰や、肩のあたりは丸くむつちりとして、姉よりもよつほど娘らしく艶めかしい趣をそへてゐた。

かみそりをあてない細かい生毛だらけの顔は、日光に透かすと口のまはりに薄すりひげが生えて、眉もぼうつとかすんだやうにみえる。

私はこの妹の氣の好いのが、ちれつたくつてちれつたくつてならなかつた。片親育ちの子のくせに、あんまりのんき過ぎる、と腹立たしく引き締める心の足らねばか、自分より幾倍か優に生れついた容貌も、ちつとも見榮のせぬのも疳癪のたねだつた。

わたしの幼い時代は人からお世辭にも、可愛いの美しいのと云はれたことはたゞの一度もない子でした。忘れられないのは十二歳の春、緋無垢重ねた紫地友禪の一張羅を着かざつて、若い叔母の婚嫁先へ連れられて行つた時、その姑御に、その衣裳だけをほめられて、これは姉さんより妹さんの方に似合ひさうだね、と何心なく云はれたことが、何より

苦い口惜しい恨めしい記憶として今でも残つてゐる。

容貌ばかりではなく性質までが反對で、その弱々しい……何の秘密もなく母様により縋つてゐるやうな態度や、下らぬ事を氣にかけこちきシク／＼泣き出したりするのを見ると、無暗にいちらしくてたまらず、強く抱きしめて頬ずりでもしてやりたいやうな氣になることもあつたがそれは矢張一時の發作で、他愛もなく母親に甘へたり、しつ／＼こく物などねだつてる聲をきくと、またむら／＼つとして手當り次第に物でも投げつけたかつたので、始終とがつた震へ聲ばかり浴びせかけるので、妹は氣むづかしいちやけんな女らしくない姉様だと、恐れてゐるらしいとございました。

こんな悶々の中にあつて、しほれた切花の水を得たやう、折々一時なりとも力づけられるのは、四郎さんのお手紙によつてでした。

おろかしい性に向つて、より多く期待せらるゝほど悲しいことはない
と知り乍らも、私はせめて四郎さんのゑがいてくれるイリュージョンだ
けは破りたくなかつた。強ひて自尊心をふり起しました。

けれどもその頃、四郎さんに對して、みちんも戀愛がましい氣分の
なかつたことだけは、決して御疑ひ下さいますな。亮様の悲劇のあつて
以來、自分はもう戀には免役性になつてしまつたものと、ひとともみとめ
我もゆるしてゐたほどでございますのに。……

亮様！

○
たつた一語も私にとつては、身のふるへるほどなつかしい名でした。
恩人でもありうらめしい人でもあり、師でも兄でも戀人でもある……
あら御免なさいね。でもお話の順序ですから。……

亮様の歿後たつた獨りの御母堂は頭を圓めてとある郊外に庵を結んで
琴曲の御指南をなさり乍ら看經三昧の餘生！と云つても五十になるか
ならずですが、昔はさぞと偲はるゝそれはく美しい方でございまし
た。お鼻の高い横顔からお目のあたりなど故人にそっくり。親子とはい
ひ乍らかうも似るものか、戀しい人の俤はやつぱりこゝへ來て求めるほ

かはない、と私は人知れぬ涙をこぼしました。とけがたき憎惡の念は互の胸中にあり乍ら……。御母堂は何と思つて私を御覽になつたでせう、私はちつとみつめられると殺されやしないかと思つて怖かつたんです。それほどお憎しみは深いのですもの。

何故かつて！ それは嫉妬でございますの。御自分から御子息の愛をうばつたつていふ——それも事實なら仕方がないけれど、思ひもよらぬ冤罪ですのに、……………わたしはくやしい。

廿臺から未亡人を立て通して、心勞辛苦の中に一人子をあれほどまで育て上げられた方、いくらか御性格も不自然に——病的におなりなされてゐるのは、御無理もない事でしたらうが、でも、それにしても、それにしても……………

一年後にふたゝび私のおたづねいたしましたとき、もとの庵室には見もしらぬ人の表札がかけられてあり、やうく探して御移轉先までたづねてまわりましたけれど、御母堂にはかけちがつてお目にかゝれなかつたばかりか、待たせておいた老車夫の口から歸途の車上でゆくりなくも淺ましい風評をきかされました。

まあ、あられもない。……何と云ふシニカルな諷刺(?)であらう。わたしはこゝでもまた一つ、幻滅の悲哀にぶつかりました。けれど私は悲しみませんでした。人生つていふものはかうしたものと、しみぐく感じました。

どうせ口さがない世上の取沙汰なんても、信用したわけではありませんが、よしやそれが事實であらうとも、根もない浮説であらうとも、

私にとつてはどつちでもかまはない。たゞ豁然と大悟しちやつたんですの、ほムムム。

さうして自分がいつまでも亮様に、殆んど因襲的に引ずられてゐるのは、ほんとにおろかな事だ、個性を没却してゐる。……自分は振ひ立つて、眞の意義ある新しい世界を創造しなければならぬと云ふことに心づいたのです。紫縮緬の袱紗に包まれた御靈前へのお供物と、御母堂への御土産は私の膝に抱かれたまゝ、汽車と電車にゆられゝてまた東京へ歸りましたの。

その途中も、もうく亮様の事については何も彼もすつかり忘れる、御母堂にももう生涯お目にはかゝりますまい、と小叫びしたのでした。さうして重荷を下したやうな、長い囚はれから逃れ出たやうなすがく

しさを覺おぼえました。

それは亮ろう様が逝ゆかれてから、滿二年目の御命日ごめいにちのことでした。

○

私がこんな風になつたのは、時の力と一つは四郎さんの思想の感化が大分あるのだと思ひます。

よく四郎さんが『貴女は大いなるリアリストでゐらつしやる、何もかも御存じだから、僕なんぞは「太陽の前に出た土龍」の様な氣がする』とか『けれども貴女は底しれぬ海洋のやうだ。大なるリアリストの筆にロマンチックな夢や、センチメンタルな咏嘆が表はれるのですもの』などど有仰られるのに對して、私は忸怩たらざるを得ませんでした。

お恥かしうございますの、四郎さま。あの頃のわたくしは、まだほんとうの生活方を知らなかつたんです。何にもわかつてはゐなかつたんです。生意氣なことばかり言つてましたけれど。……

けど妙に捻くれた頭脳には、戯曲でも小説でもいたましい深刻な生の悲哀にふれたものや、現實の暗黒面を寫したものや、皮肉なシヨオの作物なんぞが快くつてたまらないのでした。シヨオ劇を若い私達が見るには、よほど腹を決めてかゝらなければならぬの、若き男女にデスイリユジヨンの悲哀を與へる親玉だのつて、大層らしく論ずる人たちを笑ひました。

折よくと云はうかわるくと云はうか、丁度有樂座で無名會が『武器と人』(チヨコレート兵隊)を演つてゐたのです。私は自分がたまゝの上

京を無爲にしたくなかつたので、その觀劇に事よせて、四郎さんと會見の機會をつくりました。

その日は朝から物事も手につかず、そはくとして、初心らしく胸が躍つた。こんな幸福な日はまたとないやうな氣もした。——無論正しい意義においてですよ。わざ／＼好みの花簪と香水を三越へ買ひに行つたりして、夕方お風呂にはいつて念入りに白粉をすりこんで、ぼうつと目のふちにまで燕脂をぼかした。四郎さんが自分を決して美しい女とは思つてゐらつしやらないだらうといふことが、何故か私の頭に直感されてましたの。それからそこに氣安さもあり、もし少しでも期待より勝れたところがあつたなら、お互にうれしからうといふ、はかない望みもあつたのでした。

開演は六時半でしたが、約束の七時を過ぎても、四郎さんの姿は見えませんでした。私は少し氣がもめ出してきた。幕間にしきりと四邊の人物を物色していると、喜劇で見覚えのある四郎さんに似た、白飛白の學生が二三の友人と賑やかに語り合ひ乍ら、自分のちき後列にゐる事に氣がついた。

もしやと思ふと耳まで赫とほてつてきた。自分をこんなところまで誘き出して置いて、笑つてやらうと云ふのかしらん。のがれられない友人の同行でも出来たといふわけなのかしらん!! しかし、しかし、四郎さんは、そんな不真面目な人ぢやないと思ひ返した。が、どうしてももう舞臺の方へは興味が向かなくなつてしまつた。

それに、あの痛快な諷刺劇にも何の感覺もなく、どつと笑ひ崩れる周

園の観客達が癡でくたまりませんでした。私にやどうしても笑へませんでしたわ。一々道理なことに何が可笑しいだらう、とかへつて涙さへさしぐむのでした。

と、もう劇が七分以上進んでから、ふと人の氣配がした。見ると女案内人が小腰をかよめてゐました。しつくりした制服姿の四郎さんは、しのびやかに挨拶して隣席へ腰を下した。私も無言で答禮して少し身を退いた。やつと得られた安心とうれしさに、我しらず口元がほころびたが自分がほとんどこの人のことばかりに魂をとられてゐた間、この人は平氣？で他の仕事をしてゐたかと思へば憎かつた。

何に氣をかねてか互に交す言葉はきゝ取れぬほど低うございました。幕間になつても私は、お人形の様に首を据たまゝ袂の先を弄り乍ら、ち

つと正面をのみみつめてゐて、……そのくせその時の幕の色彩も模様も何一つ頭には残つてゐません。

やがて最後の幕ぎれに、少し伏目になり乍ら拍手した四郎さんの手つきを可愛いとおもつた。くづるゝ人波を一なだれやり過してから、慎しく後に引添つて場外へ出た。

しつとりと雨氣を含んだ霧の立てこめた晩で、水のことき夜氣が頬をひたした。五彩の霧を填いたやうに、中空を横さまに貫いてゐる末廣形の光芒は、青山の博覽會場の探照燈ださうでした。私はおびえて四郎さんの傍にすりよつた。……

それや土砂降りの雨の夜なんかにはねえ、馬車や自動車のお迎へで、否、それほどではなくとも勇しく流星のやうに、タイヤの俤の提灯飛ば

して去られる方々を、羨ましく見送つたこともありますけれど。こんな良夜をむさ／＼と、……どうしてお別れすることが出来ませう。劇場からの歸途をカツフェーへ!! そのとき始めて二人きりの差向ひで、つくづくと顔を見合つたんです。

四郎さんの腫にわたくしがどんなに映つたかはぞんじません。あらゐ紫の裱縞のお召縮緬に、無造作な洗ひ髪を首筋に束ねて、燃え立つやうな紅百合の大きい花簪をさしてゐました。かわいゝ金扇に口元をおほひ乍ら……。

天井には大きな煽風器が音立てゝまはつてゐました。眩ゆい花瓦斯の光りの中に、卓をはさんで語り合ふ君は、びつくりするほど若々しくて決して可愛い感じのいゝのと云ふお顔立ちではなかつたけれど、男ら

しく秀でた眉宇のあたりの頼もしさ。瞳よちのお眼鏡越しに、意志の強さうな眼が力強く輝いてゐた。

四郎さんのお年はお幾歳なのだか私は知りませんの。が、どちらにしても自分とそんなにちがはないのだらうと思ひました。この人になら姉と呼ばれても、憎くはないと思ひました。

でもそんな申談がましいことを口にすべく、私はまだく若過ぎた。四郎さんもあくまでお眞面目でした。滅多に笑ひ顔もなさらない。

けれども、對者の人格の然らしむところか、自分を最もよく了解して下さる君と知る故にか、かうして好奇心のたすけもからず、——みじんも氣取らない、街ひもしない、……私會でこれほど純な美しい感情を以つて異性に對したことはございませんの。自分の容貌のことなども

ちつとも氣になりやしなかつたんです。性などの考へは、まるきり念頭に上りませんでした。

兩人はアイスクリームソーダをのんで、愉快に淡く酔ふことが出来ました。

しかし、四郎さんも口の重い方でした。何か話題をもち出すのは自分の役目であるやうな氣がして、わたくしはつとめて快活でしたが、戀ならぬ愛を感じたとしても云ひませうか、久しい間の孤獨になれたかたくなな心も、今宵ばかりはすべてのものを抱擁して育くみいつくしんでやりたいやうな、廣いやさしい心持になつてゐました。

日本では到底得られない悦びだと諦めてゐたんですもの。……「音にきくベルリンのウンテルデン、リンデンストラッセも、ニューヨークのブ

ロードウエーも、あの夜ばかりは美しくはありませんでした』つて、四郎さんも後に有仰いました。コツアの泡に映る金色の灯影も、私たちのよろこびと共にうれしさうにふるへました。

○

この會見後幾日ならずして、四郎さんは旅行の途に就かれました。かねての豫定通り南清地方へ。御友人方の手まへを憚かる遠慮もいくらかあつたのですが、私は同じ東京の内にゐながら、御見送りしやうとも思はなかつた。したいとも強ひて思はなかつた。またそれほどの間柄でもなかつたのですもの。

たと何となくうら悲しくて、長途の行程つゝがなく幸多く在せと心中

に祈つた。船には弱いときく君の、船室の夢の安らかなれ、玄海灘の風波静かなれとのみ。……

——南下の車中にて——

今宵十一時、蹣跚と帝都をはなれ申候。淋しき友の笑顔も新橋の灯影も早已に後ろの暗に。……

目を放てば前途は遠く任務は重く、強からぬ心臓のひたすら、氣づかはれ申候。されど、されど、若きを誇る身の何ものを恐るべき!! 昆崙の山も楊子の流も見事踏み破るべく、御懸念下さる間敷候。今夕六時速達のおん玉章確に落手、間に合ひしことの如何ばかりうれしく候ひしよ。電車の中にて繰り返しく読み耽けり申候。

御風邪氣は如何に候や、出發に際し只一つ氣がゝりに御座候。赫耀たる前途は君を待つ、くれぐれも御自重被下度候。

『七日の夜の印象記』ありがたく……ひとり微笑まれ候。面はゆく存じ候。あはれ彼の夜の印象こそ、一生忘れ申すまじく、御忘れ下さる間敷候。

『復活したる生の歡び』とは安穩に復したる御生活のよろこびの義に候や。火花をはなつ生の緊張をお感じなされず候や。

『本邦に大いなる藝術なきは、充實したる生活なき爲め』とは御風氏の言を待つまでもなきことに御座候。

君よ、無爲には過し給ふな、歡喜に輝けるこの夏を。

多感の胸は千々に亂れ候を、列車は揺れに揺れて思ひのまゝに綴れ

不申、口惜しく候へど終りを急ぎ候。

さらば君よ、

永い夜汽車の一人旅——空想と煙草が唯一の友に御座候……

七月某日午前零時半

藤澤驛をすぐる頃

四郎拜

内藤千代子様

前二葉を書いてから空氣枕を頬に當てゝ、うつらくとしてゐます
中、いつとはなしにねむつてしまひました。ふと眼が覺めて窓から
覗くと、オ、マウントフジ！ 美はしき姿は白い黎明の空につま

しやかに聲こゑえております。

申し残のこしたことがあるような氣きがするので、また紙かみをとり出だしました。
た。

内藤様、今迄私の惡わるかつたことをすつかりお許ゆるし下さいまし。不深ふしん切せきなことやおろかなことを。殊ことに『言葉の遊戯いうぎ』をしてゐましたことを。お目めにかゝつてからようやくこれをしなくつても済すむやうになつたのです。それまでは詮方せんぽうなかつたので。……

すべてをお忘れ下くださいまし。廣ひろい世界せかいでしみぐさ考かんがへてまゐります。やがて桐きりの葉はが落ちて秋風都門きゅうふうともんに入るの日には、新あらたしい何なにものかを以もつてお目めにかゝりませう。帝都みよとを出發しゅつぱつします前まへ、準備じゅんびをととのへたる『トランクに腰こしかけて』いろ／＼と書かいて見たのですけれ

ど、黙つてゐる方が雄辯のような氣がするので破つてしまひます。
清濁併せのんだ私の魂、攪亂に攪亂を経た後、表面に澄んだ清い
部分をのみ、そつと取つて保存しておいて下さい。

左には駿河灣が見え出しました。おだやかな浪と共に私の魂も揺れ
ます。富士と海をもつ鶴沼を、しみぐ美しく存じます。お體をお
いとひ下さい。

午前四時興津にて——。

私はこれを読んだとき、微かな愛と憎しみと、反抗と侮蔑の念のもや
もや胸中にうづまくを覺えて、兩手に我が兩肩をかいつかんだ。

おゝ、だまつてる方が雄辯のやうな氣がするつて。……あなたまで、

あゝあなたまで。けどさうです。ほんとにさうです。だから私は何も言ひたくない！ けれどさびしい。お互に大事をとつて氣取合つてたつて……つまらないぢやありませんか。利那の眞にでもふれたいんですよ。瞬間の同情でもいゝんですよ。思つたまゝを……意のおもむくまゝをはばかりもなく訴へられるやうな、聞いて貰へるやうな相手が欲しい。男でも女でもかまはない。が、そんな人はとても望んでも得られないものとあきらめてた。そこへ現はれてらしたのが小笹さま、あなたです。私はうれしうござんした。世の中に自分をみとめてくれる人を得た時ほどの喜びはございませむ。眞に自身を理解してもらふ事は、容易なことではございませむ。だのに、それだのに……。小笹……。否、四郎さま。あなたも有仰いましたわね、『一人の人が知り得る他人は眞に少ない

ものです、一人もないかも知れません。熱に燃ゆる手を握り合ひ、物狂はしい抱擁を交はし、或は人生意氣に感じたとき、瀧のように涙を流す人と人……その人達の間にも、永久に理解を生ずることなしに終るかも知れません。人生は孤獨でせうか、寂しいものだと思ひます』つて……。

あ、私はどうしたらよからう、世の中にひとりぼっち取残された様な氣がして、たまらなく悲しんだ、戀しんだ。どうしてかう四郎さんのことが氣になるのだらうと、泣くく怪しみもした。

さうく、四郎さま、今までのわるかつたことを許せて、それは何を有仰るの!? 何が不深切なの!? すべてをお忘れ下さいまして、……いやです、いやです。私の脳裡からもうあなたと云ふものゝ影を、

拭ひ去つてしまふ事は出来ません。慘酷なことを有仰るものぢやありません。

赫耀たる君の前途、……… 私はその光りに眼くるめいて、いづれは遙か後方に取残される身であらうけれど、……… 四郎さま。御自分の箔を落すまいために、沈黙を守らうとなさるのはひどうございます。そんなへだても元はと云へば、私がしてみせたんですから。

かんにんして下さいまし。これからあなたの前には正直ないゝ子になります。優しく清くなつかしく可愛き人よ。……… と物狂はしいまで昂ぶつた感情の閃きのまゝに、私は熱烈な、むしろ亂暴な手紙を書いた。つゞけさまに書き送つた。

四郎さんは、『砂漠をあゆむ旅人が、オアシスを見出て狂喜するように

渴いた胸にむさぼり吸つた』とのことでした。『上海のフランス租界、ホワイトハウスの仄かにくれゆくウエランダにて、その姉様のやうに懐しい情と力とを』……。

○

その後も四郎さんからはお約束の繪端書の他に、時々厚い封書が來ました。わたしの眼は輝いて、含笑んで、胸に抱いて、うれしさのあまりしばしは封を切るのがためらはれました。『若き渚の姉さまへ、異國の夜に物思ふ弟より』なんてあるのをみつめては、面眩いやうな不思議な氣もした。が、ちつともいやみな感じは起させなかつた。たゞ雄々しさ

と優しさと、なつかしみとにみち／＼た文面であつた。

『えらい人間になりたいと思ふよりも、むしろ故國の涼しい所へ、一日も早く歸りたい……』そんなあたりへ接吻もした。ホームシックを起したのね、可愛い四郎ちゃん。我慢なさい、我慢を！ と頬ずりして莞爾さゝやきもした。

と共に、自分も四郎さんの留守中に、何かしら、何かしら意義ある仕事をしておかなければすまないやうな、申わけのないやうな氣がしたした。おさへがたき表現の欲求が湧き返つた。

で、急に机の前にいそしみ出しました。それは丁度書きさしの或作物を完成して出版することに、某書肆と相談がととのつたからでもあります。したが、實は世の中に出すといふよりも、四郎さんに見て貰ひたいがい

つばいだつた。

わたしは一杯に取散らした原稿紙の中に埋まつて一夏を過した。たゞさへ夏やせの見える優しみのない顔に、濃い眉ばかりが神經的にビクビク動いて。西日射す窓にしほたれた浴衣の袖で、額の汗を拭ひく、酷たらしい暑さにあえぎ乍らも、四郎さんの事を思へば何でもなかつた。あんまり疲れると、眞黒々な唇に筆を噛みく、痛いやうな眼つきをしてすだれの外を眺めた。玄関にとなつた西向きのせまい書齋の庭先に、盛りを過ぎてぶざまに丈ばかりほきたダリヤや金盞花や、パンジーの鉢植がすておきにされてあるのでした。

きらくと金緑色の煙の立つやうな濡れ髪を肩にさばいて、……書きさしの机の上に突俯したまゝ、うとくと白晝の夢に入るまも、心は通

ふ南清の空へ。……

四郎さんも大變よろこんで下さいました。創作の勞苦!! と云ふことも、よく察して下さることが出来る方でした。

今年新秋衣更のころ、あなたは目出度く御歸朝なさる。私の著書も出來上る。その時こそは銀燭の光り眩ゆき下に、祝杯の滿を引かうではありませんか。水底のように涼しい夜に、歡喜の酒を仰いで酔ひたいではありませんか、と兩人は手紙の上で言ひ交しては微笑んだ。

今の苦しみは、やがて相會ふ時のよろこびを二倍にする、と四郎さんはともかく、私の胸中には人しれぬ大きな樂しみが秘められてあつたのです。

○

それがどうした事なのでせう、露けき叢に蟲の音さえて涼風の立ち初める頃から、——四郎さんの御歸國の日が近づくにつれて、私の心は臆しはじめた。

何だか四郎さんが妙に力強い、近よりがたいやうな、——大變えらい大きな人間になつて歸つてくるやうな氣がする。もう自分なんぞ及びもつかない、……どうしやう、どうしやう。わたしはどうしても、このまゝちや顔が合せられない、合せられない。いつぞ、いつそもう歸つて來て下されなければいゝ、とさへ願つた。その矛盾したおもひに、私はずるぶん苦しめられました。

いよく十月初旬下の關から、『旅を終つて』とあるお手紙に、

日本が見えます!! なつかしき嶋陰が!!! ダンテがビザの町を望んだ時よりも、更に聲を大きくして私は叫びたい、——我は日本を愛す!!
我は日本を愛す!!! と。

様々の自然と文明を見て來ましたけれど、海青く、風清く、人の心温く、乙女優しき日本が一番ようございました。

様々の初めての男に逢ひたれど、尊し、われは。尊し、われは。そうして様々の異國の美しき乙女を見たれど、われは愛す、優しき日本乙女を!!

大和撫子を!!!

さようなら。後數時間のちすうじかんで故國ここくの土つちを踏ふみます。大いなる期待きたいを抱いだいて東上とうじやういたします。——御活躍ごかつやくの蹟あとを見みんよろこびに。

さやうなら

〇〇丸甲板まるかんばんじやう上じやうにて

私は突然發作的とつぜんはつてきにビリ／＼と引裂ひきまきかけた。

『優しい日本にほんの乙女をよめ』といふ文字もじが疥癩しやくに障さつたんですの。荒びゆく情じやう緒しよを抱いだいた自分じぶんに、あてこすられでもしたやうに……。

わたしはすつかり疲勞つかれてしまつてた。創作さうさくにか、生活せいかつにか、否ええ、否ええ！ちようど自著じきやう『生ひ立ちなの記き』も、新装しんさうして都下とつか幾十いくじゆの書店とんてんの店頭てんめをかざりました。みんなから口々くぐくに『おめでたう』だの『御成功ごせいこうを祝いはふ』などと

云はれても、私の頬は羞耻に染まるばかりで、うれしくも何ともなかつた。明暮四郎さんのことが影のやうに腦中を離れなかつたので……

そのくせ當分顔は合すまい、とさまゝに思ひ亂れましたけれど、その決心を斷行するほど、私はあきらめのいゝ女ぢやありませんでした。とう／＼御めもじのその日が來ました。二人は新橋の停車場でおちあひました。

私は顔をあげて四郎さんを見る勇氣はなかつた。見られると意識するのは、いやなものだらうと、何となく察したからでした。會つたら／＼と心がけてゐたいろ／＼なことはおろか、型にはまつた御挨拶さへ出な／＼くつて、黙つて深く／＼俯向くと、桃割髪の前さしの切金のびら／＼がちり／＼と小やかな音立てゝふるへた。わたしは意氣な青竹色のお召の

袷に、濃紫の七分コートを着てゐた。

郊外へ郊外へと走る電車の中にあつても、わたしは恐れて傍に寄りませんでした。何等やましいことはない、何ものをも恐れはしない、とはよく四郎さんからきかされる言葉でした。自分も男のつれのあるところを見られてはなんといふ、そんな初心なのではありませんでしたが、とにかく秀才として世間から囑望されてゐる四郎さんの身は、些細なことに付けても大切である、といふ大人ぶつた優しい同情がひそんでゐた。よけいなおせつかいのやうだけれど、その頃の私は群衆心裡や世間的解釋といふものをいたく恐れて居りましたから。實際またこれほど仕末にならないものはない。

が、こんな事にはかり氣をとられてゐて、だん／＼に無邪氣な少女の

境地を離れて、中年女になつてゆく自分の心理状態が、ほんとにわびしかつた。

二人の間にはまだ他の人が優に腰かけられる程度の間隔を置いて、並んでゐたんです。四郎さんは懷中から何か書物を取り出して読みはじめられました。わたしはうらめしいはかない感じがした。が、ふと視線を走らすと、それは私の著書であつたので、思はずばつと眼瞼の邊りが紅らんだ。あまりに自分のまはり氣が恥かしかつたので……。

秋の日影は明る過ぎるほどよく晴れ渡つた午後でした。私はうつとりとうなだれ勝に、洋傘のかげに伏しかくれるやうにして、雑木林の多い田舎道を歩いた。

最初『時處は貴女からおきめ下さい』つて云はれてたのですけれど、

それは胸をつく當惑の一つでした。雜然たる新橋停車場の群集の中では一分時たりと立話してるわけにも行かなかつたので、『兎も角こゝを出ませう』と場外へ出ると、何處へ足の向けやうもなかつた。

『さ、どつちへ行きますえう』

『さア、ねえ、』

と小首をかしげたが、あなたのいゝところへ、と云ひ切つてしまつては四郎さんも迷惑だらうと思ふと、それも云はれず、同じ心にやゝしはしためらつてゐた四郎さんは、やがて決然と、

『ぢや好い、僕の行く方へついていらつしやい！』

『えー』

と息を詰て答へ乍らも、そこに力強い男性の權威と頼しさを感した。

さうして幾度か甲武電車を乗替たり、汽車に乗つたりしてこの吉祥寺驛に下車したのでした。

目的地なる井の頭辨天池畔の秋色はまだ淺うございましたが、水面をおほふばかり可憐しい淡紫の萍がいつばい咲いてゐました。

千草の中に輝く星のやうな野菊の花、朗らかな小鳥の聲は『秋』といふことをしみく思はせる。

人目を避けるともなしに、二人は知らずく、池の週圍の帯のやうな石徑に分入りました。滅多に人の通らぬところと見えて、篠竹や茅や薄や、背丈を没するばかり。泳ぐやうな手つきで掻分けてゆく。邪魔な袂の絆や紫が、あでやかに日に照り榮えました。

ずるぶん大きな池で、いくら行つても行つてもはてしがない。引返し

ませうか、と云はれたけれど、それもくやしいから先へくと。うづ高
くつんだ落葉に、つるりくと千代田草腰がすべる。一步ふみ外せばど
ぶんと水中へ、おつこちなければなりません。

わたしは足元にばかり心をとられて、きはめてゆるやかに歩をはこん
でゐたのですが、森とした大氣の中に四郎さんの呼吸の、苦しさうには
づむのが氣になつた。心臓が弱いつてかねぐきいてゐたので。……
ひよつくり釣をしてる人によつかつて膽を消したり、足すべらしてあ
なやと縫つた芦の葉に指を切つたり、裾も袂も犬じらみ（草の實）だら
けになつて、やうく一週を終つた頃には、夕陽をうけた杉の森が黄金
のやうに光つてゐました。

散策の人たちもう歸りつくしてしまつた後の、とある茶店に小やす

みして、池の上へ突き出した欄干に腰かけた私は、四郎さんのりんごむく手つきや、黒八丈の襦袢の襟ののぞいてる首筋を、深いいとをしみの中にちつとみつめた。

その手首や頸筋から先の、くつきりと日に焼けてゐるのが目についてこれが三千哩にあまる行程、異國の港で百度以上の炎熱と戦つた記念かとおもふといたくしかつた。

こんな事は女の私がして上げるべき役目だと思ひ乍らも、私は知らぬ顔して自分の分まで四郎さんにむかせておいた。だつてナイフが一挺しかないんですもの。

齒形をあてるとひやりと泌みる。抛つたしんは水に浮いて白い花のやうでした。氣味のわるいもりだの龜の子なのが、それをつゝきに浮き

上つてくる。

鴉だか鴨だか、よく水をくゝる鳥は、黒豆をばらまいたやうに遠方に
澤山並んでゐる。

先刻から二人は、言ひ合せたやうに黙つてゐました。わたしは何にも
云ひたくなかつた。いはなくつても四郎さんには、わかるやうな氣がし
てたんです。なまじつか下らない口をきいて、切角の情緒を打ち壊して
しまふ位なら、だまつてた方がいゝと思ひ定めてから大變心がらくにな
りました。

『そろ／＼出かけませうか』とうながされても、私はいつまでもこゝ
を立ち去りたくはなかつた。意地になつて凝視する動かぬ水の面からは
かすかに腦のふるふやうな悲哀と、酔ふやうな静寂のにほひが立ち上り

ました。

縁臺に立てかけといった洋傘を手にとると、象牙の柄がひやりと濡れたやうに冷たかつたので、おやもう露がおりてるのかとびつくりした。

つるべ落しの秋の日脚は、みる／＼黄昏の底に沈むでゆきます。白銀のとき穂薄が肌寒い夕風に閃くのも、薄い刃物で襟元を撫でられる様な気がする。

まあ何といふ寂寞な夕暮であつたでせう、私はしみ／＼哀愁に打たれて、重い足が一步も進まなかつた。一つには四郎さんとお別れするのがいやだつたからかも知れません。

見返ると音もなく仄闇の紫は、森の彼方からひろがつてまゐります。

あちこちの伏屋の軒から夕餉の煙が夕霧と溶化つて、ペールの様に青い薄暮の大空を包みました。

驛内の倚架に倚つても、私はちつと洋傘の柄に額をあてたまゝであつた。四郎さんは立つてあちこち歩いてゐらした。その裾短かな小倉袴の下から現はれる毛脛がなつかしかつたりした。

自分の周囲の知人の多くは、頭髮や服装などに笑止なほど心をつかつてゐる中で、飾り氣のない四郎さんの様子が、ほんとに嬉しうございました。それに四郎さんは、見るからに初心な少女達を惹きつけるやうな優男ではありませんでした。それだけによけい畏敬の念も起させた。

私は汽車中の人となつてからも、窓がらすに前髪をすりつけるやうに

して、暮れゆく窓外ばかり眺めてゐた。胸中には掻きまわりたいほどの高感が千々に亂れてゐました。僅にあまされたところの最後の二三十分間、急に惜しまれ出してたまらなかつた。

玩具のように小ぼけな、青いくつじよんの車室には、他に乗客もありませんでしたが、ふと、

『この汽車が何處までも何處までも、走りつゞけてゐればいゝやうな気がする』

『えゝ、』

と私は夢からさめたやうに四郎さんの顔を見上げた。ほんとうに私もそう思つてゐましたの。そしてさうならいゝと願つてましたの。

でも四郎さんのお口から、こんな感傷的な言葉が出やうとは思ひで

した。

中野驛へ下りた時分にはもう眞暗でした。電車に乗るまへ四郎さんはふと足をとめて、

『貴女はこれから如何なさいます。』つて有仰る。私はうつむいて小さく大地を蹴た。

どうつて！ どうしませう、どうしたらいいのでしやう、お別れしたくない。このまゝちや、このまゝちや、泣きたいほど物足らないのですもの。が、言葉は出なくつて、涙ばかりがさしぐむのでした。

際限なくだまつてるので、四郎さんはまた思ひ決つたやうに『松本様かブランドンへ行つて晚餐を食ませう、ね、お差つかへはありませんか、御迷惑ではありませんか』

私はかすかにうなづきました。そしてやつとすこしはほつとした。これでまた二三時間は御いっしょにゐられると思つたからですわ。

夜の甲武電車は何となくもの悲しく、怯えるやうな氣持さへ起させました。先年落合の火葬場へ亮様のお骨あげにきた時、柏木からこの線に乗つたことのあるのを考へ出した。それも四郎さんに云はれて。………はじめは何のことかわからなくつて二三度問ひ返しましたが………

日比谷の公園を抜けると、たまらなく甘い、ものなつかしい木犀の香が、ほのかにたゞよふて來ました。私は半分夢心地で地を踏んでゐました。かうして四郎さんと歩いてると云ふことが、亡い亮様にも現在の四

郎さんにも、どちらにも済まないやうな氣がしてならないんですした。

心づけられてはつと顔を上げました。階上階下の軒先に紅い提灯をもしつらねた平野屋の門口をくぐるときには、東京の内にゐるやうな氣はしなかつた。一寸大阪の實家に似てゐた。

が、座敷へ通ると、私の心は憎いほどおちついてしまひました。すつと一隅にコートを脱ぐと、急に身體の半分ほど細つた、――肩のあたりの小寒いやうな氣がし乍ら、食卓を中央に對ひ合つた。四郎さんが背にした床の間には、雪の様な白菊の大輪が匂ふてゐました。

此家の家風だとかつて、女中達の嶋田監の京都風なのや、なごやかな京辯もなつかしかつた。栗や松茸の京都料理がはこばれて、泡立つ麥酒は二つのコップに満たされました。「衷心から君の御努力をよろこび、御

成功をお祝ひ申します」つて四郎さんはお約束通り、それを一息に半分ばかり乾されました。私もこわく乍ら、そつと唇につけました。私は「あなたの御健康を祝するため」と心の中でいひ乍ら。嫣然と見上げて笑つた。

四郎さんの耳朵にも直きに紅色が上つた。殿方のやうにもなく、お酒には弱い方でした。貰ばかりふかしてゐらつしやいました。私は何心なく、お幾歳なのかときいてみました。そして私より一年お兄様であることを知りました。そんなら私の方が少し位馬鹿だつて仕方がないわ、とやつと肩の荷の軽くなつたやうな氣がいたしました。

熱した頬には冷たい金属の塗骨や、絹ハンカチの接觸がたまらなく心地よかつた。みはつてる腫が溶けさうで、疊に片手を突いてさゝえなけ

れば、座つてゐる上半身がふらくした。

ビールにもせよ日本酒にもせよ、どんな場合でも今まで私は、絶対に排斥しましたが、今夜は何だか冒險的、……ほゝゝビール一杯に冒險も可笑しいけれど、いたゞいたらどうなるか自分にもわからないんですよ。でもよござんすかと云ふと『お飲んなさい、大丈夫ですよ、僕がついてますから』と四郎さんは笑つてゐました。他の人にこんな事いはれたら、私はきつと怒ります。えゝ怒つてやる。けれど四郎さんにはかりは、かへつて甘へたいやうな心持にもなつて、あのしぶつたくほろ苦いのをがまんして飲んだのです。あたかも酔のまはるのを娛しむやうに……

此家を出たのはまだ宵の間だつた。

銀河一道ほの白う中天に流れて、露の滴りさうな星月夜!!

ひどく動悸が高まつて胸苦しいのと、頭がふらくするのとで足元にもたよりが無い。『そんな時にはすこし歩きなすつた方がいゝでせう、ちき醒めますよ』と云はるゝまゝに、數寄屋橋々畔を左へと折れる。

その道々ぼつりぼつりと寂しい口から交された二言三言! わたしは四郎さんを何といふ沈鬱な方だらうとおもつた。否、あの満州旅行からお歸りになつてから、こんなにお變りあそばしたんです。私の臆病風は杞憂ではなかつた。あのめまぐるしいまでの御元氣にみちゝてゐた御出發前の生々したところは失せて、ほんとに底しれぬ洞窟の様な、暗い重々しい近づきがたい氣分を起させる。

『貴女は男性に對して反抗心を持つて被居いますか。』

ふと、こんな事もきかれた。

『あら、小笹様。否！』

と、びつくりしたやうに面を上げると

『さうですね、さうのやうですね。』

とそのまままた黙つてしまはれる！

四郎さむ、實際のことを申せばね、私あなたの、その愛すべき眞面目にふれてからは、自分の従来男性といふものに對して有してみた見解や侮蔑や反抗の念やが取かしくなつて來ましたの。

『エンマゴールドマンやエレンケイや、乃至はイギリスあたりの「フエミニズム」は、日本の男にも容易く理解され、且つ同情され、容れられそうに思ひます。』

が「ヴァチニズム」と有仰るのは、やさしい同情は惹いても、容易に受け容れられさうに思はれません。僕は何となく悲劇的色彩を帯びてゐると感じます。さうしてあれちやまだ徹底してゐない………』

と言ふやうなことも有仰つた。わたしは無言のまゝでうつむいた。

暗いお濠端の秋の夜風は、栗立つた酔さめの頬をうそ寒く吹いてゆきました。

○

切角長いあひだ期待してゐた會見が、先日のおれちやあまりに物足りませんでした。

もつと打とけて下されば、親しくして下されば、姉様のやうに振舞

つて下されば、………かの卓抜不撓なる御努力のつかれを、たとひ
一少部分でもお慰めでできればうれしいと、かねぐ旅の道中おもひ
おもふて返つて來ましたものを………

そのお手紙を繰り返し乍ら、私は顔におしめて、肩をふるはして泣き
入つてしまいました。

四郎さん、

かたくろしいのぢやございません。氣取つてるのでもございません。
ましてや君の人格を、どうのかうのと、そんなこと夢にも思つてなるも
のですか。否、自分が自分自身に對するより以上、信じてゐますわ。で
すけれど、ですけれど、これ、こんなに涙がとめどもなく流れるのです

もの。わたしは四郎さんが恐かつた。否、否、四郎さんに對する自分自身があやぶまれた。恥かしうございました。堪忍して下さいまし。

『戀ぢやない、戀ぢやない！』

と、頭をふつては押しのけますけれど。……

『戀する必要なんてないんだもの。四郎さんはたゞ好きな人、氣の合つたお友達！ それだけのことぢやないの。何も……何も……』

何でもないと云ふ下から、私はもうく寂しくつてくたまらなかつた。何ものかに取纏つて大聲をあげて叫びたい様な氣がする。泣き崩れてみたいやうな氣がする。故しらぬこの頃のこのおもひ、訴へてすねて甘へて、それを純な心持で容れてくれ、慰めでもされやうといふのは、四郎さんの他にありさうもなかつた。否、四郎さんといふ人があればこ

そ、かういふ慾求も起るのかも知れなかつた。

あゝ こんな事しちやゐられない、こんな事しちやゐられない。ちやどうすればいゝんだ、どうしたらいゝかわからない！ と私は一日くを、うつけたものゝ様に過してゆく。思ふともなしに頭の中は、四郎さんのことで充満になつてゐた。

樂しかるべき少女時代を、とほしい家計のために苦しめられて、勉めるやうに欲しかつたリボン一筋買つて貰へず通して來てしまつたことを思ふと、我ながら涙のこぼれるほどいぢらしいあてつけや執着の念が湧いて、いつまでも長い袂を惜しんだり、正氣の沙汰ぢやないまで派手な柄など選んだりしてゐましたけれど、いつのまにやら私ももう二十を越した女でした。

むかしむかし十七八の時代には、前途は何か眩しいやうな、五彩の放光に面も向けられないやうな気がして、………それほど輝いた、そのくせ正體も知れない幻影を捕へやうくと的もなく、『めんない千鳥』のやうにおひまはしてたのでございますわ。

あぶないからと、手を突いて下さうとしたのが亮様!! 行きたくもない方へ無理に連れて行かうとなさるので、いやだと争ふはづみに腰が聞いた。美しかった幻影は、ばつと破れてしまいました。

あゝ、いつまでも、夢見てあることがゆるされるなら幸福でございますけれど、おそかれ早かれ、一度は呼びさまされねばなりません。いづれは何處かへつまづくか、瀕へでも陥るか、どうせ無事ではすまぬ人生

の長い行路ですもの。それを、亮様をのみうらんだのはわるうござい
ましたが。……

が、わたしはすべてをすてゝしまつた。藝術も、戀人も、友人も。

現實世界の醜さ冷さ淺ましさは、淡紫の空想の國から脱け出して來
し、怯えやすい乙女の靈の、行くべき方ありませんでした。いつそも
う何事も見まいきくまい、とその後は我から兩手で馬車馬のやうに、目
かくしをして、足元ばかりみつめ乍ら歩きました。ばかでした、ほんと
に馬鹿でした。さうして四郎さんといふ道づれを得なかつたなら、私は
どんな方向へ迷ひ込んで行つたか……。……。

四郎さんは教へて下さいました。『リットル、アイヨルフ』の一節を引
いて……。……。

リタ。

どつちを見たらいいのでせうね、あなた——？

アルメルス。

(リタに眼を注ぎ)上の方を。

リタ。

(同意するやうに頷き)さう——上の方を。

アルメルス。

上の方を——山の頂の方を、星の方を、そしてあの大

沈黙の方を。

リタ。

(手を差しのべて)ありがたう！

霊の世界に生きやうとしたアルメルスも、肉の世界に生きやうとした妻リタも、一度は一子『小さきアイヨルフ』の死によつて、絶望の底に沈淪したのですけれど、兩人はかういふ歡ばしい第三帝國に、安住の地を見出しました、つて。

私たちはこの結末に行かなければならないんです。問題は「生とは何ぞ」ぢやなくて、「如何にして生くべきか」なんです。あゝ私も感謝の手をさしのべて、ありがたう！ と叫びたくなりました。

海の彼方の空遠く

幸ひ棲むと人のいふ

われ人ともに尋め行きて

涙さしぐみ歸りきぬ

海の彼方になほ遠く

幸ひ棲むと人のいふ……

いつからか私はまたこんなロマンチストの歌を、口にするやうになりました。

○

ですけれども、もうむかしの人につゆ未練はないまでも、私に二度目の戀をえがく日の來やうなんて。……

最初はたと理解をのみ求め合ひました。しかし、しかし、理解は同情を生み、同情は愛を伴ひます。「愛するとは知ること」でございましたものを。……

『愛するとは知ること』

四ヶ月前の私には、こんな言葉を肯定することが出来ませんでした

が……

むかし亮様と私との間には、何よりも大切なこの理解といふものがかけてゐた。それがすべての悲劇の發生の原因であつた。

では今度のが、眞實の眞面目な戀でせうか？

否え、否え、否え！ 單純な少女の戀とはちがふんだ。何もかも知りつくした上ででありながら、……

恥かしい!! やつぱり自分は戀を戀してゐるのであつた。何の目的があるでもない、何の要求があるでもない。たと堪えがたく戀しい、懷しい、逢ひたい、見たい、話したい、……私は自分乍らわけがわからなくなつて了つた。これが何の戀であらう。戀ぢやない、戀ぢやない。でも、四郎さん、わたしはあなたにすまない、すまない、く。何で

もいゝわ、たゞすまないのよ、堪忍して下さい。と机の上に俯伏して、
聲をのんで泣いたこともありました。

憎からねばこそ、たわむれにもせよ、姉弟とまで呼び合つた、あの感
激の多い血の熱い四郎さんが……四郎さんが……。

自分に慕はれるほど不幸な人はないといふことは、わたしはよく知つ
てゐました。ですから、——運命によつては四郎さんが學校を卒業する來
年の七月きり、また何時逢へるやらわからぬ、長い——遠い別離となる
かも知れなかつた。——わたしはそれを望んだり呪つたりした。

『内藤様、僕を買ひかぶりなすることはいいけません。よく／＼見抜い
て好加減の程度をおきめにならぬと、幻滅の悔みに陥り給ふ時、僕は世
にも大いなるしれものになります』と四郎さんは始終云ひ／＼した。

が、わたしは今いまはどんな人ひとに對たいしても、渾然こんぜんたる人格じんかくを求もとめてはゐない。むしろ欠點けつてんに同情どうじやうを持もつことが出來できる。四郎しろうさんが欠點けつてんが多おほければ多いだけ、共鳴きやうめいが深ふかくなるかも知れないのだつた。

自己主義者エゴイストだと四郎しろうさんは自稱じしやうしてゐる。それで結構けつこうだわ、自分じぶんだつてさうなんだもの。四郎しろうさんの態度たいどに熱あついやうな時ときと冷つめたいやうな時ときと、ひどく感傷かんしやう的な時ときと現實主義げんじしゆぎな時ときとある。その頭腦づなうの動搖どうごうの徑路けいろも、わたしはよく察さつすることが出來できた。そして他人ひとごと事のやうには思おもへなかつた。

わたしはもう、人ひとに愛あいされやうなんて念慮ねんよは露つゆほどもありませんでしたの。それだけに自由じゆうであり、大膽だいたんでした。それや私わたしだつて誰だれにでも、嫌きらはれるより好すかれる方がいゝにはちがひないけれど、けどどうでもか

まはなかつた。自分には手腕がある、といふ自信もあつた。その一舉一動が、いかに世上の異性達の欲望を燃しつゝあるかと云ふことも自覺てゐた。

それがすつかり四郎さんには囚はれてしまつた。あまり思ひ上つてゐた罪だらう、と自ら嘲つても見ました。

ですから四郎さんを戀しむよりも、どうかしてこんな思慕に打ち勝たうとのみあせつた。旅行にでも出たならば、ともおもひました。

あゝあの北海道の落葉樹の森へ!! オレンジ實る南方の明るい島へ!!

おほせのこと一々同感です。しみぐと旅愁を味はつてみたいと仰るおん心持ち、この頃の自然に對する私のセンチメントに比べて

お察し申します。僕も行きたい。いゝえ、一度は踏み出さうと決心したのですが、非常なる努力を以て抑へつけてしまひました。氣ちがひになりはしまいかと思つたからです。……其後精神上肉體上に、それほどの苦腦を受けてゐたのです。黄色く露にぬれた落葉を踏んで、獨りとぼく歩いて行く自分の姿を想像したとき、頭を襲ふものは旅愁位ではない、と少し恐くなつたからです。ちつと踏みこらへてこの秋を送ります。……………

まあ、何をそんなに悶えてゐらつしやるのでせう。何の不安に惱んでゐらつしやるんでせう。私は何だかまたわけが分らなくなつてしまひました。さうして悲しくなりました。心細くなつて來ました。『やつば

り自分は自分ばつかりがたよりだ、』としみぐ思ひました。

冷やかな風が木の葉を鳴らし、後れ毛を吹き頬を吹いてゆく。まなじりからは玉の様な涙がすゞろに流れ出る。

お互にこの秋の夜なくは、青白い電燈のもとに咲く黒薔薇のことく、各々の沈黙と思索とに送らねばなりませんでした。



内藤様、あゝ言ふうら悲しいやうなお手紙を見ると、私は肩を撫でて云ひたくなります。——僕は敵ではありません、味方です。僕も氣の弱い人間です、人様に對して惡を謀らむことのできない善人で

す——と。それが貴女にとつては何の役にもなりませんけれど。
強くなりたまへ、強者であり給へ。筆を呵して天下に呼號する、……といふようなお氣持と勇氣が、君の御胸に充ちくむを祈ります。いつもく僕は君の傑作を待つ一人です。

こんなお手紙を見ると冷汗が流れました。四郎さんは何にも御ぞんじない、私はしらばづくてゐるんですもの。そして、小さくおどくと震へてゐる、ほんとにかわいさうな雲雀なんですもの。どうぞ卑怯者なんて云はないで下さいまし。

四郎さん、いろく案じて下さるわたしが、あなたのためにこんな思ひにわづらはされてゐるときいたら、あなたはどうかさいいます？わた

しはそれをいちばん恐れしました。あなたに知られる、といふことを。

『貴女の悲哀に同情する。——古き殿堂倒れて、新しき權威いまだ建たざる、同じ過渡期の空氣に生くる一人として、その悲しみに共鳴します。今年の秋は僕がそれに襲はれた。そしてそれは若き者によつてのみ同情し合ひ、理解せられる悲しみです』つて。

『過渡期に生れた人々は、毎日「相反せる二つの要素」をあくせくとこねまはしてゐるんです』つて。『憂愁と懊惱に苛々として、自らを引き裂いてゐるんです』つて。

『自分が見放したくなつた、飽きたらない。——』

と仰つてもかまひません。むしろそれが建設の第一歩だと、大きい

れば大きいだけに大きい第一歩だと歡びます。けれどもほんとに愛想をつかしたり、自己放抛をなすつては、先第一に直諫するものは僕です。』
つて。

『貴女には拙むことのできぬ天才がおりなんぢやありませんか、赫灼たる未來が待つてゐるんぢやありませんか。』

強くなり給へ、大きくなり給へ、――

が、それまで悲しみの盃を最後の一滴までのみ乾さねばなりません。倒れたらまた起きる。轉んでもつまづいても、我が一生は向上の一路でなければならぬ!』つて。

四郎さんのこのお言葉は、私に代つて云つて下すつたやうな氣がしま

す。さうです、わたしは私は屈くつしはしないわ。ですからこんなに苦くるんでますの。
自分じぶんがえらいものになりたいばつかりに、戀こひすることを恥はぢのやうに思おもひ
ます。えゝさうなんです『處女しよぢよ』は人ひとなんぞ戀おもふものぢやありません。
高たかいところで燦然さんぜんと輝かがやいてゐなければやならないんです。ちようど、神秘しんひ
の森もりの中の星ほしのやうに……。

○

小笹こさささま、

かんにんして下くださいまし、わたくしがわるうございました。お目めに
かゝつたつて仕方しかたがないなんて、あんな無茶むちゃなこと申まをしましたの
は。氣きの立たつまゝにあとさきの考かんがへもなく……。

暮くれの御試験おしけんがおすみになりましたら、わたくしのためにどうぞ一日のお暇ひまをお割まき下くださいまし。今度は眞面目まじめですわ。先日いつかのやうにぼんやりしちやゐませんの。しつかりとお話はなしするから…… 萍相談ひょうそうだんとは申まをしませんわ、きいて頂いたきたうござんすの。さうして何なんとか力ちからづけてやつて、…… 鞭撻べんたつしてやつて下くださいまし。叱しられたつてい、んですの。…… もうく自己反省じこはんせいと價値かちづけの苦痛くつうにはほんたうに疲れ切きつてしまひました。かわいさうに身みも心こころも……。毎日まいにちくたどぼんやりと暮くらしてゐます。ものを考かんがへるだけのあたまありません、まるでからつぽなの。どうしたらいいんでしやうねでも、どうしやうにも仕様しやうがない。わたしどうしたらいいんでしやう、…… あゝどうしたらいいんでしやう……。

會へたらどうする！ どうするつて、どうするつてこともないけれどそこに何ものか得られることがあるやうに、力強く期待されたのでした。

その日障子張の手傳ひすると、朝からいつばいに取散らしてた私はもしや午後からお伺ひするかも知れないつていふ御通知に接して、あはてゝ鏡の前に打ち座つた。風邪を引いて二三日くすぶり返つてゐたことが急に悔しい。髪を結げたり洗水などつかつてゐる内に、まだ足音もきこえぬ先から、何だか胸騒ぎがしてはつと直覺的に閃いた人影があつた。まもなく玄關に案内の聲がする。けど白粉を半分塗りかけのまゝの顔では、出るにも出られずひとりやきもきした。

母さんは客火鉢にお火を入れ乍ら、まだお年若な方なのだねとびつく

りしてゐらつしやる。御老年の故で何でもくどき、のお祖母様は、座敷へきこえやしないかと私のはらくしてゐるのもかまはずしきりとどんな人だかつてきゝたがりなさんと、母さんてば事もなげに、なに、栗の毬みたいな方ですよ、だつて。私は思はず失笑してしまふ。

あまり塗り過ぎて眞白な顔が氣になるけれど氣の急くまゝに平常羽織の襟かき合はすや飛ぶやうにお座敷へ行つて、躍る手を襖にかけた。

が、明るい白晝にかう近々と、顔見合せたことはありません。その故か、今日まで胸の中で育くんできた四郎さんとは別人のやうにちがつてゐた。たゞ濃い眉の印象ばかりがそのまゝであつた。私はその人の膝に縋つて泣かうと楽しんでゐた涙を、またのみこんで花やかな笑ひ聲を立てなければならなかつた。たとへその胸中にはどれほどの、清い情や熱

い煙をたくわへて居られるにもせよ、あまりに取つく島もない様な態度なので。……眼と眼と合つた瞬間に、すうと腦中をよぎつたものはまづ幻滅の感じであつた。

火鉢を中に差し向つても、とかく會話は途絶勝でした。何となく壓せられるやうな氣持で。……四郎さんも座布團も敷かないで、かたくなしくなつてゐらつしやる。その初心さが可愛かつたが。……おゝ！
かすかに潮の遠鳴がきこえます。まるで心のなごむやうな……。

『海岸へでもいらして御覽になりませんか、』

あまりの手持無沙汰さをまぎらすために、こんな事も云つてみました。室内だから改つていけないのかとおもつたのです。シヨール引きまどふて先に立つたが、四郎さんの、その足駄みたやうにおそろしく高

い朴齒はうはの日和下駄ひよりげたが、ザクリ／＼と砂路すなぢには歩きにくさうで氣きになつてならなかつた。

松林まつばやしの中なかの一本道ほんみちを四五町行ちやうめきつくすと、突如とつちとして眼前がんぜんにひらけるある色の海うみ！ 灰色はいいろの砂濱さひんがはてもなくつゞいて、渚なみさには眞白まっしろに浪頭なみがしらが轉まばる。生憎あらにく富士は雲間くもまにかくれて見えなみい。おだやかなやうでも海邊うみべは風かぜが強つよいので、つい話聲はなしこゑが吹き飛とばされてしまふ。

二人ふたりは漁船ぎょせんのかげに横座よこすわりする。砂すなが冷つめたい。薄日うすひが眩まぶしい。いくらマツチをすつても／＼風かぜにとられて、四郎さんしろうさんの蕒たほこの火ひはなかく／＼點つかなかつた。紅まゐちくくのすり殻がらが四邊あたりに散亂さんらんしました。それを袂たもとでかこつて上げやうとは思おもつても何だか得えしないで、私は眼めのやりばに困こまつた。あらぬ方かたを遠とほくちつとみつめてゐると、くら／＼と世界中せかいぢうが眞暗まっくらになつて

ゆくやうに感じる。あたまが痛い！ 『藤村の「春」に丁度こんなシーンがありましたね、』と云はれて、さうですかと私は何の感應もない顔をしてゐた。朝日新聞にあれの連載ゐたころは、私は幾歳であつたのだらう。それつきり讀まないのですっかり忘れてしまつてゐる。それに四郎さんらしくもない、小説を引きあひに出すなんて。……と不平だつた。

けふはわたしの心が非常に荒びてゐる。いつもこんな事はないのに、すべての感受性を失つて了つてゐる。何か言はなければならぬ、何か言はなければならぬ、と苛々するが、一言も口に出ない。

四郎さんは丁度その夜から帝國劇場で開催される、東京アマチュアダラマテイツク、クラブの脚本、タゴール作の『チトラ』の梗概を話てき

かせて下すつた。えゝ／＼と私はぼんやりきいてゐたが、たゞその中で『眞實』と『理解』といふ言葉だけが、刻まれたやうに耳に残つた。

ちよつとの間に大變風が烈くなつて、小砂利交りの砂がばら／＼と顔にぶつかる。見る／＼袖や足袋の上にも積る。寒くつて／＼身體中總氣立つてきた。でも四郎さんが何とも仰言らないので、唇をかみしめて堪へてゐたけれど、とう／＼たまらなくなつて立ち上る。と、ます／＼吹きつゝつて、さながら背後からおし出しでもするやうに、裾も髪も空中へ吹き上げやうとする。お袴を穿いてらつしやる殿方は平氣だけれども、私は烈風の日と云ふと、つく／＼日本服の不自由さを呪はうとする。逃れるやうに歸途につく。

風かげの道に出るとほつとして、わが兩手を頬にあてると、四郎さん

はやゝ吐るやうに、それでも笑談がましく、

『どうしても話は出来ませんか、困りますね。』

『ほんとに困りますわね、わたし。』

笑つて見せやうとしても、私の面上には苦痛の色のみ動いた。だまつて袖を抱えて歩行をつゞけました。

『僕歸京たら手紙を書きます。』

『わたくしも！』

さう云ふよりほか仕方がなかつた。

四郎さんはこれから片瀬から七里ヶ濱傳ひに鎌倉へ歩いて行くのだと云はれる。うらめしかつたけれど私には、止めることも出来なんだ。ほんとに今日は切角の半日を、私のためにどんなに責え切れぬ、不愉快な

おもひをなすつかわらないでしよ。その埋合せをして下されば、自分の罪も幾分か輕むわけだと思つたから。それにしても悲しかつた、どこまでもいつしよについて行きたいやうな氣もする……。

途中で幾度か別れかける人を、母さんをだしにつかつてやつと家まで引張つてきた。冬の日の暮れやすく、妹と二人で電車の停留場まで御送りしたときは、もう夕靄がほの／＼と、小松林にたなびいてゐました。妹は私に甘へて他愛もなく、もつれ乍ら歩きました。私も相手になつはしやいだ聲をキヤツ／＼と立てました。

四郎さんもお故郷にはお妹さんがお一人おありになるとかね／＼承つてゐましたが、何故かそのお妹さんのことは此方から云ひ出すのがためらわれました。だつても何だか、お約婚でも被居るんぢやないかと云

ふ様な氣がして。——ゆめく嫉妬ではございませんけれど。——實際
四郎さんに對しては、私は不思議なほど嫉妬の心はもちませんでした。

『妹ほど心配になるものはないでせう』としみ／＼云はれたときには
ホロリとしました。『妹さんは立派に教育なさらねばならない。一人前
の婦人として、立派に一人でやつて行けるだけの、自由意志と責任の觀
念の力を養つて上げなさらねばなるまい!!』

そんな風に云はれると、私は人知れず吐息をもらすばかりでした。自
分の頭上の蠅もおひ切れないくせに、妹の教育どころではありません、
と胸の中でいひつけてゐました。

『さや、あの、これから鎌倉へ行らつしやいますのうー』
薄ぼんやりしたブラットホームの電燈の下に、私は顔をそむけたまゝ

で云ひました。

『否、眞直ぐに歸京ます、』

四郎さんは急に苛々したやうにマントの肩をゆり上げられる。

『さう、ちや彼方側からお乗りになるんですよ。』

單線の電車は二十分おきでなければ來ないことを熟知てゐながら、

『さやうなら。』

『氣をつけていらつしやい、御足勞様でした。小母様によろしく。』

『さやうなら。』

無心の妹はいちばん元氣な聲を出す。私はその手を執つて足疾にすぐと歩を返した。誰を送つて來ても、乗り込まれるまで待つてゐないことのない私が、今日にかぎつてなぜこんなに歸りをいそいだか、自分乍ら

わけがわかりません。でも、早くひとりになつて、ちつといろんな事を考へて見たかつたからですわ。

滅多に人氣を得ない奥座敷に、今宵は珍しく煙草の煙やらうらなつかしい氣配が、いつまでもく立てこもつてゐました。わたしは尉になつた客火鉢の埋み火かきおこして、卓子にもたれかゝつたまゝ、久しい間身動きもしませんでした。

自分はいま戀なんぞしてゐられる身分ではない。もつとくしなればならない急務が澤山あるんだ！とおもふと眼の底から熱い涙が湧いた。

すつかり忘れはてゝゐた、わたしは自分の藝術といふものを！ 努め

なければならぬ、はげまなければならぬ、振ひ立たなければ……。……もうくよくくと物なんぞ考へこんでるひまはなくなつて了つた。あゝ早く夜が明けてくれゝばいゝ。明日から活動するのに！ とやたら兩腕をふりまはしたいほどわく／＼する。

妄執の雲吹き晴れて、その夜はどんなにかすが／＼しい歡喜と、勃々たる元氣が渾身に充ちあふれたことでせう。こんな事ならもつと早々とお目に懸つて了へばよかつたものを、……何をぐ／＼してゐたんだらう、何をおそれてゐたのだらう？ と、その意久地なさを自嘲つてやつた。さうして眞に四郎さんから、不言の御教へを受けたことを感謝しました。げにその足下にひざまづいて、敬虔なクリスチャンのやうに額に

手をくんでもくやしきはなかつた…………。

○

その翌々日だかでした。妹を相手にせつせと年賀狀を書いてゐますと思ひがけない和田様がお見えになりました。氣取つたオーバなんか召して、見ちがへるほど勿體らしくハイカラにおなりで、まあ、御成人あそばしたのね、お髭が、と私はいきなり笑つてしまつた。四郎さんに引き合せて下すつたのは和田様のおかげ、と云ふことは私はいつも忘れはしません。ゆかりあれば、むさし野の原戀しきならひ!! ほんとにおなつかしかつたんですの、お久しぶりで…………。

制服のお膝をきちんと正して、生眞面目なお顔にお眼鏡を怖らしく光

らせ乍ら、相變らず滑稽なことはかり有仰つてお笑はせなさるんですもの。もう家内中がお腹を抱えて可笑涙をこぼしました。

四郎さんのお噂も出ました。何氣ない様子をし乍らも、私は胸を刺されるようでした。かくしだてをするわけぢやございせんけれど、……四郎さんが一昨日こゝへいらしたことも、告げていゝのかわるいのかと感つて、だまつてゐました。何だか出し抜いたような氣がして、……すまなくも思つたのですもの。

ほんとに正直な可愛い男だの、些とも融通が利かなくつて、すこし弄かふと直ぐ耳朵を眞紅にして怒り出すの、熱情家だの勉強家だの秀才だの、それからあんな無骨な顔をしてゐながら、なか／＼の艶福家でいんな女に思ひつかれて困るんださうだのつて、面白さうにお話なさいま

した。私もその一人かとおもふと苦笑せずには居られなかつた。

『けれど貴女なんかのお目から見たらまるで子供でせう。小笹は姉様
が欲しいく』と始終云つてゐるんですから丁度いゝ。どうしても貴女は姉
様の役まはりですよ。』

『まあ、』

と仕方がないから笑つてましたわ。ばつと面ぼてりを感じながら――。
和田様にはいつも私の性格の半面しか、お目にかけては居りません。そ
んな女丈夫扱いにして下さいますな。恥かしいから……。

ねえ、おわすれあそばして？ 和田様、ほゝゝ。

『貴女は女らしい優しい中にも何處か雄々しい一片の意氣地があつて。
……けれどくセンシチヴな青年の目には、あでやかな笑顔のうちに

も、いたましかりし過去の思ひ出、まだいえやらぬ心の悶は確かに讀めました。――』

こんな事有仰つて私を安つぽい感激にお泣かせなすつたり、屹度々々常乙女の生涯を文藝に捧げる、つてことを天地にかけて誓つたり……お互に若うござんしたよねえ、ほムムム。あの時分の私は、亮一様に對する同情者がいちばんうれしかつたんですもの。和田様もまた未見の先輩だとかつて、亮一様を大變崇敬し、好意を有つてゐらつしやいました。

けど『處女主義』の觀念だけは、いまでも昔も變ることではございませぬ。何と冷嘲されても攻撃されても、これは私の唯一の誇りでもあり武器でもあり強味でもある。ですからちゃんとあの當時から、『どうぞ貴

下も幾年かの後、もうあのおすゝめは取消しです、なんて有仰らないやうにして下さい』つて申上げといたちやありませんか。いまさらいくら口を酢くして説いて下さいまして、こればかりは……。

『大きな戀の祝福の貴女の上にあらんことを祈ります。』なんて、ほゝムムム。

御自分達御兩人の御幸福を、私にも分けて下さりたくなつたのでしよ。わかつてゐますわ、お安くないのねえ、ほゝムムム。もう以前の無邪氣な小見じみた、制服の素足に下駄穿きなんていふ、蠻的書生さんの面影はどこにも求められない。それや變りますわね、二星霜の間にはねえ！ 和田様も大人におなり遊ばしたのねえ！

『さびしくつて仕方がないんですもの、もし小時ね』と止めても、汽

車の時間をいそぐからつて、むりにふり切つて辭し去らるゝ後姿を、玄關に膝突いたまゝ私はぼんやり、見るともなしに見えなくなるまで見送つてゐました。

○

とうとうまた新しい年が來てしまひました。待ちもせぬのに。……雨上りの麗らかな元日でした。四郎さんにはどんな新春が來たかしらと、朝床を離れ乍らすぐ思ひました。私にとつては嬉しくもなし悲しくもなし、寂しい平凡なお正月。花やかな晴の衣裳の紫紋服も、友禪縮緬の長襦袢も、久しい間簾のひきだしに盤踞したざり、……手を通す必要さへないのでした。

着替をする氣にもなれねばお化粧だけすまして、頁數ばかり多い新聞は讀むのも面倒でぼんやりとお炬燵の掛布圍の上に頬を埋めたまゝ、三ヶ日を夢のやうに過してしまひました。

帝都はどんな有様かと思ふと、床しいような憎らしいような、妬しい氣がするのですが、毎日々々下らない年始狀ばかり多く來て、待つてゐる消息はなかくまゐりません。松の内いつばいぐらゐはいつも郵便物があくれます。

舊年の暮に投函されたものが、五日もかゝつてやつと着いたりするのですもの。

四郎さんからは『カルタの歸り路』つて題した夢二の繪はがきに、『この繪は僕もきらいですけど、この女の、撫肩のようすが、千代子

さま、あなたに似てゐますので、お送り申します』なんて、いつになくほんとに酔つばらつてでもゐらつしやるやうな口調で、亂暴書にぶつつけてあるのが珍しかつた。その繪は私もしやな繪でした。男の方には消の棒線が引いてあつて、その太い棒線のシヨールの端で口元をおさへ乍ら、すねたやうに少し顔をそむけた女の、内輪にした草履ばきの大きな足元だけがすこし似てゐた。

その表面には、

酔つばらつて……酔つばらつて、今晚は、どうも失禮。……

酔つばらつて……酔つばらつて、魂を抜かれた僕に、浮ぶ二つの幻影。……

それは、瞳の黒い、髪の長い、ばら色の唇の、そして魚の血の流れ

た、戀人の、面ざしと、

一丈二尺、雪のみのちのくの、匂ひの高い、白樺の森。――

この謎の様な言葉を繰り返しく、私はさまざまに思ひ亂れた。四郎さんの戀人つてどんな女！ときいてみたい様な氣がした。

御旅行先、――豆州の温泉場なんぞから書いて下さるお手紙は、――

旅に出ると四郎さんも、すっかり感傷的におなりでした。そのしみぐとした、やるせない情緒に胸を打たれて、――やつぱりく自分と共通した點の多い四郎さんを見出すのでした。長い間見失つてゐた人が、戻つて來たやうにもうれしうございました。

それにこれまで姓のみ呼び合つてゐたものが、いつのまにやら千代子

様と、親しげに書かれるやうになつたのも面眩かつた。わたしは何故か最初からこの君のことは、四郎さんくと云ひなれてしまつて……。

でも面と向つては……否、御宛名書にすらそんな慎しみのない氣配はゆめにも洩らしはしませんでしたけれど。――

だつて四郎さんは今までに、いくたび私から離れて行かうとなすつたか知れません。あはてゝ止めやうと取継るまもなく、また戻つてはいらつしやいましたけれど。……かくしてらしつたつてわかります、私はいつも直感しました。――そしてくやしがつて泣きました。ゆくものをして未練なく行かしめよとは知り乍ら……。

當時^{たうじ}わたしはちやうど創作^{さくしやく}の方面^{はつめん}についても、一種^{しゆ}の轉換期^{くわんぱうき}ともいふべき位置^{いち}にありました。

いくら悶^{もだ}えても苦しんでも、なんにも書くことがなくなつてしまつたんですもの。そこにかぎりなき空虚^{くうきよ}と、倦怠^{けんたい}と、むしろ絶望^{ぜつぼう}に近い疲勞^{ひろう}とを覺^{おぼ}えずにはゐられませんでした。

去年^{きよねん}の十月^{じふがつ}以來^{いらい}机上^{きしやう}につみ重ねた原稿用紙^{げんかうようし}は、ちりにまみれたまゝいつまでも手^てもふれられなかつた。四郎^{しろう}さんのいはゆる『着手^{アインシュエーション}の臆病^{おびやう}』といひますか、殊^{こと}に私^{わたし}はそれに苦しめられるのでした。一度^{いちど}感興^{かんきやう}が乗^のつてきてさへしまへば何^{なん}でもないものを、それまでの空^{そら}しさ寂莫^{さびし}さ、切^{せう}な

さ、惱ましさ。書齋へ足ふみすることや、机邊へ近づくのがおそろしかつた。いくたびか自暴自棄の心にもなつた。自分はもう駄目な人間だとかきらめもした。

私はそれを絶ず四郎さんに告へました。否、否、強ひつたのです。でも、でも、さうでもしなければ、このたえがたい不安、焦慮の持つてゆきどろがなかつたのですもの。

創造の苦しみはすべての人の忍ふべきこと。

貴女一人負けて下すつてはならない。

元氣を沮喪させなすつちやいけません。

寂びしいのは貴女一人ではない、僕も寂しい。

誰でもみんなさみしいのだ。はど卑怯にも目をとち耳をふさいで、意識や反省を揉み消してゐるに過ぎないのだ。

こんな言葉をきくのが、せめてもの慰めでありました。

『どうすれば貴女の氣を引立たせる事が出来るんです？ 貴女にも早く感激の日が、今一度狂喜したまふ日は来ないものでせうか？』の何のと四郎さんは躍起となつて下さるのに、その好意をうれしいと微笑み乍らも、私はひとり冷たく自己を嘲つてゐた。

その頃二人の間の手紙には、『戀愛』といふことについて云ひ合つてゐ

たのです。私もそれまでは避けやう／＼として來たこの問題を、眞面目に考へてみるやうにもなつたのですから……。

四郎さんは戀の讚美者でした。『我々の若き生命に、せめてもの實在は第一に戀である。藝術も信仰も凡てのものが、この戀を通して考へらるべきものであらう。僕は哲學も宗教も智識も、戀ほど刺戟のないことを發見した。大いなる歡喜も、大いなる悲哀も戀から來ます。最も生甲斐を感じしむるもの、汝の名は戀である。いくら言葉を並べても足らない。恐らく七夜を語り明すとも。——』

萬有何ものかはかなきものなからんや？ 太陽の光りも消える。星も磨滅する。人生もはかない。戀もはかない。

戀は儚さが故にすべからざるものならば、人生もまた空なるが故にす

べからざるものでせう。自分の知つてゐる神はまだ小さい。僕はまだ靈魂をしつかり握つてゐない。萬有の實在を疑ふ空虚の中に、只一つ戀のみが光度の強い燭光を放つてゐる。

一つのはかなき戀が終焉を告げて、亡びゆくローマンスをなげく涙の中に、人は眞に觸れ、美を見出します。人生の根本理に眼がひらけて來ます。

若い創作家の作品に到底老人の及ぶことの出来ない澄冽たる生命の眞が躍動してゐるのは、この哲理を考ふるからではありますまいか。

運命の貴女を祝福せんことを祈る。そして偉大なる藝術を生まむことを祈る。』

かうした信念を有つてらつしやる四郎さんを、私は美しいともおもつ

た。妬^{ねた}しいとさへ憎^{にく}んだ。そしてその言葉^{ことば}を否定^{ひてい}しました。何^{なに}にも知らない四^よ郎^{ろう}さんが、何^{なん}にも知らない四^よ郎^{ろう}さんが、……いとほしくもあつた。恥^はかしくもあつた、腹^{はら}立たしくもあつた。

小笹^{こささ}様、

運命^{うんめい}ののろひか祝福^{しゅくふく}かはぞんじませんけれど、もしも私^{わたし}にほんたうの激^{はげ}しい戀^{こひ}の感激^{かんげき}の來^きる日^ひがありましたなら、それは大^{おほ}きな苦悶^{くもん}と悲劇^{ひげき}をかかすもとである、と云^いふことを深^{ふか}く覺悟^{かくご}して居^ゐます。世^よの人のいふ『幸福^{かうふく}』は、私^{わたし}には用^{よう}はありませんもの。

私^{わたし}の眼^めには法律^{はうりつ}もない、道徳^{だうとく}もない、因習^{いんじゆ}もない。たゞ自分^{じぶん}自身の『眞^{しん}』に従^{したが}つて事^{こと}をなすのが、いちばん正^{ただ}しいことであり、また最も生^{なま}

甲斐のある生活であるとおもつてゐます。

ですから私はどんな事をしでかすかわからないのですけれど、そこはよくしたもので、さうく突飛なまねも出来ませんものね。相手がないのでせうか、わたしの執着が薄いのでしやうか。それとも私には到底戀の出来ない人間ではありませんまいか？　が、何ものか………戀よりもつと大きく、廣い愛が自分にはあるやうな氣がします。

『否、僕は貴女に戀が出来ないとは思ひません。また平凡な戀が出来るとは思ひません、——いはゆる幸福なる戀が。但しそれは貴女がそれを欲しなからではなくて、貴女の自我がそれをさせるのでせう。』

私はだまつてしまひました。わたしは自分で自分の知らない長所や短

所まで、四郎さんにはしつかり擱まれてしまつたやうな気がする。身動きも出来なくなつたやうな気がする！ 悔恨と羞恥と淡い屈辱とに、私の双頬は火のやうに燃えたり、氷のやうに白く冷え切つたりしました。

『うんと勉強しなければ！ えらいものにならなければ。………少くとも四郎さんなんか………』

負けてはゐられないのだ、と齒がみをして叫び出しました。私はしや二無二創作の方面へ頭を突き入れやうとした。それですべてを見返さう、——否、まぎらさうとした。しばらく圖書館にこもつて思ふさま讀書もしやう。あらゆるものを讀破して、心の眼を開けて來やう。私は奇蹟をつくらねばならない。世界中のどんな戯曲にも作物にも、まだ現はれてゐないやうな女性になりたいのが望みなんです。さうしてそれが、自分には出来ると信じてゐますの。

とにかく上京しやう、と私は或る夜奮然として急に行季をとゝのへま
した。

○

割前髪に緋のカチューシャリボン。うすクリームのヴェールふはりと
石膏の様な厚化粧。派手な刺繍模様のある紋縮緬の紫紺の一式に身を包
んだ私は、二等室の中央にきちんと取すましておりました。

流石さまぐの豫想に胸もとときめく。幾月ぶりかでの上京の途次です
もの。大船から急にどや／＼と入り込んだのは、横須賀線からのりかへ
の海軍士官。玩具のやうななあいらしい短剣ぶら下げて、肩切りのマン
ト。その中の二人は丁度わたしの隣席に。

あまり満員なので身動きも出来ず、顔は見えねどその子供らしい活気のみなぎつた笑ひ聲。滾々と煙草の煙を吹きつけられるのは閉口だけれど、おはなしがおもしろいので、つい読みさしの雑誌もそのまゝ聞き惚れる。おもに南洋方面のことなので、はじめて今日は南遣艦隊が凱旋の當日であつたことに気がついた。

『今度東京驛からやつて来る時にはおしらせなさい、迎ひに行つて、上げませう。あの干鯛くさい松林中の椋鳥サンが、迷宮へでも迷ひ込んだやうに、うろくとおもしろからう』なんて、人のよくない友人達におどかされてたので、まさか氣にするわけではないけれど、すこしは不安なやうでもありましたの。いよく下り立ちますまでは。……

身を切るやうなお濠端の朔風を角帆の車上に避けつゝ、久しぶりで須田町邊の夕暮もなつかしく、煤煙に黒ずんだ西空には暗紅色の霞ぐどい夕映が、これも都會の色と美しかつた。

母の實家である叔母の家へつくと、一同に挨拶もそこく。着替もせぬ内せかくと萬年筆走らせて、わたしは四郎さんへ手紙を書いた。どうしてもく、お目にかゝらずにはゐられなかつた。

翌日四郎さんからは、折り返して御返事が來ました。

『明夕五時、日比谷公園（電車交叉點の門より入りて小高い丘の上の番木の下）に待上候。』と。

わたしは日比谷公園がきらひでしたけれども。……その日は朝から

泣き出しさうにうそ寒い、灰色のしぐれ日でした。早過ぎぬやう、おそ過ぎぬやうと苛々し乍らも心をつかつて、きちんと時刻に電車を下りましたが、生憎ぼつり／＼落ちて來たので、困つたものと袖打ち拂ふて、たのむ木陰を見まはす間もあらせず、

『内藤様！』

と背後から馳けるやうな疾足で。わたしははつと伏目になつて迎へました。何だかけふは四郎さんが大變なつかしい方に見えたので、こんな筈ではなかつたが、とおもつた。二人とも傘なしなんです。大いそぎでカツフエーマツモトへ入りました。

電燈の明るいあたゝかい、小綺麗な小さいホールでつゝましやかに食事すませました。今夜は素敵に感じがようございました。ほゝ、ビヤ

にはもうこりましたもの、尋常^{じんじやう}にサイダーの杯^{こづま}をあけて……。

四郎^{しろう}さんはやつぱり、優しい男^{をとこ}らしい頼^{たの}もしい方^{かた}でした。何故^{なぜ}先日^{このあひだ}はあんな幻滅^{げんめつ}の感じ^{かんじ}がしたのだらう、と奇異^{きぎ}におもひました。大へんお兄^{にい}様^{さま}らしく。——と云^いふより此方^{こちら}がばかに若^{わか}やいだ氣持^{きもち}ではしやいでゐた故^{せい}でせう。

その夜^よの私^{わたくし}は活々^{いきく}と、輝^{かがや}いてゐるやうに見^みられたと申^{まを}します。何だかうれしくつてたまらなかつたんですもの、表現^{ひやうげん}の感興^{かんきやう}が潮^{うしほ}のやうにおしよせて來^きたんですもの。これなら書^かける、きつと何か書^かける！ やりさへすれば自分^{じぶん}には何^{なん}でも出^で來^きる！ と云^いふ自信^{じしん}と、四郎^{しろう}さんと私^{わたし}との間^{あひだ}を結^{むす}びつけるものは藝術^{げいじゆつ}の力^{ちから}である。これを他^{ほか}にしては何^{なん}にもありはしない。月並^{つきなみ}の戀^{こひ}におちゐつてはならない！ とちやんと覺悟^{かくご}を定^きめてゐ

ましたから……。

ストーブの傍を放れて、私はそつと硝子障子を開けてみました。と、まあいつのまにやらすつかり晴れた空には、思ひがけない星が燦爛とまじりいてゐて、櫻樹の梢に引かゝつた病葉まで、夜目には丁度花の様でした。あら、と思はず心からよろこびの聲を立てずにはゐられませんでした。背後から四郎さんも顔をお出しになりました。わたしは怯えたやうに息がはずむだ。

まだ宵の間乍ら夜の公園は、噴水の音のみ高うございました。強烈なアーク燈の光りや、折々疾驅してくる自動車の燈火に、くつきりと照らし出される二人の姿を、行き合ふ人はみなチラ／＼といやな視線をあび

せて、うさんらしい氣持の直覺せられたこともあれば、妬ましさうな眼色の光るのを、わたしは暗い中ながら感じた。が、そのために何等の壓迫も覺えはしなかつたけれど、ふるゝともなく君がマントの、肩や袖に擦れ合ふたび身を細めて路の片端へくくと避けました。

霞ヶ關を上つて赤阪の方へ抜け、あふひ橋から眩しい銀座の光りの街に出て、果物ホールの階上で紅茶をのむ頃には、顔見合せても仕方なくほゝ笑むよりほか、會話のたねもつきてしまつたけれど、……でもまだ別れたくはなかつたんですもの。もう少し行きますえう、もうすこし、と双方氣兼ねし合ひ乍ら、とうく本石町まで歩いてしまひました。

わたしに貸して下さる筈の書物を、四郎さんは一包ひつさげておられ

ました。ふと心づいてそれをこの時受取つたのですが、重いおもの重くないおものつて、腕が抜けさうなんでももの。まあ、とあきれると共にもうくお氣の毒でたまらず、心なしであつたことを、ひたあやまりにあやまりました。

『否、僕も非常に氣持がよかつたからです。それでこんなに引ぱり歩いたので濟ませんでしたが、貴女の感興は僕の感興です』何事も心にかかせ給ふな。と慰められても、すまなくつて、すまなくつて！ きつと四郎さんはもうわたしを煩はしく、いやにおなりなすつたらうと思ひました。なぜだかそんな氣がした。で、急いでのがれるやうに電車に乗りました。でも窓からのぞくと、四郎さんはまだ此方を見送つてゝ下さいました。

○

今日は瑠璃様からの電話で、急に歌舞伎座へ御一緒することゝなつた。

ふと思ひついて四郎さんへ手紙書く。

お友だちに招かれて、これから歌舞伎座へまゐります。

對照がおもしろいから、有樂座へも一寸行つてみたくなりましたの。
御めいわくでもおつきあひ下さらなくつて？
明晩か明後晩。座席

は御いつしよにとつておきます。

さうして和田様もお誘ひ遊ばしませんこと？
あの方はおしはめは

あまりお好きなさらないのかも知れませんでしたけれど。

勝手なことばかり申上げまして、失禮のなん幾重にも御ゆるしを。
出先に立つて氣がせきますから、これで左様なら。では御都合のほどを、至急御返事頂かして下さいますし。

いまの若い人達の一部にもまだ、お芝居行と云へば二日も三日も前から髪のことやら、着物の心配やらに夜の目も眠られず氣がもめたり、お茶屋の二階に寝ころんで、着到のシヤギリの音をきくのが何よりの愉快であるのといふ江戸趣味のグループも残つてゐるときくものを、さりとてはあまりに雑風景な、いつも足元から鳥の立つやうな思ひ立ちで。

あちらへ着くと、丁度瑠璃様もいまいらしたばかりのところだ。

『あら、まあよくお早く！』

『貴女こそ。またせんだつてのやうに、お待ちせなされるのかと思つて
ましたのに………』

幾月ぶりで合せて顔なれど、今更改つての御挨拶なんぞ交す様な間柄でもなく、小ちやな手あぶりに友ぜんの小布圍かけた置炬燵に手をさし入れて、前髪と後髪すりよせる。

舞臺はいま序幕の『女暫』が、高島田に紅梅の花をいつばい挿した侍烏帽子をいたゞき、紫の紐ふさぐと結び下げ、萌黄色地に目も彩な金銀絲ぬひ縹模様の振袖。絆縹子の下襲重ねなる裾長う引いて、その上

に柿色素袍の大紋。美しいちりめんの襦袢を見せた片肌脱ぎで、長サ一間もある大太刀の反打つたのを一ふりふれば、無數の素ツ首ころ／＼と西瓜店でもひつくら返したやう。赤面腹出しの荒武者どもを、弱虫めらと嘲りつゝ、ヤットコトツチャア、ウントコナ、の掛聲で花道への引込み、あきれ顔に見惚れてる私の肩を一寸瑠璃様のおつきになつたのは、お兄様がいらしたからでした。

男の方たちは氣樂でいゝわね、學校からのお歸途と見え、角帽冠つてインキ壺ぶら下げたまゝ。少し座をひらく二人の膝の上へ、だまつてお置きになつたボール箱は、青木堂のシュークリーム？　ね、さうでせうほゝゝあたつたでせう。

まあ誠様もこの頃は目立つてお口のわるくおなり遊ばしたと。それ

や負けてなんかやしないけれど、ほゝ、だからまだ／＼駄目ですよ。
憎まれ口も皮肉も、そんな毒のない、灰汁の脱けないことではね。

英國へ御留學中の義夫様のことやら、露西亞へ御赴任あそばした丹波様のお噂やらも、それからそれへとつきない。おまけに頬張るのと兩方だからほんとにいそがしくて！ その間にはお茶もつく、繪本も見る。

チョン、チョン、チョンと呟えた廻りの析が響く。あら、と急に座り直してそちら向く。誰もく、胸そゝられて堪え切れぬやうな微笑が唇邊に湧き上るのですもの。賑やかな幕あきの三味線の音がきこえ出す。美しうござんすのね、やつぱり。どうして人間の皮膚にあゝも白粉のつくものかと思はれるほど、白く濃く瀬戸物のやうに光つて。白粉のために男性の太い粗い線も、すっかり塗りかくされて、丁度いゝかげんに

見えるのですわね。女形のきゝぐるしい音聲も、なれゝば別に不自然ともおもひません。むしろあれだけの柄や聲量のあつた方が、見栄のするやうな氣がします。たゞあまり澤山侍女達などの並ぶとき、まるで半女の様なものがあるのは滑稽ですけれど。

ポーンと響く入相の鐘！ 海上に漂ふ夕燒雲の色も薄れて、荒涼たる北海の漁村は、けふも暮れてゆく、暮れてゆく…………。

丈なす黒髪を無造作に束ねて肩に投げかけ、かひなくしく裾をからげて、あたりの様子をうかどひ乍ら、とつおいつ、行かんとしてはまたもためらふ。思ひ悩んだ乙女の白い顔が薄闇に…………。あはれ江戸に憧る心、引かるゝ我家、磯のとまやの秋の夕暮！！

幕切に美音の佐渡節、が寂莫を破つて沖の方から流れてきます。

來いとゆたとて行かりよか佐渡へ、

佐渡は四十九里浪の上——。

ズーンと髪の毛の根の引きしまるやうな、もうたまらない餘韻を引いて……。私は肌寒いまで身にしました。

『ちよいと、けふはあんまり尤物も見えないやうねえ』落膽ねえ。と瑠璃さま、耳に口あてゝくすぐたくさやく。もうおそ過ぎるんですもの、中日過ぎちやねえ。やばつり開場て三日目か五日目位が舞臺も観客も緊張し切つて、一番ようござんすのねえ。

私たちが舞臺以外の見ものとして、いつも物色するのは、東西の鶉棧敷に藝者がづらり、といふところなんです。實際水ぎは立つてますからねえ。髪の恰好、衣紋つき！ やつぱり日本髪はいゝなあと思つてつく

づく見惚れてしまふ。自然であらうが人巧であらうが、見た目に美しく感じさへすれば何でもいゝちやありませんか。あらまさか、眞似がしたいつていふわけちやありませんけれど。

玉の光りを包むやう。わざとくすんだ姉さんたちの中にたち交つて、緋の襟、友禪の振袖、前髪をかざる花櫛、眩ゆいまで輝く銀色のびらびら、藥玉かんざし、緋鹿の子かけた結綿、おしどり、唐人髷、濃艶牡丹花をあざむく雛妓たちは、まるで蕉園様か成園様の繪枠から脱け出して來たやうだ。よく食べてよくしやべつて、その間には懷中鏡ばかりのぞいてゐる。しかし可愛い、うつくしい。たまく平土間のあたりに、イルミネーションの光輝燦然たる女優卷や、飛模様のお羽織なんぞ召したハイカラさんがゐらつしやると、笑止なほど不調和に見えますの。

四時過ぎに誠様のお友達ともだちの北村様きたむらやまがいらした。溫和おとなしさうな品のいゝ方かた。同じ様ような細かい飛白かすりのお羽織はきりで、同じやうな刈方かりかたの頭髮おつわして、あつち向むいてゐらつしやると、どつちが何人どうちだかわからない。私たちは後うしろの方はうにつゝましく並ならんで双眼鏡ダブルズまさぐる。

御兩人おふたりの間あいだには盛さかんに氷滑談スリートダンが交かされて、………諏訪湖すわこへ遠征えんせいの目算もくざんやら何やら。ほゝゝあまり御氣焔ごきえんが過すぎると、切角せつかくの氷こほりが溶とけ出だしやしませんかしら。廊下そとへ出でませう、と背後うしろの唐紙開からかみあけて立たち出いづる。

肉色地にくいろちに白しろく櫻さくらをぬひつぶした半襟はんえりと、立粹たてわくに菊きくの地紋ちもんのある藤色金ふぢいろきん紗縮緬しよぢりめんの召物めしものが、抜ぬけるほどお色の白しろい瑠璃るり様さまにはよく映うつつて、ふつくりと辭くのない學習院式がくしゅういんしきのお束髪くし。殊ことに生はえ揃そろつた襟足えりあしなんぞのお綺麗きれいなつたら！ 誰だれでもこんなひとに人の心こころを惹ひくものと、私わたしは背後うしろからほれば

れ見入つた。

場内に満ちわたる潮のごとき人々のどよめき。晝間から瓦斯や電燈の煌々たる中にゐては、夜との境めがはつきりしませんけれど、暮るゝに従つて益々景気の濃やかになるのが感じられる。たゞ表通りの電車の軋りの、夢のやうに響いてくるのが、やるせなく物悲しい。兩女は手を引き合つて三階へ行つてみる。

御園化粧室の入口に立つて一寸のぞくと、千客萬來の大繁昌、入り代り立ち代り、きれいな娘さんたちや令嬢方が、お鼻のあたまでの塗りかへやお髪の手入れに従事してゐます。見てゐるとおかしいわ、ほとんど眼中無人よ。神経的に素早く眼と手が働くらしい。氣の弱い私たちは傍へもよりつけやしない。……さうして襟を突いたり、帯の結び目を叩い

たりして、鏡面をふり返りく名残惜しげにやつと離れる。と、もう澄ましたお顔して連歩静かにしなかりと群衆の中へ…………。

運動場にはいろんな賣店が並んでゐますわ。かあいゝ小間物だの袋物だのおもちやだの手拭だの、…………みんな役者の紋や當狂言にちなんだもので、…………艶に氣が利いてゐて、どつち向いても欲しいものだらけだけれど、どれもこれもおねだんが方外なので、横目にみて通り過ぎてしまふ。ともすれば立ちどまる瑠璃様をうながして！好きな繪葉書二三枚だけ選んで場所へ歸る。

私のいちばん待ちかねてゐた中幕『扇屋』が開いた。兩女とも食べさしてゐた竹葉（鰻飯）の重箱とお箸を兩手に持ったまゝ、…………置くのも忘れて、…………ほゝゝゝ。

無意味なものと云つてしまへばそれまでだけれど、いつそお芝居を見るならば『女暫』やこんなのがおもしろい。形の配合や見た目の變化だけでもね！ それにのんきでよござんすよ、批判の外に超越してるんですもの、すべてが……。

歌右衛門の扇折子小萩、嶋田聖、黒地友禪の振袖、ふり下げの帯。長い裾引いて奥の薄暗いのれん口から出て来た時の可愛らしさ、水々しさ。ふつくらした頬のあたり、——あの上總に上座に招ぜられて優々と、女姿をそのまゝに男性にかへつてゐる間の力味を含んだ白い顔が、絶て久しい美登利さんの俤を思ひ出させた。

再び元の女の身振に、『そんなら旦那さん』で嬌然したあたり。上總ならずともはつと平伏したくなるほどの品位があつた。

きはどうい場合で笑はせるのねえ、ほゝゝ。敦盛卿詮義の姉輪の平次主従が現はれると、舞臺の上は喜悲劇をごつちやにぶつくらかへした様なものとなつて、おまけにあの紅い陣羽織着て筒袖のどてらみたいなきつけにあらいだんだらの穿附袴穿いた木鼠忠太の、眼尻の下つた眉の短かい、髭のあとの青い、白塗の何ともいへぬ道化た顔が、まあ幾代さんの御良人に酷似なので、一人失笑してしまつた。ほゝゝあの御夫婦にみせて上げたい、御夫人がどんなお顔をなさるでしやう？

態谷直實が深編笠を脱ると、まるで紅生姜のやうな顔色だつた。その割羽織に野袴が、馬上で引抜くと鎧姿になり、それと同時に小萩小女臈も、忽ち變る優美の公達、互に日の丸の陣扇かざして、さらば、さらば須磨の浦にて見参せんと、五條橋畔畫面の見得！ 敦盛卿の凛々しさ、

愛々しき。

わたしはどうしてもどうしても歌右衛門がいちばん好き、つていふとまあ女形をーとか、あんなおちいさん、半身不随みたやうなもの、などとみな驚いたやうに云ふ。だつてあんなに若々しく美しいちやありませんか、だからなほのことえらいのちやありませんか、と私はいつも躍起となる。氣品と云はうか威嚴といはうか、おいらんになつても田舎娘になつても、ついで放れぬあの凛として犯しがたいところがたまらないのですもの。

瑠璃様はまたひそかに懷中鏡入にまで橘くづしの刺繍があるほどで、云はずと知れた羽左衛門好み。やせつぼちなあの役者が、ね、黒の羽織なんか着流しの時の横顔は、あなたの亮様に似てゐると思はない？ な

んで、ふいと私の膝をつねつたりなさるのですもの。その手を拂ひのけて袂で打ち合つて笑ふ。

二番目狂言はスツキリした、羽左の六三の大工ぶりが呼びものなのであらうけれど、私にはあまり用がない。あゝ膝も痛くなつた。午後から打ちつゞけにかう座らせられてると、疲れてもくるし、飽きても來ますの。見残して歸つても、惜しいなんとはちつとも思はない。

『觀劇の後と戰勝の後には悲哀が來る、』なんていふのは西洋物にかぎることですわ。えゝ、だから話せないつて、ほゝゝ。さうですとも、何だかうかくとこんなもの見てゐる暇はないやうな氣がするんです。まだるつこしくてなりません。

仁左の舅吉兵衛とむこの六三が、義理にせかれて閉て切つた格子戸の

内外で、頑（がん）はない子役（こやく）を抱（かか）りしめての愁（しゅう）歎（たん）のあたり。週（いっ）園（えん）であまりスウ／＼と鼻（はな）を噤（しず）る音（おと）やせきばらひにまぎらす氣配（けはい）がやかましいので、私はふとそつちを見ると、御隠（ごいん）居（き）も若（わ）夫人（ふじん）もお内儀（うちぎ）さん（も娘（むすめ）さん達（たち）も、みなハンカチ咬（か）みしめて泣（な）いてゐる。私はばかりしい氣持（きもち）になる。すまない事（こと）だが眠（ね）くつて、あくびをおし堪（こら）える涙（なみだ）ばかり出（で）る。視線（めくせん）は舞臺（ぶたい）の人の動作（どうさ）をおふてゐても、頭（たま）の中（なか）は空虛（からづ）なんです。

『あゝもう一度（いっど）以前の（いぜんの）やうに、…… あんな驚（き）異（い）の眼（め）をもつて、すべての事物（じぶつ）に對（たい）してみたい！』

としみ／＼云（い）つたけれど、理（り）璃（り）様（さま）は私の膝（ひざ）の上（うへ）においた右（みぎ）手（て）を、私の弄（も）ふがま／＼に任（まか）せ乍（は）ら、恍（うつ）惚（と）と熱（ねつ）心（しん）に見（み）入（い）つてゐらつしやる。やつと二十（た）歳（さい）のふところ子（こ）、花（はな）やかに幸（さい）多（た）い御（ご）境（きやう）界（がい）の瑠（る）璃（り）さまには、わたし（こ）の心（こころ）

もちはわからない。

曾ては二なきものとも愛したこの女を、四郎さんを得てからといふもの、わするゝともなく遠ざかりゆく……。おもへば恥かしい、何事にも一途なわたしは、同時に二人の親友を持つ事さへなし得ないんです。

○

その晩歸ると四郎さんから、速達の御返事が着いておりました。和田にはかけちがつて逢はないし、そして彼の下宿へ誘ひに行く時が目下ありませんから、おうけあひは出来ないけれど、もしさうだつたら代りに他の友達を一人引張つてゆく、とのことでした。私は含笑んでそつと唇におしつけました。

芝居より歸れば君が文つきぬ、わが世もたのしかくの如くば。

晶子さんだかのこんな歌を思ひ出したので…………。

翌日和田様から電話がかゝつて來ました。きゝ覚えのある活潑な聲で、小笹がね、明晩有樂座へいらつしやいませんかつて！ あら無論その筈なんぢやありませんか、と云ひかけてはつと心づき、え、え、ときゝ返すと、僕もいつしよなんですから大丈夫ですよ。あら、と颯と耳の根まで紅くなつてしまつた。ほゝゝだけど、だけど…………、あ、ちや待つて下さい、一寸、一寸、待つて下さい。いま小笹が出来ますから、とあはたとしく。はいはい、はいと此方はつり込まれて無意識に返事してると、

『もしく、僕小笹ですが、』

お友達訪問に出かけて行つた。さうして夜に入つてから歸つて來たら、先刻三時過ぎに荒川さんが見えて、明日是非大相撲へ御案内するからとの御招待でしたよ、と叔母が云ふ。私は思はず舌打ちした。

お角力だつて見たくないことはない。否、一度は是非見ておきたく、でもほかとちがつて滅多に適當なおつれの出來ないことを、歎じつゝあつた折である。けど明日といふのが……あひにくかち合ふんだもの。有樂座の方は五時からだが、……此方の都合もきかず氣の利かぬ人だと、罪もない荒川さんに怒りつけたくなる。が、切角の好意に對してもそんな事は云はれず、浮かぬ顔してゐると、『これがお芝居ならさぞうれしうせうに、御愁傷ね』と従妹達が弄かふ。ほゝゝ四郎さんといつしよならね……。

○

翌日は午前十時過ぎ、荒川さんが迎ひに來られたので出かける。淺草橋あたりからもうその方面行の電車はギチ／＼の満員で、黒山のやうな人だかり。茶屋の若い者にみちびかれ、定めの場所におちつくまで、何だか顔が上げられなかつた。國技館の内外の景氣が殆ど殺氣立つてゐるのですもの、まご／＼すれば突き飛ばされさうだ。

やゝ小高い見物席から見下すと、中央の土俵が闘牛場のやうでもあるし、また重々しくしぼり上げたその濃紫の幔幕や、紅や青の經木モールでかざられた屋根やが、四月八日の花御堂か、お宮様然とした感も起さ

せる。四本柱は四季の色にかたどるとかいふ、青白赤黒の布で巻かれてその根元には厚く座布団を重ねた上に羽織袴の『年寄』が、泰山のごとく控えてゐる。その中の一人がづぬけて大きい。それは以前の横綱大砲だと教へられた。

場内はさながら大波の絶間もなく打よせるやう、轟々のどよめきに充ち渡つて、頭髮と云つたらちようどランプ掃除の棒みたいなのや、房揚子のお化みたいなのや、中にはいが栗のやうなのもあつて、身體にはお灸の痕やら膏藥だらけなのやら、手足に繃帯したのやら、赤黒い肉塊が砂の上で轉がり合ふのです。甚だ醜怪に見えました。行司の服装は恵比須様そつくりでそのたまりなどは黄や青や白や紫や、とりぐの色彩が美しい。

出ては引込み、すぐ代りが出て、バタ／＼とかたがついてしまふ。その早いこと！ 目にもとまらぬやうだ。どつちが負けたのやら勝つたのやら、とてもわかりません。

時刻の進むにつれ場内は、人がふえる一方でした。ぞろ／＼ぞろ／＼まるで蟻の観音まゐりのやうに。男七分に女三分位の割合、やつぱり花柳社會の女たちが多い。荒川さんのおつれの方たちもお揃ひになつた。けどみんな殿方ばかりなので、私はおとなしく背後の方に引退つてゐた。五人づめの窮屈さに身動きも出来ぬ。足が痛くつて／＼！ お辨當いたゞくひまもありやしないのよ。幕間といふやうなものもなし、打通しなんですもの。そのくせそんな中でお酒が始まる。わたしは日本酒のお燗をした香ひときたら、胸のむか／＼するほど嫌ひだ。殊に隣棲敷の連

中は酒宴酣で、もう十二分に酔のまはつた様子。丁度前の通路を通りかゝつた、新橋邊の見える二人づれ。ひとりとは束髪、ひとりとは銀杏返しの、襟元白い撫肩にはお揃ひの紫紺ちりめんの羽織を、滑りおちさうに着てゐました。

酔客の一人は突然その手を執つて引張つて、いろんな笑談をいひかける。私は他人事乍ら颯と頬に血の上るのを覺えた。衆人の面前で同性がこれほど……。えゝ、失禮なことをなさるな、と一喝してやりたい！唇がふるふ。

が、力強く振り拂ふわけにも行かぬらしい客商賣の彼女等は、周囲の人々の方を見て、あはれみを乞ふやうに苦笑しました。私は職業の悲哀といふことゝ、女によつて女が侮辱されるとをしみぐ思はせられた。

三階だか四階だか、見上げるやうな天國の邊にまで見物はウヨ／＼。
まあこのペンキ塗の鐵傘下には、幾千の頭顱がうごめいてゐるのであらう。ところ／＼の瑠璃窓から、水のやうな大空がのぞいてゐる。私はその空のみがなつかしかつた。館外へ出たい氣がいつばいになつた。上京以來毎晩の睡眠不足がつゞいてゐるので、あたまがふらく／＼する。

かみころすあくびの數と共に、番數もだん／＼取すゝみました。行司も足袋を穿いたのに變つた。登場力士の進退動作も重々しくなつた。體格も色艶も立派になつた。

呼出奴、——タツツケ袴穿いて芝居の出方みたいな風をしてゐる——
は、土俵に上つて扇を口にあてゝ、透きとほるやうな美聲を張り上げて
『ひがあし、何とかやまあ、にいし、何々——』

すはやとばかり、兩戰士は羽織つてた着物はねのけ、東西のたまりから飛び上つて来る。と、行司は西は西、東は東の、見物席の方へ向き、『此方何々、此方何々、』と軍配をあげて紹介する。が、何とも名狀しがたい満場の喧々轟々に打ち消されて、ちつともきゝとれない。仕方なしにプログラムと首つ引きた。

力士は向ひ合つて、ボン／＼と手を打つ。四股とか云ふものを踏んで手足の筋肉をのばすだけのばして了ふやうな眞似をする。唾を吐く、鼻をかむ、水を飲む、鹽をつまんでふりまく。銀砂を腋の下などになすり込む。

拳を砂上に突き立て、双方にらみ合つてゐて、ヤツと行司が引く團扇もろとも、三人の意氣のピッタリ合ふことは滅多にない。こちれてくる

といよく待った、待ったばかりで仕末にならない。行司の氣の揉み方
つて氣の毒なやうで、當の兩人以上の大苦みらしい、油汗をたら／＼流
してゐる。義太夫でいへば三味線引きみたいな役まはりね。

まあこれやお角力を見に來たんぢやなくて、仕切直しを見に來たや
うなものねと笑ふ。終ひにはみんな疳癰玉破裂さして觀客席が湧き出
し『敗けつちまへ』『いゝ加減にしろ』『馬鹿野郎』『引込めツ／＼』な
どと盛んに冷嘲怒罵の聲が降る。

けど本氣に力の充ち渡つた時には、颯と血の色潮してぶる／＼つとお
臀の肉がふるへて神経的に双方の身體中の緊張するのが、私にだつてわ
かりますわ、はらくしますの。が、切角立ち上つたかと思ふと、突嗟
の間にもう勝負がついてしまふ。大きいから勝つとばかりは無論かきら

ず、細いのに肥大たのがづでんどうと投げ出されたり、うんとこしよと持ち上げてものがく奴をつり出すのもあり、遠くから兩手を出してちよんくちよんく突つき合つてる内に膝を突いて了つたり、士俵の外へ飛び出して了ふのもある。取組んだまゝたまりへ轉げおちたり、四本柱の年寄の上に倒れかゝつたり、平手で相手を張り飛ばすのなんでもあるし四つにがつしり組んでしまつて、いつまでも局面の展開せぬのは水が入る。引分にもなる。

中には勝負に苦情がついて、『預り』なんかにならうものなら大變なさわぎ。最負々々の彌次と聲援にのぼせ上つて目が舞ひさう。思はず兩手で耳をふさぐ。

奮戦の名残、光澤々々しかつた鬚の毛も亂れて、大たぶさのはけ先が

横よこちよになつたり逆さかさになつたり。でも勝名乗受けた方はようござんすが、一方いっぽうはずるぶんかわいさうちやありませんか、穴あなあらば還入はいりたいやうな氣きがするであらうとおもふ。よしや負けたのが恥辱はぢではなくとも……。肉體にくたい的てきにも精神せいしん的てきにもいたくしいほどの打撃だげきを與あたへてよろこんでるのですわねえ。いつたいまあこんな競技もく、どこが面白おもしろいのでしやうねえ、熱狂ねつきやうする人々ひとぐの氣きが知れない。勇壯ゆうきやうでも男性だんせい的てきでも何でもありやしない。

土俵どへう入りと云いふのが、午前ごぜんと午後ごごと二回くわいあつた。東西とうさいの花道はなみち(?)然ぜんたるところから十數名じゅうすうめい、いづれも絢爛けんらんたる化粧けしょうまはしを一寸いちすんつまどつたやうな妙みやくな恰好かくかくしやうで、それが土俵どへうに並ならんで、シヤン、シヤン／＼と手拍子てびやうしを打うつ。行司ぎやうじは軍配ぐんはい捧さげて眞中まんなかにかゝまつてゐた。これは美事みことでもあるし

物々しく、もつと何か始まるのかと思つて眼をパチつかせてるまに、もうぞろ／＼引込んで行つてしまふ。あんまり飽氣ない。

それやあみんな随分大きい、氣味のわるいやうなものもある。ほゝゝお角力といふものは、廢物利用（この字はちつとおだやかでないが）に丁度いゝとおもふの。だつてあんな放圖もない背高や肥大症は、仕末に困るぢやありませんか。あら、御免なさい、私は口がわるくつて！ 何しろ眠くつて眠くつて——がつくりのめらなかつたのが不思議な位。やつと淑女の體面を保つてゐたんです。時々はつと眼を覺ましては、くもの巢を拂ふやうな手つきして臉をこすつた。

とう／＼やり切れなくなつたので四時過ぎ、わたしもう歸して頂くわと痛い膝を撫で／＼立ち上つた。これからがいよく佳境に入るんです

よ、惜しいとこでと皆さんにとめられたけれど、魂はもうさつさと抜け出して、銀座のあたりをさまよつてゐた。それではと荒川さんに茶屋の門口まで送られて、履物を並べられるまももどかしく、そこらにうよろよしてゐる人間が、みな馬鹿に見えて仕様がなかつた。自分だけが幸福者であつた。躍るような歩調でアーチをくゞつて出た。

○

せかくくと竹川町の理容館（美顔術）を出て有樂座へ馳けつけた。ちようど五時の開場きつぱりに場内へ入る。主人役のわたくしが皆さんをすこしでもお待ちせしてはすまないと思つて。

夜のことからちつとは華手でもかまふまいと、濃い目にお化粧して

もらつたのが氣になつて、……四邊からいろんなさゝやきのきこえるやうにも思はれるので、席についてる約定すみの名まへの紙片を早速引きむしつて了ふ。うつかり廊下へ出ることも出来ません。持つて來た手提袋の中から小さい脚本取出して讀みはじめる。

いつも待ち遠くてくたまらないのに、けふばかりはまだ待ちもせぬ幕が上つてしまつた。ひとりぼっちちやつまらない。皆さんはどうなすつたんだらう？

やゝあつて和田様がいらしつた。うれしかつたんですの！ 席をゆづり乍ら、小さな聲で御挨拶する。

『わたくしけふはね、國技館からのかへりなんですよ。』
と云ふと、

『え、貴嬢お嬢が！　これや驚おどろいた。森律子もりりつこや田村俊子たむらまゆみの向ふでも張つたわけなんですか。』

『ま、そのお惡口くち！』

『その何なんとかは勝かちましたか、どうでした。僕ぼくア他ほかの者ものなんぞどうでもないんだ。』

『さあ、知りませんね。わたくしの見てゐた中うちには、まだそんな力士ひし出て來きませんでした。明朝新聞あしたしんぶんをみたらわかるでせう。』

『知しれたことを！』

苦笑にがわらひなさり乍なら、やがてオーバーのポケットから萬年筆まんねんひつとりだして筋書しながきの餘白よはくにさら／＼、何か書かきつけて渡わたして下くださる。そつと見ると、周圍しゅういの觀客ひやくたちの痛快つうくわいな批評ひひやうやなんかなので、思おもはず失笑しふさだしてしまふ。

舞臺の方なんぞはそつちのけで!!　しまひには、

『思ひ出せば去年の春、英語會に着ていらしたあのお羽織はどなたのお見立。エヘン、く。』

なんて、厭!!　我知らず手をあげて、プログラムの巻いたので打たうとしてはつと心づく。はしたない眞似をしてはならなかつた。

でもあまりいろんなこと有仰つて、おいぢめなさるんですもの。それや私だつてあのころのこと、決して忘れはしませんけれど、すっかり冷淡になつてしまつた。いくら亮一様のこといはれたつて、何でもありませんの。

『やあ、いやに今夜は強く出ますね、』

などと頭かきく。ほゝゝさういつも柳の下に輪はゐませんことよ。

それはさうと何時まで過つても四郎さん達が見えないので和田様は焦れ出す。電報でも打つておどかしてやりませうか、なんて。よかないわ人さわがせな。およしあそばせと無理にとめる。

三幕目も終りに近いころ、やつとお二人がいりました。私はうれしさと面眩さに、すこし頬が熱くなつて。……おそくなつてすみませんでしたが、すみませんでした、と有仰るのを、いゝえ、いゝえ、とばかりでずるぶんお待ちしてゐましたのよ、といふお世辭、——おうらみの一言さへ出なかつた。

今夜の四郎さんは何だか親權者然と、——いちばんお親しい間でゐて近附きたい、——氣むづかしやのお兄様でもあるやうな氣がしましたから、わたしはわざとすね氣味に、和田様とばかりおしやべりしてゐ

た。おつれの山内様はまた、ひどく物靜かな大人しやかな方で、私とは初對面の御挨拶の外、一言も口を利用して下さらない。ほんとにくれたしはどうしたら、いつになつたら、この少女つばい人怯ちの嬌態から脱することが出来るのだらう。これや今日にかぎらず、いゝ年齢をこなすいつも一座の御幹旋一つなし得ないんですもの。あゝ今些と社交の才分をうけて生れてくれやあよかつた、とつく／＼おもひました。

原信子さんのお肉聲はこの晩始めて。——えゝ蓄音機でこそおなじみでしたけれど。——それはく透きとほつて、繊細なふるへを帯びた美しい、——丁度銀盤の上を清らかな清水の走る様にほとばしるのです。氣取つた可愛らしいお壺口から、氣持のよいほど高く／＼!! !!

天分か鍛練の結果かは知らないけれど、人間ののどからよくもこんな

聲^{こゑ}が出ると不思議なやうです。窓^{まど}にはいまい少しふくらみがあつたらと、思^{おも}はれましたけれど。

が、何^{なに}しろオーケストラの音^{おと}といつしよになつて、キュー／＼ヒュー／＼。英語^{えいご}だか日本語^{にほんご}だかもさつぱりわからない。『オマヘーハーナーンダ、ナーマァーイーキーナヤツダ、オカシーナーヤツダ』

なんて舞臺^{ぶたい}中^{ちゆう}を飛びまはられては面^{めん}くらひます。あらそれは信子^{のぶこ}さんがちやありませんけれど。もてあましたわ。あゝ焦^ちれたい。耳^{みみ}の中^{なかに}へ鋭^{えい}いメスでも突^つつ通^{とほ}してやりたい。隣^{りん}席^{せき}の四郎^{しろう}さんに何^{なん}かさゝやかれても、和田^{わだ}様^{さん}にひやかされても、些^ちともきゝ取^とれず、手^てをかざして、え、え、と先^{さき}方^{かた}の口元^{くちもと}へ耳^{みみ}を寄^よせる。警^{けい}句^くやしやれの一度^{いど}で通^{つう}じない位^{くらい}お互^{たがひ}に氣^きの利^きかないものはありません。まあいゝですと苦笑^{くわう}ひに葬^{ほう}られ

てします。

『あのキュービツトの矢を御用心なさい。』

なんて紙片を渡される。ほゝゝほんとに可愛いのね、あの子!! その他獵の女神ディアナやら愛の女神ウエーヌスやら、智慧の女神ミネルワやら青春の女神ヘーベやら、月や星の冠を頭上にひらくゆらめかせたり、花をつよつてかざつたり、ふさぐとした金髪を輝かせ、羅をまとつた半裸體の、それははらくするやうな服裝をしています。血氣の身空とはいひ乍ら、この寒中にずるぶんこたへる事だらうと、よけいなことを心配する。もつとも藝術の熱氣で若い女優さん達の身體は燃えてゐるかも知れない。

あのはげあたまの主の神のばかげた道化面や、モルフオイス(眠の神)

にはすつかり笑はせられてしまった。喜歌劇なんですから、それや／＼可笑しいの。私たちの右隣りにはいつのまにか西洋人が二人来てゐて、しきりに高い笑ひ聲を立てゝましたつけ。何だか恥かしくなりました。自分の責任でもないのに……。ほんたうに舞臺の上の貧弱な日本人の容貌と體格がうらめしい。

當興行は無名會と帝劇の歌劇部との合同なので、いろ／＼取まぜた五目飯の盛がいゝ。第三の『現代男』で、東儀さんはいつも乍らやつぱり輕妙なものだと思ひました。役柄とはいひ乍ら非常にお若く、すつかりおきれいなおなりなすつた。

もう無名會も土肥さんがゐらつしやらなくてはつまりませんわ、と、わざと和田様に云つて上げると、案のごとく仰山な表情をして、やあ

あてられる、あてられるだつて、ほ、ふ。

此幕がすむと山内様だけ、一足お先へお歸りあそばした。最後にまだ歌劇部員一同の、ハンガリアンダンスがありました。眞紅のづぼんやお納戸の服や、白の靴下やブロンドの髪や、男女手を組み合ひ、チャラ／＼と拍車のついた靴を蹴立て、躍るわ、はねるわ。賑やかにおもしろく、美しく、浮き立つやうな管絃の音につれて……。おどりの頬も昂奮しきつてゐました。

和田様はお靴、私は草履なので下足は世話なし。雪崩るゝどよめきの中から脱けて、うるさくつきまとふ車夫の群を避け乍ら、しよんぼりと袖を抱いて、出て来る人を待ちました。

觀劇かんぐくの後あとにはいつもきまつて、はげしいメランコリーに襲おそはれます。

それも一人ひとりのときには歸途かへすのみいそがれますけれど、別れわかれともない、なつかしい人ひとたちよ。私はたまりかねて、ランタンへ行ゆかうと云いひ出だしました。せめては、せめては今一度いまど明あるい灯ひの下もとに、若わかやかな笑顔えがほを交かしたい！ もういつになく人ひとさまの御都合ごつごふも御迷惑ごめいわくも、かへりみてゐる餘裕よいうはなかつた。先に立たつて對鶴館たいかくくわんのあたりから横よこへ折をれましたが、何處どこをどうまちがへたやら、目的もくてきの場所ところへはなかく出でられません。舗石しきいし街路みちに三人さんにんの足音あしおとがさびしく反響ひびき渡わたりました。

時計とけいは十一時じを過すぎてゐるときいて、急に失しつぱう望ぼうと不安ふあんと焦慮せうりょと哀愁あいしゆとの苛々いらくしく胸むねにつき上あつてきた私は、もう歸かへります、あんまりおそくありませんからと、びつたり途上とじやうに立たちどまつてしまつた。

いゝんです、いゝんです。早く一人になつて、このうら悲しい心持を心ゆくまで味はつてみたいからでした。

が、『さうですか、ちや左様なら』と素直に和田様にいはれると、また今更のやうに悲しくなつたけれど。……

四郎さんとは本石町まで御一緒なりました。幾度か唾をのみ乍らだまつて、足元にまつはるもすそをやけに蹴返し乍ら歩いた。四郎さんが何にも云ひかけて下さらなけやいゝ、とおどくし乍ら。

銀座街の商店も大方はもう戸を下しかけてゐた。電車の中で二言三言交したとき、わたしははじめて焼きつくやうに、四郎さんの顔を一目見た。

物足らぬ、物足らぬ。今夜の會合はこんなものぢやなかつた筈のやう

な氣がする。あゝ何物かをつかみたい、縋りたい。二人の沈黙をのせて電車は走る、走る。さながら飛ぶが如くに疾い。

『あ、』

と私は身を浮かしておもはず窓外を透かした。乗換場所へ來たのでした。四郎さんは立ち上りさまに、

『ちや失禮、……………氣をつけていゝつしやい。』

『ありがたう、さよなら！』

私は人と別れる時には、いつも自分の感情をおしかくして、つとめて冷静にふるまふくせがある。で、けふもそつと後姿を目送しただけでしたけれど、……………あゝ。シヨールを深くかき合せて、私の眼には涙が光った。

○
観劇の翌日ついたお手紙に『今晚はこの前よりも、何だか大へん御やつれのやうに見受けましたから心配でした。少くとも今一度是非お目にかけたい。……先達のやうな晴々しい、元氣のあるお顔を見て安心したい。次の日曜にはいけませんか？』つてございました。ちつとみつめた眼からはホロ／＼と涙がこぼれおちて、インキの文字を憐れまされた。

うれしかつたのでせうか、悲しかつたのでせうか。わたしはしばらく机の上に俯伏したまゝふるへてゐました。そんなに近づいていゝものだらうか、成行のまゝに任せておいたら、どんな事になるのだらうと、す

こし恐くなつたからです。四郎さんを信じないのではない、自分自身に對してです。が、直ぐと御返事を書いて、ではきつと、とお約束いたしてしまひました。

生憎と天も地も灰色にかき曇つた、寒い／＼雲催ひの日。午後一時半日比谷の交叉點で三田行の電車から吐き出されたわたしは、電柱時計を仰ぎみて、まだ少し早過ぎたけれども、と例の小高い丘の上の喬木の下に歩みよつた。

出がけにお風呂にはいつて来たものだからたまりません。痛いほどの針を含んだ鋭どい北風が遠慮もなく、湯上りの軟弱な皮膚を刺すやうにさいなまうとする。シヨールに半面をかくしながら、そつと眼をあげて

四邊を見まはすと、まあよかつた。今日も待たせずにすんだから、と池を見下すふりして、わたしはこの鐵柵にそふて、せはしくあちこちと往來した。

好奇心らしい顔をして周圍に立ち止る者があつても、力強い一瞥を投げ返すと、大抵の男は逃げるやうに立ち去つてしまつた。よつほどのおツ怖い眼眸をしてゐたと見える、ほゝゝ。冷え切つた手を息吹であたゝめ乍ら、自分ほどの女が、何に引かれてこの態は、……と口惜しくもあつたが、四郎さんのあのなつかしい笑顔には代へられなかつた。何物を犠牲にしても、逢はずには居られないやうな氣がする。その戀しいなつかしい人が、もう何分かの後には屹度こゝへ來てくれるのだと思ふと、どんな辛抱でもする氣になつた。いつその楽しい期待を持つた待ち遠

しさが、もつとく永くつゞいてくれてもいいとおもつた。こんな場所
で異性の人を待ち合すなんていふことは、俗悪な月並の新派じみてゐて
相手が四郎さんでさへなかつたなら、どんなにか、………おゝどんなに
か………。

わざと四郎さんの這入つてくる方へは後姿を見せて、わたしは懷手を
したまゝぶらりと双の袂を垂れて、氣のなささうな顔を長い間北風に吹
き曝してゐた。寒さはいやが上にもつり、どんよりとした池の面にち
らくと小波が震へて、水禽の聲も身に沁みる。

何か讀むものでも持つてくればよがつたのに、と頭腦のどこかで自分
の聲が云つた。さうく、さうだつたのね、と自問自答して冷たい倚架
に腰を下して、そして手提袋からナイフを取出して鉛筆を削り始める。

氣がおちつかないのに手がかちけてるので、いくらやり直してもくへキく心が折れて了ふ。いよく焦れに焦れてやけ氣味にやる。買立の紫鉛筆が忽ち一寸五分ばかりになつて了つた。

が、氣にたるので、足音のする度に入口の方を振り返る。同じ様な學生姿の速くから胸轟かすやうなものもあつたけれど、近よるにつれ似ても似つかぬ他人になつて了つて、あらぬ方面へそれでゆくのを、わたしは怨しく見送つた。すこし心配にもなつて來た。

そのくせ四郎さんが本統に傍へいらつしやるまで、ちつとも知らないでゐて。……ふと顔をあげたとき、あんまりその距離が近かつたので言ふべき挨拶も忘れてしまつて、口籠り乍ら可憐らしく倚架の端をゆづつた。

が、わたしは伏目ふしめになつて面おもてをそむけた。ブツ／＼と寒氣かんきに鳥肌まぶけ立つた肌理きゆや、赤く凍こほつた鼻頭はながしらや、こんなみつともない顔かほを晝間ひるまの光線くわんせんの中うちで見みられるのは、四郎しろうさんの幻滅イリュージョンを破やぶる因もとなんですもの。……美うつくしくもない者ものが素質そしつを塗りかぬくして、少すこしでも勝まさに見みられやうとするのは、一通りとほの心遣こころづかひではない。時には我われながらいやになることがあります。何處どこへ行きませうときかれて、どこか郊外かうがいが歩あるいてみたい、とは昨日きのうからの望のぞみでしたけれど、先方さきのおもわくがはゞかれて、それを口くちに出だすことは例れいの臆病おくびやうがさせなかつた。だまつて下駄げたの齒はを木の根ねに打うち當あてゝ……ねばりついた泥土どろを打ち落おししながら……。

やがて銀座ぎんざの通りとほへ出でた二人ふたりは、とあるカフェーの扉ドアをおしました。

むつと温室のやうな暖氣は、どんなに心地よく面を打つたでせう。三階の窓ぎはの卓に向ひ合つて。……熱い紅茶を吹き／＼啜つた。それがすぐ紅血になつて、脈管中をかけめぐるかと思はれました。滑らかなシユークリームの舌さはりもよかつた。

ね、此家は何だか三重吉さんの『女』の中にあるレストランみたいな氣がして仕方がない、つて二人で笑ひましたの。でも嫌ひですわ、わたしあの女主人公のやうなのは。無論あの女は何でもありませんけれど、いつかあゝ云ふ底の知れぬやうな不可解な女にあつてみたいやうな氣がします、つて四郎さんは眞面目でした。私は一寸妬けました、ほゝゝ。あの主人公の住んでゐたやうな、絶對自由の住家がほしいと思ひますつて、ふと顔をおあげになりました。以前は僕の伏屋をも訪れて下さい

と云ふことが出来ました。今は周囲の人達が面倒くさいんです。説明すること——理解もない人に——を餘儀なくされることがうるさいんです。どうもお氣の毒です。

それでも我々の會合處は、ほしひまゝなる大自然です。荒涼たる天地は我々を感傷に陥らしめますけれど、非情と偏執の眼の包圍の中に、我々の情感の花を摘まれるより、いくらましだか知れませむ、歩かうではありませんか。……

えゝ、とわたしは低聲に、しかし力強く肯定しました。有仰る意味は誤解なしに、よく了解することが出来ます。私こそほんとにすまないと思つてますの。ですからほら、貴下方と御一緒の時は、目立たぬやうにとこれこんなに、髪かみの結方ゆひかたまで變へて了しましました。櫛一枚で留めたきり

寶石針一本さしませぬ。

でもねえ、いつのまにそんな、……世間を狭めるやうなことになるてしまつたかとおもふと、悲しうござんす。四郎さんはさうお思ひなさい？ 切角清浄な二人の間を、踏みつけられたやうに腹も立ちます。かうしてしみ／＼卓に向ひ合つてると、四郎さんの齒には煙草のニコチンが黒く泌みつゐてゐることを發見しました。脂くさい息も頬をかすめます。でもそれがかへつて快かつたのでした。ばかなものねえと苦笑し乍ら、強過る暖爐の熱氣にうるんだ瞳を上げて、夢見る様に恍惚と打ち傾きつゝ聞き入つてゐました。四郎さんは、あのハウプトマンの『沈鐘』の梗概を下すつたんです。山姫がね、黄金の髪を捌いて歌ひます。大勢の小さな魔女と手を執つて、リンクルリン、グルグルリンと躍るん

ですつて！

輝く髪、見よ美しや、美しや。

いざ高く、揺つて亂さむ、

皆も振れ振れ其の髪を。

虹の絹糸煙ると見えて、

.....

深山の山姥に雌鹿のお乳で育てられ、顔玉の光りをあざむくばかりなれど、戀も愛ひも浮世の事は何にも知らず、お友達には鳥や獸や、森の精やら水の精やら。……池の主は肉蝦蟆で、クオラツクス、クオラツクス、ブレケケケツクス、ブレケケケツクス、と鳴く。

この透きとほつた白い圓い、小さな水は何だらう？ わたしの目から

おちたのだよ、つて姫は珍しさに掌にのつけたんですつて。始めて涙
といふものを知つたんですつて。あはれな悲しい山姫と、鑄鐘師ハイン
リヒの戀物語は、ちやうど幼兒がお伽噺にでも對するやうな、まだ見ぬ
世界の驚異と神秘がありました。森林や沼や瀧や溪や湖や、山中の自然
美はわたしの心をあやしいまでに囚へる。

尾張町から品川行に乘りました。

わたしは撓々と釣革をとらへて、長い振りの亂れるのを氣にし乍ら、
二三人にへだてられた四郎さんの後姿にばかり氣をとられてゐた。けれ
ど、人をおし分けて傍まで行く元氣はなかつた。二人は別れくに席を
しめて、何にも云はずに八つ山下の終點まで運ばれて行つた。

品川の海も灰色でした。この邊は都會と塲末と西洋風と古風とをこつた返しにして、打ちまけたやうな氣分の場所である。乗りこんだ京濱電車もかなり充満でした。私たちは、運轉手臺に寄つた方の一番端に並んで掛けてゐましたが、四郎さんは例の通り讀書でし、わたしも一冊貸して頂いたのを膝の上にのせたまゝ、見るでもなくちつと俯いてるのを一心に何か打ち吟じつゝあるものだともお解釋になつたのでせう、

『和歌が出来ましたか、』

と、つかぬ事をお謂でした。え、とちらとお顔を見上げて微笑んだ。

こゝで乗替るのです、と云はれて夢遊病者みたいにふらく下り立つと、丁度折よく羽田行が停車してたので、早く早く！と背後からおし込むやうにされて、あはて乍ら飛び込んだ。

うれしいこと、少し薄日がさして來た。車中には二三人きり乗客もなく、電車の奴は跳ね上るやうな勢で、田圃——麥畑——海苔干場、——松並木——寂しい田舎路をひた走りに突進する。

お粗末な停車場を出るとサクリ／＼、砂地の踏心地がなつかしい。穴守のお稻荷様といへば、婀娜な女たちの信心浅からぬところとかねてきゝ及んでゐるが、さりとては社前に立つのも恥かしいほど不調和なこの兩人づれ。四郎さんはくろりとマントを振つて、纏きつけるやうに包まりながら、

『内藤様、どつちへ行つたら海へ出られさうに思はれます、』

『あら、小笹様でさへ御ぞんじないもの。どうして私が知つてゐませ

う。』と笑へば。

『否、直覺で！』

『さうねえ、ちや此方の方！』

と眼を上げると、顔きなさる。ぶしやうなんちやありませんけど、あんまり寒いので、袖口に引込めた手首を出すことが出来ませんでした。海をくぐると求めて、二人は園道へ折れ込んだ。

黒い土には麦や大根の葉が青々とのびてゐて、満目蕭條たる中になつかしい色彩でした。で、物珍しさうに云ひかけて四郎さんに笑はれた。否、笑つてらしたやうな氣がしたんです。心づいてハツと頬を染めた。まあ私もねえ、それほどお上品な都育ちでもなかつたものを。……と。

やがて川があつて橋を渡つた。その川に沿ふて一段高く、堤めいた路がつゞいてゐるのを、右へくと取つて行つたが、左右から篠笹など生ひしげつてゐて、二人並んで歩くにはせますぎました。云はるゝまゝにわたしは先に立つた。けど後に目がないんですもの、つまりませんでしたわ、ほゝゝゝゝ。

昔ツレーに王ありき

盟やかへぬこの君に

妹はこがねの盃を

残して獨りみまかりぬ。

ファストのグレートヘンが唱ふた歌を、四郎さんはふと口にされた。それが妙に心を惹いてならなかつた。清しい孔雀さんの聲とは似ても似

つかぬ、無骨な唇から洩るゝのであるけれど。

.....
その盃に飲む酒は

涙を誘ふ酒なりき。

水面は靜かに大空の影をひたして、雲間を洩るゝ淡い夕日が、金箭のやうに二人の肩にふりそゝいだ。私は輝く髪の上に、光りの重たさを感じた。紫金色に帆を染めて音もなく川面を滑つて来る船もある。とうとう私たちは堤のつきた川岸へ出て、ぶすくくとくづむ沼地の葭の切株の中でたやんでゐました。一步毎に下駄の齒を吸ひ取られ、ごりくと長襦袢の縮緬が執拗く足にからんで、二枚襲ねた小袖の裾も、こんな遠歩

きには荷が勝つた。私は呼吸をはづめました。

けふ二人の間に交されたのは、おもにわたしの創作上についてのことでした。わたしはその不安と悩みを繰り返して訴へて、悲観せずにはゐられなかつた。

萎縮してはならない、自己放棄をしてはならない。『一に元氣、二も元氣、三も亦元氣!!!』と、ナポレオンのアルペン越えの號令を貴女に投げかける。『不可能』といふ字は我々の字引にはない。進んで下さい、努めて下さい。どんな苦惱も忍んで下さい。

苦しくとも悲しくとも、貴女は創作さへ出来ればいゝんでしょ。と言はれたとき、えゝと深く答へた下から、限りなき寂寥が油然と湧き上つて來ました。表現の藝術といふことが、果して自分の一生の事業であら

うか、生命であらうか、他に何にもないのであらうか。私は俯向いて…

……俯向いて………聲をのんだ。

何もかも自分一人が頼みである、とは痛切に感じ乍らも、それはあんまりな利己狂ではなからうかと、氣のとがめることもあるものを。……

…だから何か偉い人のお説教でもきいてみたいと思ひます、つて半ば申談のやうに云ふと、そんな事は駄目です。と一言の下に斥けられた。貴女は迷はずに個性を徹底させなさんですね、偉い主義主我主義ならようござんす。否、それでなければ生きて行かれませんか!!!

さう? と私は息の下のやうに言ひました。その自分が信じられさへしたらねえ! 否、四郎さんの有仰るやうに、私は實際それほど稀な天分を受けて生れて來てるのでせうか? ほんとにそんなに云つて頂く價

値のある人間なのでしやうか。私は恐れて居りました、自分知られることがこはかつたからです。けれど、けれど、四郎さんの御眼に映つた自分といふものゝ影を、しつかり捕へやうと焦りました。

「僕の知つてる貴女の美は、鎧も衣服も皮膚も肉も剥ぎとつて、そして最後に残る「或物」なんです。それは貴女に昔からあつたのです。お氣がつかなかつたのなら、それは眠つてゐたんです。貴女のパトロンと呼ぶるゝ人も、それを理解しそれを愛しやうとはなさらなかつた。悲劇はそこから發生しました。が、在つたんです。それがあればこそ、僕は貴女を尊敬するやうになつたのです。處女の誇りも權威もそこに眞底があるんです。それ一つが貴女の永遠の生命です。

その美によつて貴女の藝術は完成されるんです。その者、その『デイ

ガ、アン、ヂイヒ」の發揚こそ、貴女の目指す理想であり、同時に私の理想なんです。それが美はしい花と咲いたとき、私は美の極致に觸れてソログープと共に死にたい。

それは漸次目覺めて來ました。貴女は靜かに靈魂をみつめて下さい。その發見と完成は、これからの努力にあるのです。それこそ重大な貴女の使命なんです。……』

こんな意味の言葉がぼつり／＼と耳に這入つた。

勧告や苦言を受けいれるに、決して吝かな方ではないつもりだけれども減多に人の言に動かされたことがないので、『内藤には何を云つても鐵釘式』などゝ有がたい折紙まで附けられて了つた。それが、それがどうしたのでせう。理非善惡にかゝはらず。四郎さんにだけは不思議な

ほど力づけられます。四郎さんは嘘をつきません、そしてお世辭をいひません。否、否、これは私にだけ好きな欲目でさう見えるかも知れませんが。……男らしくつて深切なんです、優しくつて重々しいんです。胸には熱い血が燃えてらつしやるんです。よしなき我身にまつはれて、苦しきおもひをし給ふな。眞實の戀ならぬ戀をする、わたしは空花のやうな戀をする。いつそ嫌つて。……嫌つて下さい……。……

さまざまに思ひ亂れ歩みもつれて、私は幾度か四郎さんの傍にあるのを忘れた。

行けどく、灰色の空と海とは行途に遠くひらけ乍ら、何處までも枯草の堤や畦道のつゞくばかりで、とうく日も落ち、夕風の身に泌みる

様になつた頃、また以前の道へ引返すのやむを得なきに到つて了つた。
残照は紫の雲を金にふちどり、處々の伏屋から地を這ふやうなうすあを
い夕煙が立ちのぼつてゐる。

出逢つた子守子の一人をとらへてきいてみると、左へ行かねばならぬ
ものを、私達は反對の方向をとつたのでした。切角の直覺もあてにはな
らぬ、けふは大失敗だと些か鼻白んだ。それはさうとして、何だか氣が
引けますのね。こんな時刻になつて海々とたづねて歩くのは、ほゝゝ。
一歩々々に黄昏の色は濃く、老松蔭の家に家鴨がギヤアゝゝ喧ましく
啼きつれてゐた。よく野球の競投があるので名高い『羽田の運動場』の
中を抜けて、やつと目ざす海端に出た。こゝにも土手があつて登らねば
ならなかつた。私は足元を踏みすべらして、軽く四郎さんにさゝへられ

た。はつと思つた時にはもう放されて仕舞つてましたけれど、肩に覺えし一瞬間のぬくみ!! 御手のふれたあとの感じがいつまでも心を壓して。……腹立たしかつたのか、恥かしかつたのか。……無論偶然の出来事で、どつちの故でもないんですけれど。……

堤上に立つと、ちようど干潮時か海はどろ／＼の沼みたいでした。夜目にはよくはわかりませんでした。——おや／＼こんな筈ではなかつたのに、と失望して二人は笑ひました。地平線のあたりには無數の燈火がきら／＼と美しくございました。何だか涯もない廣野に、行き暮れたやうな心地もせられた。いつのまにやら枯芝生に影法師が薄すり印せられたので、月の出てゐることを知つた。

あ、あ、何と云つたらいいのでせう。はづかしいほどの感激をさへ覺

えて。……あまりにもおのが心の小さなことを悲しみました。私はまだ、これほど懐かしい、静寂な薄月夜にあつたことがありますでした。なまじ手をつけるのは惜しいやうな氣がします。そつとしまつて置きますわ、わたしの筆はもうあの神秘な崇高な情趣にしつくりともなひませんもの。滴るやうな光澤も失せ、香もあせたことをつくぐと思ひます。

けどさう云つても四郎さんは、それを諒して下さいますぞ。

『何をぐずぐず云つてゐらつしやるのですか。情緒的にお受けになる印象は、到底貴女に比敵するほど鮮かに描かれたのを見た事がない。この點においては或る程度の、ほとんど頂點に達してゐらつしやると云つていい。』

「そこらあたり、露草の露ちらばれり、裸の指に心あつめつゝ踏む。」
こんなデリケートな感觸を有つた詩人を、羨しいやうな氣がします。
貴女にはそれがおありなんぢやありませんか。この方面をしつかり擱んでさへゐらつしやれば、…… ヴィヴィッドな、センシティブな感受性を有してらつしやるのは、確かに貴女の武器です。一色であるといつか失禮なこと申上げたのも、決してわるい意味で云つたんぢやありません。更にその感受性を、より深く廣くして頂きたいためでした。』
みどりの波を慕ふて來たのではないけれど、干潟の霞はうらがれて、黒毛の犬と烏の群が棲んでゐたのは、あまりに淋しうございました。
『さはあれ蕭條たる萬象は、その神秘の殿堂の扉を、君の前に開いたにちがひない。』

刹那の感興でもいゝ。感興來たらば目を閉ちて感興に乗りたまへ。虚
空めがけて飛び給へ。振へ、振ひませよ君！

傑作を待つてゐますよ。貴女が……貴女がお書きになつたものでな
ければ、蠱惑と魅力がありません。』

おゝ四郎さむ！ よく有仰つて下さいました。君がため、熱い涙の復
活は、やがてわが心の復活でした。この再生の歡喜に、我が新しき作品
の生まるゝ日、……どうぞ期待してゐて下さいまし。

ほのかな月光は、霧とも煙ともわかず天地に充ち渡つて……

歸途には、出るともなしに穴守さまのお社のわきに出て了ひました。
數知れぬ獻燈が美しい夜を守り顔に、まるでトンネルのやうな奉納の華

表の夥しさには驚いた。舗石路の兩側の料理店や貝細工、河豚提灯などのお土産物賣る店から、怪しげな姐さん達の口々に黄いろい聲で呼び立てられ、二人は逃げ出すやうに歩行を疾めた。今頃こんなところにまこつてると、人格を疑はれるやうな氣がするんですもの。思ひは同じ四郎さんも、……早く東京へ歸りませう。つて！

夜の電車内は静でした。寒氣にあてられたのか、餘り歩き過ぎたのか！ 掻き撚りたいほど肩が凝つてく。兩袖に固く抱きしめながら、ぐたくぐたくに氣力の抜けた身體を座席の背後に投げかけるやうにしてゐたが、ふと向ひ側の玻璃窓を見ると、頬の色だけぼつと鮮かに紅さした若い女の白い顔が、朦朧と嬌かしく小首を傾けてゐた。わたしが口元に手をやると、玻璃戸の女もやつぱりさうしたので、おやと思つた。それは

自分の影かげなのでした。まったく思おもひの外ほかに綺麗きれいだったので嬉うれしかったです。

甲武電車かうぶせんで新橋しんばしへついたのは七時過ぎしじすだったでせう。戸外そとの夜風かぜに吹ふかれると共にとも、わたしの顔かほには熱ねつが燃えはじめ、……………どうしても動うご震ふるひがやみませんでした、打ち合うちあふ歯はの根ねの音おとを立てたじと唇くちびるを咬かみしめ乍たがら、さながら雲くもの上うへを踏ふむやうな心地こころちで、日吉町ひよしちょうのカフェーブランタ
ンへまゐりました。

丁度階下ちやうどしたには相客あひきゃくもなくつて。……………ストープの傍かたはらに椅子いす引ひきよせコー
トの胸紐むなひもを外はずすと、するりと青磁色せいじいろの裏うらを翻かへしてずりおちる。この肩寒かたさむ
げなる姿すがたよと、つくづく心細こころそく我身わがみがかへりみられた。瘦やせたいくつと
願ねがつたのは、たわいもない少女心をとめこころの昔むかしのことですわ。今の私いま わたしにとつては

瑞々しい青春の香の薄れるといふことがいちばん痛かつた。自分はいつまでもく若くてゐたい、美しくもりたい。『常乙女』の美を、永久に誇らうといふ抱負なんでももの。徒に更けゆく年をうらむ老嫗や賣れ残り、同一視されたくはないけれど……。

白い壁、白い天井、そこには汚らしいまで一杯の樂書と人物の顔が！……が、首を上げてそれらを眺める勢もないほど疲れ切つてゐた。たゞもう無やみと腫の重さに堪えられず、頬杖した手の甲に額さへて、香ばしい料理の香もむかへと厭はしかつた。どうぞこんな様子を四郎さんのお氣のつかぬやうにと祈つた。

そこへ圓い束髪の給仕女が、大きな瓢箪型の玻璃瓶を清らかな白エプロンの胸に抱いてきて、兩人の前におかれた可愛らしい盃になみくと

澄るゝまで注いだのは、緑色に透きとほる——まるで星のきらめきの様
な、——寒いほど美しいく洋酒!! わたしは黙つて唇に觸れた。いや
に甘つたるくつて、——芳烈な強いハツカの味覺が、ピリ／＼と咽喉に
泌み渡る。

せめて酔にでもまぎらさうと、一滴も残さず飲み乾した。そして料理
の食べられないのもその故にして、スープを二匙三匙啜つたきり。——
恍惚と俯いてゐて、時々四郎さんに話かけられると、涙のやうな微笑を
見せた。脈打つてほてる頬! 高まる慟悸! もう／＼氣が遠くなりさ
うなんですの、あゝ呼吸が苦しい…………。

そろ／＼出かけませうかと云はれて、フラ／＼と立ち上つたが、足元
が定まらぬので下駄を履くのに幾度かつまづかうとした。入口のドアを

出てからふと振り返ると、階上のウエランダに濃紅の色深い、――丁度血の滴りのやうな、――燈籠形の電燈のともつてるのがばかに心を惹いた。

肩も袂も夜霧が凝つたかひいやりとして、シヨールに深くおほふた口元から吐く息のみが、燃えるやうに熱いのを意識する。襟元にくづれかゝつた髪に手をやると、氷のやうに冷たい。

兩側の家々の軒燈にぼんやり霧がかゝつてしまつて、地面がだん／＼浮き上つて来るやうにも見えるし、そこらの建築物がぜん／＼後退りをする様にも思はれる。時々ばちつと大きな瞬きをする、急に目の醒めたやう、四邊の事物がハッキリ瞳にうつる。わたしは何だか面白くつてたまらなくなつた。歩きませう、もつと歩きませう。と燥いで云つた。

明と暗とを織るやうにして、二人は言葉少なに歩をはこんだ。縫かず離れぬ程度の間隔を保ち乍ら。……凍つた大地に下駄の音のみ耳立つた。

『君と行かば三里の路も何かあらむ、この道つゞけ世の終るまで。』
誰とかのこんなストロな歌があるつて、四郎さんはお笑ひなさいました。私はそんな事口にする方であつてはいけなないと、心の中で四郎さんを叱りました。

あゝ薄暗き樫の根に
友と理想を語りてし
三年の夢は安かりき
さながら今は長江の

川口近くわだつみの

荒浪をきくわれ等かな

もつと何か伺はせて、と願ふと、ちやもう感傷的なものはよしませう
ね、つて、『闇の中なる一すぢの、光りなりけり天つ日の、向ヶ岡に霧
はれて、花やぎ渡る朝の色……』

あゝ久しぶりでなつかしい寮歌の響き!!

とうとうこの夜は電車にも乗らず、浅草橋まで歩いてしまった。こゝ
まで来れば、どうしてもお別れしなければならなかつた。四郎さんは案
外淡泊に挨拶なすつて、待ちかねてゐたやうに萬世橋の方へ急いで
らした。わたしは、あゝわたしは。……

慣れも習はぬ盃に

唇をふるゝも恥かしや

みどりの酒の酔心地

夜の間に待たで醒めゆけば

.....

○

今日は従妹をそゝのかして吉原見物に、……ほゝゝこれやみんなに
は秘密なんですよ。

夕方から家を出ましたけれど、あんまり早過ぎるといふので、久しぶ
りに観音様へもおまゐりしました。處々蠱んではゐるけれど、追憶の
繪巻物のなつかしさ。

やうくに眉過ぎし振分髪ふりわけかみの時代こゝろには、田舎いなかからたま〜の上京じやうきやうに、何なにをのぞいても淺草あさくさへ連れて來こられぬ事はなかつた。父ちちさまか、でなければ若い叔母様おばさまの、お袖そでの先さきにつかまつて、……木履ばつくりの鈴すずを鳴ならし乍またら……。

黄八丈きはちぢやうの衣きぬ、緋ひの疋田ひつたの帯おび、お染簪そまかんざしの長い總ももを紅べにさした皆みなの邊あたりにふさ〜垂たらしてた町娘まちむすめの叔母様おばさまは、もう十歳とせを頭かしらに四人にんの子この母はは！私わたしだつていつまでも、鳩ボツボを追おひまはしてばかりは居ゐられません。幼せうない従弟妹達いとこたちでも連つれなければ、觀音詣くわんのんまうでも恥はぢかしいこの頃ころ……。

數石とくしに鳴なる雜然ざつぜんたる轟音ごうおん！いつもながら耀かやかな仲見世ななかみせの通りは、黒くろい長い一列いちれつのラインがうよ〜と蠢うごめき渡わたつて、今いまや歡樂くわんらくの宵よひの潮時しほとき、

……賑はひは天の高潮に乗らうとしてゐる……。

往うさ來るさの雑踏中にふと浮き上る白い顔や、つぶし島田の婀娜めいた後姿なんぞみつけても、一瞥する間もなく人波の中にのまれてしまふ。チラ／＼と眼に入る兩側の煉瓦の長屋、紅梅燒や、はじけ豆、繪双紙、半襟、袋もの、シヨール、鬚形、帶揚のしん、ステツキ、帽子、人形屋。……玩具屋の前に鼻を鳴らして動かぬ少女、母親の袖を引く海軍帽。美しい少女達のたゞずむにふさはしいのは、瓦斯の灯に明るい小間物屋の店頭で、そこには丁度束髪と日本髪とを代表する新ダイヤと銀モールとが、眩ゆげにきら／＼と輝いてゐる。

仲見世にあふれて仁王門から先は大番傘の下に露店がいつばい。毒々しいカンテラの油煙！ 晝間なら鳩豆の婆さん達が澤山並んでゐるのだ

けれど……………●

お堂の右手の大きな公孫樹の梢に白い鶏が四羽、——黒いのは暗くてわからなかつたのかも知れない、——長い尾を垂れ首を羽がひに突こんで、丸くなつてねてるのが目に入つた。『奉納鶏が澤山ゐるんですよ。』つて、従妹は一寸見上げたばかりで、何気なく通り過ぎやうとする。

『かわいさうね、まあ、霜夜の野天で。寒くないのかしら、雨風の晩はどうするんでせうねえ。私が金満家になつたら、この境内に一つ塙を建てゝ寄附するわ』つて云ふと、『また始まつてね、お千代姉さんの鶏狂ひが！ よう、早く行きませうよ。さあ、』

袖を引張られて階段を登る。

私は神佛に禮拜することを、恥辱のやうに心得てゐる不心得者だけれ

ど、今晚の從妹の拜みぶりが素敵によかつた、鏡花式で。よくみればどこもかしこも、點々と白くこびりついた鳩糞だらけながら、廣い廻廊や黒い扉や太柱の丹塗の色も煤寂びて、夜の觀音堂は一寸趣のあるものだと思つた。

大きな賽錢箱のかけにもたれて、ポロ／＼のつゞれまとふた十歳あまりの、乞食小僧が眠りこけてゐるのを發見し、『同情しないの、お千代姉さん。鶏の野宿をあはれんだ方が！』

と、從妹は強く私の袖引き動かしつゝくすくす笑ふ。

短かい白衣、後鉢巻、足袋はだし。チャン／＼チャンと鈴と提灯ふりたてゝ、飛ぶが如くな寒まるりの群にも幾組かあふ。

暗いお堂の後から、鐵鎖のめぐらされてる淋しい庭園の小徑に這入る

と、急に別世界へでも迷ひ込んだやう。かさこそと地上に何かゝころげる。忍びやかに梢を傳ふて来る風、木蔭の仄闇の中に魔物でも住んでゐて、暖かい血汐を吸ひ取られてしまふんぢやないかとぞつとした。

あの騷擾の裏にこの寂寞！ 僅に昔の奥山といふ名稱を止めてゐるやうな、……けどそれも愛すべき寂寞ぢやありません。何だか不用心で、女連れなどは急ぎ足に通り抜けて了はなければ……。

俄然、

『まあ、綺麗！ まるで櫻の花の色ですわね。』

思はず讚美の聲を放つた。火光の反射で、行途の空はぼろと明るい。幼馴染の花屋敷の前へ出た時、ふつとあるものゝ俤が、美しい通り魔のやうに、私の脳中を掠めてよぎつた。それは何？ 昔こゝで見た活人

形！一の谷嶽軍記の敦盛卿！くは形のかぶと、緋をどしの鎧、ふつくらとした白い頬、鮮かな黛、花の蒼のやうな口元、たしか熊谷に組み伏せられてゐるところだつたと思ふ。後の岩組の上からは、平山が中腰になつて見下してゐたから……………。

誰の似顔であつたのか？他の物には何一つ記憶の痕もないくせに、……………何年かの間ふつつりと思ひ出しもせなかつたものが、……………どうして今まで私の體内の何處にひそんでゐたものであらう？一種の懷舊病に似たる情が、水のやうに漲るのを覺えた。

相變らず六區の雑踏といつたら、……………白晝をも欺くイルミネーション、瓢箪池に影を落して五彩に咲き亂れた光りの花、競ひ合ふ活動寫眞の樂隊、トテトー、トテトーちゃん／＼ちゃん、ブーカ／＼ドン／＼ドン。

女流藝術家だの才媛だのの肩書も凄じい。筑前琵琶でも浪花節でも、何々嬢と肖像入りの表題高く、旗や幟が雲の様に動いてゐる。

俗悪と云はうか強烈と云はうか、紫いろの燭光に照らされて、青い着物や赤い蹴出し、亂れた黒髪、白い脛、解けかゝつた帯だの、ピストルだの短刀だの、惨い程花やかな繪看板。それをまた云ひ合せたやうに仰ぎみる群集がおしつ返しつなかく通り切れませんの。ポカンと口開いて魂のぬけがらみたいに、足元のふらふらした風と云つたら……中にも學生達なんぞ、制帽や袴の手前もあるぢやありませんか。これだから浅草は嫌ひ、こゝらにうろくしてると、人格にさへ關はる様な氣がして来る。それはね、活動寫眞もいゝとして、あの霧の様に館内に立ちこめてゐる濁つた空氣を吸つて、キラ／＼と銀の雨の降る様な映畫の面

を見つめてゐると、眼が開きつきりになつて、頭腦が痙攣して仕舞ひます。でも△△館や、○○館だの××館だといふところの貴賓席には、随分立派な紳士や御夫人令嬢方が、熱心に御覽遊ばして被居る事もあります。まるで西洋へ行つたおつもりか何かで……ホ、ホ、ホ、ホ。

それと辯士の氣取りやうとは随分面白い。頭髮の分け方、ネクタイの結び方、眼の使ひ方から腰のかどめ方、いやに愛嬌あふるゝばかり、白い指には何やら恐ろしく輝く物さへ箝めてゐる。領事館附の外交官ぐらゐにはたしかにふめますね、ホ、ホ、ホ、ホ。制服の洋装してゐる女案内人の白粉の香も高い。

金龍館の會我の家五九郎一座には勿體なくも、眞新婦人の木村駒子女史が出演しますとやら。先日モンナ、ワンナを觀て來たとかつて、從

妹がしきりと感心してました。お千代姉さんの好んでゆく、新しいお芝居つてこんなものと、やつと合點が行つたらしいーほゝゝゝ。おかげで従妹達もこの頃は、大分開化てまゐりましたのよ。

この賑々しいイルミネーションの裏面へまはれば暗い魔窟で、いわゆる例の十二階下の女！千束町、田原町、には銘酒屋の數が何百軒とあるさうな。

都新道とか浪花新道とか、名は優しいけれど、芥溜箱に袖のふるゝばかりな、その狭い細い露路に踏み込んだが最後、兩側の格子戸に浮く白粉の顔が、道行く男にチューツ、チュツと、血を噉るやうなねづみ鳴きをする場所である。障子に嵌めた小さい硝子から、眼ばかりづらりと覗

かせてゐる。戸外の男がより添ふて、何かきくにたえぬ様なことをいひ合ふ。伊達か近眼か、いやに眼鏡など光らして、いやみな形の烏打帽など目深に、首巻の色ハンケチやマントの襟に半顔をかくしたのが多い。男も男だわねえ、否、みんな男がわるいのですわ、彼等の要求からこんな階級の女の群も生れ出たのだ。

それは云はずに、故意か寓意か、恥づる色もなくあの女たちの事を、私達に向つて嘲る男達は、何と云ふづうぐしさであらう。口惜しい恥かしい腹立たしい思ひを強く抱へて、逃げるやうに此路を通り抜けてしまつた。

あゝ、裏切者ですわ、あの女たちは私どものね……。あはれんでいゝんだか、憎んでいゝのだから、わけがわからなくなつてしまつた。

こゝが鐵漿溝と云ふのかしら？ 何だかきかない沼みたやうな大きな水たまりの水面が、薄光りに光つて惡臭を放つてゐる。シェーツ、シェーツと後からけたゝましくベルを鳴らして、素晴らしい掛聲で腕車は走る。従妹は一度お西さまのとき連れられて來たことがあるといふので、私はそれを頼みにしてるのに、おどくして了つて、何にもならない。通ひ馴れたる土手八丁、口八丁に乘せられて、……とか、松のはけ先すきびたい、堤八丁衣紋坂、……などゝ吉原雀や助六にうたはれる日本堤は何處でせう、この通りがさうなのかも知れないけれど、いまは牛豚馬肉天ぶら、おでん、そば、すしなどゝ兩側そんな飲食店や屋臺店ばかり並んで、若い衆が下足札を打ち合せ乍ら、シヤイ、シヤイくとし

きりに景氣をつけてゐる。

『見返り柳』それは大門の入口の、左側の柵の中にある。何となく老女の散らし髪を思はせた。

江戸町だか仲の町だか知らないが、突きあたりの廣い通りの兩側には引手茶屋といふものがたくさん並んだ。が、ひっそりと静まり返つて絃歌のさわぎもきこえねば、箱提灯に送られてゆく客衆の影も見えぬ。たゞぞろ／＼と流れ入る人々の後について、とある横町へ這入ると、あつと思つた。まあ、居た、居た。彼家にも、此家にも。しばらくは何處へ目をやつていゝかわからず、足疾に通り過ぎてしまつたが、やつと氣を取直して顔をあげる。

突如強烈な色彩におどしつけられた先刻の一瞬間は、おゝ綺麗だとも

思つたけれど、まあ何と云ふ不思議な光景であらう？

同じやうな白堊の三層樓五層樓が透間なく建て並んで、不夜城といふほど明るくはないけれど、何しろ電燈燦爛たるものですわ。その店先の格子戸の内に、づらりと並んでる緑の女、紫の女、桃色の女、牡丹色の女、空色の女、水色の女、黒地の女！これが張見世と云ふんですつて。

娼婦型とはよく云つたもの、境遇は人間の相貌をまでかうも同化するか、一様にやゝ黒ずんだ緋ちりめんの長襦袢に太つた膝を包んで、金襴の半襟をあくどくひろげた賤しい猪首つき。揃ひも揃つて輪廓のわるいことは。頬骨が出張つて額が狭い。でなければやげんの様に抜け上つてゐる。眼のふちが薄黒く、光澤氣もなく顔の素地が荒れて、——それは

その筈でせう、毎夜々々深更まで、この針のやうな夜風に吹きさらされてゐるのでせうもの。

女の眼を引くやうな美人なんてほとんど皆無！ 十人並以下が八割です。それに頭髮と云つたら大へんなの、まるで狂人の沙汰ですわ。鬢髻がびしや／＼で鬘ばかり大きい、しやぐまを入れた桃山や、三十近くにも見られるのまで年甲斐もない嶋田なんぞに、たゞもう無暗と紅い切や淺黄鹿の子や金絲の根がけや紅白の花簪や、御祭禮の牛みたいにかざり立てて、…………。

いかに低級趣味の男達だからつて、…………ははは男つてばかなものねえ、こんな女を擁してよろこんでるのですとさ！

おまけに下手なお芝居じみて、その花魁の背景がベタ金の襖やついた

てや、引手に緋總など下つてゐたり、燦然と照りわたる大鏡で張りつめてあつたり、彫龍朱欄と云つた風の好みもあるし、出来得るかぎり仰々しいので、一層滑稽でたまらない。彼女等は各々に眞鍮の手焙り一個づゝ前において、朱塗の簀箱や朱羅宇の長煙管かなんかで、澄ましてふうと煙を吹いてゐる。でなければ正面向いたまゝ臆面もなく、柄つきの鏡もつて顔を直してゐるし、きりぎりすみたいに格子につかまつて身悶え乍ら、道ゆく男を呼び立てゝゐるのもある。

いはゆる素見ぞめきの鼻唄の連中は、前つぼのかたい胸下駄なんぞ足の先に突かけて、印半纏や長半纏を頭からすつぽりかぶつたりして、あつちへよつたり、此方へよつたり。肉の香に餓えた瘦犬が、芥溜箱をかいで歩いてるやうだと云つたらおこるでせうか、ほゝゝゝゝ。中には吸

附煙草を貰つてのんでるものもある。

『おあがんささい、あなた、一す、寄つてらつしやいよう、ようつてば。ちよいとく』

鼻にぬけるやうな泣くやうな聲出して、ばたく此方の端からあちらの端まで、長い仕櫃の裾曳いて檻の中を駆けまはる。浮かれ男の耳にはそれがどんなにか切ない、いとしい、やるせない哀切の響ともきこえるのかも知れない。が、何のことはないまるで動物園ね、女の顔して赤い衣裳着た、モンスターでもあるやうに見えました。

妓夫といふのは男で、入口の湯屋の番臺のやうなとこに座つて、妙な處から顔を出して、盛んにびしやりく扇子の音を立て乍ら客を呼んでゐる。小倉袴の書生が通れば先生、ぞろりとした着流しが来れば、伊

井さん、河合さん、喜多村さん。お髭さん、洋服さん、紋附さん、大將親方、ちよつと様子の人、などゝ口から出まかせに、好きな事を云つてゐる。女と見ればはやし立てる。

殊に五十錢均一の横町なんと來たら猛烈なんです、こんな場所早く通り抜けて了ひませうと、苛てば苛つほど何う戸惑つたか、何度も同じ道筋を往き返りして、

『またお出ですか、何か遺失物でもなさいましたか』『よう／＼先刻のハイカラさん ハイカラさん』『大正式の別嬪！』『これや大小お揃ひでツ』『もし／＼何か落ちましたよ、おちましたよ。へへ、足痕でした』『貴女方はもうこれで三度御通行になりますツ、』

左右から浴びせられるので『貴女の洋髪がいけないのよ、あんまり目

立つから……』従妹が泣きさうになつていふ。人並よりも小柄な従妹と、大き過ぎる私と並んで歩くのは、双方にとつて随分痛い皮肉であるから……。

いゝかげんのぼせ上つて心細くなり、八幡の籤知らずぢやないけれど、一度踏み入つたらもう出られないやうに出来てゐるんぢやないかしら？　なんと下らない怯氣までついてしまった。

それや角海老とか大文字とか稻本とかいふ大雑では、流石に賣物を行人の面前に曝してはおかない。寫眞がどつさりかざつてある。横のかまへなんて素敵もなく高壯なもの、無智な少女達のあはれた盛榮心を挑發するには充分であらう。きつとそのために好んで花魁になりたいなどの願ひを抱く女も多かりさうだ。私はふと歌舞伎座の『榊原高尾』をおも

ひだした。今も昔も變りはない、田舎乙女のがれ心！ 飽かず見惚
るゝ江戸の錦繪！ あの太夫の道中…………。

絢爛をきはめ、豪奢をきそひ、張と意氣地の仲の町。歌舞の菩薩の君
ぞろひ、なんて、さながら歡樂境の淨土のやうに、理想化せられたお
芝居の、全盛な廓の情趣はほんとになつかしい。舞臺の上の花魁はみな
美しい！ けれども、けれども…………。

私は何も滅びゆくロマンスに執着を止めるものではない。凋落した吉
原の江戸趣味をなげくものでもない。云はゞ没交渉な世界の佳人である
けれど…………。

廢娼問題なんてことについては從來あまり氣もとめず、たと社會の大
勢で必要のあるものならば仕方なく、それを抑壓したところかへつて

他方面に、意外な害毒を彌蔓させるやうなことになるはしまいか、ぐらゐに考へてゐただけけれど、いま目のあたりこの無智無慘な、女地獄の有様を見せつけられては、我しらず憤慨の聲を高くせずにはゐられない。あはれむべき彼女等を救済の何のと、大きなことは申しません、たと同性の名譽のために……。

従妹の感想はどんなものかときいてみたけれど、笑つて何とも答へなかつた。たゞ『まあ、づいぶんいゝ年をした女もあるのに、淺ましいのね。』なんて、見當ちがひなこと云つてゐて。若ければ見苦しくはないと云ふのか、あの肉の切賣をしても……。

檻の中なる彼女等はまた、私たちを見て何と思つてゐるか！ 羞恥の眼色でもあればともかく、憎惡と反感と侮蔑と嫉視の眼光は執念かつた。

無理もないが悲しかつた。敵同士でもないんですのに……。

しかしあそびではない、職業である。糧を得るためといふことは、世の中でいちばん真剣な事であるから、……彼女等もさういふ信條をもつてゐて、省ても決して恥ぢないのかも知れない。

『でも可哀想ねえ、大がいは親のためになつてゐるのが多いんですつてね、』

従妹は云ひにくさうにさゝやいた。私はまた赫とした。

親孝行のため！ まあ何といふまちがつた『道徳』なんでせう、呪ふべき美名なんでせう。それをまた平然として、怪しまぬ人が多いとは、

……。

私等のすむ世界の外には、こんな別天地があるのでした。男も女も…

……この席内にあつては、互に何の尊嚴も神秘も見出し得ない。參政權問題も神聖な戀愛も乙女の誇りも何もあつたものぢやありません。は、は、は、は、は、は、皮肉だわねえ、世の中つていふものは。……

『お立派なハイカラのお姉さん、どうぞ南京豆を一袋買つてやつて下さい、背中の子供が助かります。たつた一錢でございます。おりつばなお姉さん、御愉快にいらしたんですから、どうぞお端錢を御散財なすつて……』『お嬢様どうぞ私にも』『私のも買つておくんなさい。』『私にも……』

棕島とさんなれとばかり、女乞食の包圍攻撃におちいり、吃驚敗亡やうく一方の血路を開いて、命カラ／＼大門を退却した。

『何誰？ あら千いさんなの。まあ、いゝところへ。さ、いらつしやい』

こゝへ、こゝへ、』

多枝さんはバタ／＼と平手で置炬燵の上を叩かれる。緋と靑磁の斜だすきに白稜の麻の葉模様、ふつくりと、伊左衛門でもひそんでゐさうな媚めいた友禪の掛布團。それを取かこんだ一座は、目白のおしくらのやうに賑やかなこと。わたしも笑ひ乍ら皆さんへ向つてのお叩頭を只た一つだけして、すぐそのまといの中へ吸ひこまれた。

初対面乍らお相客も、かね／＼御噂はうかゞつてゐた方たちばかり。

殊に多枝さんの御親友の千枝様にお目にかゝれたのはうれしかつた。

御筆致をとほしての想像とあまりちがはない、一體にきやしやなぶつくりした感じのする女で、結ふて三日目あたりの桃割髪重た氣、やゝ油氣の失せた髪が一層よくふくらむ。山の手の御住人でも、おとなしやかな下町趣味のまた上なく似合ふて、眼の細い口元の可愛い、眉を一杯に瞻つたやうな——白い圓い顔。肉附のいゝ肩から胸から手頸の邊からかけて、たゞ何となく女らしいふくらみと、柔軟さに満ちてらつしやる。私は美しい氣持で眺めた。

多枝ちゃんはいつたりと片頬を伏せて、炬燵布圍の綴絲を引張り乍ら『ねえ、兄様。千いさんも些と大人におんななすつたけれど、でもあれからそんないろいろなことがあつたやうには、どうしても思へやしないのねえ。あの愛宕町時代と………』

『あゝ、内藤さんは變らないね。かへつて若くなつた位だ。』

『あら厭だ！ すりこぎちやあるまいし、だんく小さくなつてたまるものですか。』

つて大笑ひだつた。

多枝ちゃんとか枝さんとは、たしか同年齡の筈。私が一番の年嵩なんですけれど、誰だつて今ちや多枝さんの方を二つ三つは姉さんに見る。濃いけれどあまり多からぬ髪を、いつも無造作な櫛巻か細輪の銀杏返しきりゝとしたのが心持やせ過ぎた細面を奇しいまで艶に見せて、ちみな月花お召の半纏を引かけ、襟のかゝつた平常着、幅のせまい黒襦子の帯これが良家のお嬢さん出とは一寸受取れませんの。だからよくいろんな人に誤解されるのですわ。ふきこんだ長火鉢、柱にかゝつたお三味線。

大きなく羽子板や、お人形や蘭玉や天井に数多くさゝれたお札や壁張の錦繪や。……たゞその障子ぎはにおしつけてある一閑張の机の上に原稿紙だの青い玻璃のインキ壺だの、トルストイや、ドストイエフスキの作物なんぞ載つてゐるのが、女主人の人柄をうらぎつてゐます。豊熟しきつた甘い果實の液汁に指先を黄いろくして、鹽煎餅をボリつき乍ら話すんです。

小原工學士に嫁がれた夕美さんのお噂が出て、——赤ちゃんが出生になつたさうな。しかも坊ちやまなんですよつて！ おめでたいわけね。最近のお寫眞を見せて頂く。

分髪に裾模様の半コート召して、バラソルさしかけてゐらつしやるどころ。すこし小首傾げた表情たつぷりな、眼元なら口元なら、……以

前より一入お美しくおなりなすつた様だ。註にある如く『腹々正にハケ月』のお母さまとはとても見られない。相變らず御活躍らしいのねえ、御任地でも。ずゐぶん評判の夫人でせうね、きつと。東京にゐらつてさへ『西片町のタングステン』で仇名のあつたくらゐ。——え、それや強い光度を放つてらつしやるといふ意味なんですとさ、ほゝゝゝゝ。夕美さんの唇が、肉感的であると云ふことから話題に花が咲く。けど肉感的と云ふのは、どう云ふ意味を言ふのかしら？ わたしにははつきり會得する事が出来ない。感情ぢやない、——官能が缺てるのかも知れないのねえ。

多枝さんそこには始終御友人の來訪が絶えない。ゆつくり二人きりになれるやうな事は滅多にありません。お客さんの多くは、——所謂新進

作家といはれる連中で、それや若い才人達の集合ですもの。議論をきいてればおもしろいわ。無論私だつてお仲間に入れて下さらなくてはないうでせうけれど、——でも私の住んでゐる世界は、一步も他人の足踏をゆるさぬところなんですもの。最もよく了解てゝくれる筈の四郎さんとさへ、透明な玻璃戸をへだてゝ相對してるやうなものなのですもの。まあ沈黙に若くはなしと、一隅につゝましく控えてゐたら、誰しも亢奮の後に来る反動の悲哀、取返しのかぬやうな後悔におそはれるの念は通有性だと見えて、

『内藤さんはだまつて聞いてばかりゐるなんて卑怯だ、僕ア大いに輕蔑されてるやうな氣がする。』

なんて怒り出されてしまつて吃驚した。まあとんでもない、かんにん

して頂戴。決してそんなわけぢやあないけれど、わたしはもうすべての感興に對する麻痺性の免役性患者なのですから。と笑ふと、菌持參者なんぢやなくつて？ などとまぜつ返されたが、まづたく私もぼんやりになりました。大抵な事では神經が目を覺まさない。ちつと眠つてゐます。それに引きかへ皆さんの過敏さには驚いた。殆ど病的に鋭い。こんな感傷生活を送つてらしてはするぶん苦しくつてたまらないだらうし、またわたしの様に感激が來なくなつても、筆を執らねばならぬ身には随分苦しい。何が何だかわけがわからなくなつて了つた。

けど、何と云つても皆さんはお美しいお身の上だわ。勉強させて下さる親御さんがあつて、……病氣になれば歸れる家があつて、……否、それや他家の花は紅く見えるつていひますけれど……。

今夜はおとまりなさいな、ね、ね。と言はるゝまゝに、落つかぬ腰をまたずるゝと長火鉢の前へ据てしまつた。先刻からまじゝと時計ばかり見上げて氣にしてゐたが、そう定まるとやつと少しはくつろいだやうな氣持にもなつて、更めて顔見合して寂しく笑つた。

多枝さんとは、ふとした事から逢ひ初めて、ふとしたことから別れて了つて。……その間に三年の月日が流れた。『私にとつては女の一生を終つた三年間を、貴女はどうお暮しなすつたか、それが伺ひたい!』つて有仰るけれど、――月日のへだたりよりお互の境遇の變化から來るへだたりの方が、もう二人を同化にはさせません。何故かうなんでせう、焦れつたい! いつもいつも萬人の前で語れる事を、あたりまへに話して別

れてしまふんです、飽氣ないんです、物足りないんです。あゝ、多枝さん。貴女だつてさうでせう。女には何故女の親友が出来ないんでせうねえ。

いつかも多枝ちゃんの机の上から、お露ちゃんの寫眞を見出ししました。友禪の一つ身にくるまつて、生後二十日あまりの可愛い赤ちやんでした。たあちやんも一度はこんな子供を膝にして、お乳ふくませたこともあるのかとおもふと、不思議なやうないたゞしい氣がした。でも何だかお露ちゃんのことは、どうしても口に出して問ひ得なかつた。女からの秘密ぐらゐ、わからぬものはありませんわね。して見れば私なんぞ、單純きはまるものかも知れないわねえ。

多枝さんならば亮様のこともよく知つてらつしやるし、かうして千い

さんたあさんと昔なつかしい名で呼び合へば、……思ひすてた昔乍らにやつぱりあの頃のことと思ひ出される。

けど、故人に對してはさう好意を持つてはゐらつしやらないやうな口吻で何かを云はれると、何だかおもしろくない。——まして四郎さんのことなんぞ、氣風にも見せやうとはしませんでした。胸の中の面影をしつかりと兩袖に抱いて、面朧さとなつかしさに思はずかつとした。

多枝さんは無意識のやうに幾度か、お湯呑にお茶ばかりついで下すつた。香ばしかつた炮じたての番茶も、山吹色がもう出枯しになつて、胃袋がガブ／＼する。あゝ夜も更けた。

『久しぶりで一緒に寝ませうねえ。』

『えゝ、うれしいわ。その方がお話が出来てね……』

急に勢よく立ち上つて身づくろひしつゝ、隣室の襖を開けた。

この儘でいゝわ、と瓦斯の灯を消して、兩女とも長襦袢一枚になる。

はらり手頸にこぼるゝ鮮かな褪紅色地の友仙縮緬、緋の胴拔、白博多の伊達巻！ わたしはこの夜ほど女性つていふものゝ艶めかしさに、心を動かされたことはありませんでした。上半身をもたげて枕を直し乍ら、綺麗ねと多枝さんの仄白い顔が含笑む。私は夜具の中にかくれるのが惜しくてその袖のところに凭りかゝつたまゝ、半襟に深く顔をうづめた。

こんな風姿を見せつけて、……………罪だつたとおもふわ。かんにんして下さいね。わたしはほんたうに、すまないことをしたとおもひます。何もかも、決して亮様がおわるいんちやなかつたんですわ。むしろ男と云ふものゝすべてが、……………否、人間のすべてが、……………世にいふ戀愛と

いふものゝすべてが、そんなものだと言ふことを知らなかつた私……

『貴女が手を下したやうなものだ。』と云はれても、えゝ、男一人の運命にもなつたと思へば、女はうれしうござんすわ。なんて澄ましてたわし……
私……
處女主義が男を殺したと信じてたわたしは、まあ何といふ子供らしさだつたんだらう。

この頃きけば亮様は、到底結婚の出来るやうなお健康ではなかつたんですつて。絶對的に醫師から忠告されてたんですつて。それを私といふ愛人が出来たばかりに、禁斷を破つたの、誘惑の毒草に手をふれたの、我から死期を早めたやうなものだの何のつて。……

『だから亮様の死因が貴女にあるつて評判は、取も直さず貴女が處女ぢやないつて意味よ。』

つていつか多枝さんにも教へられた。ほゝ、何とでも云ふがいゝ。どんなにも勝手な臆測を附着けて、出来るだけ私の周囲を複雑にしてくれるがいゝ。どんな事に逢はうとも、私の擱んでる信念は動かないのだから。……それによつて紊されるやうな事はなく、それによつて汚されることはない。月は雲より上に澄むなり。……

わたしは『處女』なるが故に、いつも我が身の尊さを知ります。そして一難に逢ふごとに、その光輝をまして来るやうに思はれます。わたしは感じます、『ヴァジン』の輝き！ この光りの前にはどんな異性でもひざまづきます。否、ひざまづかせずにはおかない！ 童貞は女の權威であり、また至寶である。それは天帝もうばあははらずして、一度失つたらもう死んでも、取返しはつかないからです。それほご得がたいもので、

守りがたいものであるからです。むしろ私は自分の全生命であると断言してはごかりません。かの——名を天職や良妻賢母にかりてまで、性慾に負くる輩の見苦しさを見よ。たとへ捨られても虐げられても、それは彼女等の自業自得である。罪を男に負せやうとしてはなりません。責は女自身にある。それがいやなら飽くまでも自守獨行の念を養はねばなりません。

枕元は取散らした脱殻の紅紫繚亂！ さながら逝く春の落花です。灯もたゞ朧々！ 甘つたるい香油と白粉の香が蒸れて、ぼつと酔ふやうな熱の双頬に上るを覺ゆる。何とも云へず快い、かいまきの襟の黒びろろごの感觸、ふわ／＼した白毛布の足ざはり。背中合せの多枝さんは、もう眠つたのでしやう、優しい息吹がきこえます。

あゝ、もう燭の火が盡きるさうな！ 忙しう瞬いて瞬いて、暗う暗う消えてゆくかと思へば、又ひと度はばつと明らかに燃え立つて。……断末魔！ 断末魔の苦悶！ あれ泣いてゐる、じ、じ、じ、じ、じ、じ……

しとくと雨がふる。君と添寝の間に聞あたたかに、頬がぼうつと薄ぼつり。どこかでしきりと鶯が啼く、いづれ籠飼ひではあらうけれど……あゝ眠い、眠い。臉が重くつて、重くつて……。

そつと寝返ると、此方へは白い襟元を見せて、すや／＼と小やかな寝息を立てゝゐる多枝さん。寝亂れた銀杏返しに、赤い珊瑚の根がけの色がばかになつかしい。さうして皆さんはかうお綺麗なのだらう？ 枕元の紙白粉を一枚破つて、氣味わるく脂の浮いた小鼻から額の邊を一ぬぐ

ひする。あゝさつぱりした。

お兄様はもう疾に學校へ、お登校になつてしまつた後らしく、まあいつのまにと恥かしい。しばらくちつと枕の上に突俯してたが、多枝さんが何時までも目を覺まして下さらないので、つまらなくつて仕様がな妙に胃袋が空いてきた。ごうしたんでせう、例にないこと。この様子で見れば十一時過ぎたか、まさかね。

『あら。』

いつの間にか向き直つて、パツチリ眼を開いた多枝さん。私もつりこまれてつい嫣然！ けど寂しい笑みであつた、お互に…………。

『昨夜はよくねられて？』

『起きませうよ、もう、』と同時に發言。

てふうだらひ
手水盥になみくと湯氣の立つのを縁端にすえて、房揚子含み乍らぼんやりと庭を見る。

すぐ鼻の先は高い建仁寺垣にしきられて、その棕櫚繩の結び目に露の玉が。……あれ、あれ、あとからくと、傳つてはおち、傳つてはおちる。

蹲路石のそばの萬年青は滑つこさうに艶々と濡色帯びて、ぼつと吐く歯磨粉の桃色の唾も、時にとつては媚めかしい。

頸筋から肩からたらくと、膏のやうに溶けて流るゝ濃い白粉としやぼんの液に、お湯は見るゝ香りの高い、米の磨汁みたいな白にこりとなる。襟かき合せつゝ、濡手拭くわへて鏡臺の前に。

立膝してせつせと髪を撫でつけてらつしやる多枝さんの、手つきの巧

妙さと手早さに見とれてしまふ。何といふいゝ恰好なんでせう、一筋亂さずふつくりと、鮮やかに櫛目の通つた兩鬢。雉子の尾のやうなたば、櫛は襜褕の、峰だけを色のよい金無地にした黒甲で。何にでもちみ好きなたあさんは、伊達巻までが黒の松魚縞。半襟は鼠地にこぼれ松葉のぬひもやう、長襦袢の袖の友禪にさへ紅は入つてゐない。

朝飯をすますともう午近い。屋外には音もなく雪霧のやうな春雨がけぶる。

魚屋や、八百屋酒屋の御用きゝが、お勝手口から頓狂な聲を張り上げる。小婢が取次ぐ迄もなく、それに一々即答を與へて、奥さん〜といはれて平氣でらつしやるところをみると、私は何だかおかしいやうなふ

しぎなやうな氣がする。考へてみれば何のふしぎもないのだけれど……。

えらいわねえ、一家の主婦さんて。わたしにはとてもお菜ごしらへの心配なんて、一日だつて出来やなくなつてよ。と笑へば、わたしだつてこれにはいちばん困るわ、毎日けふは何にしようといふことが、朝から胸につかへてゐる。だけど仕方がないんですもの。としほらしく世帯じみた、可愛らしいことを云つてゐる。

これが癖の、灰を火箸の先にはさんで、丹念に五徳の上へ積み上げたり、またそれをきれいにこき落して了つたり。灰文字を書いたり。……時々顔見合せては、何かおもしろいお話でもなくつて？ と詮方なしに微笑むけれど、昨日から二人きりになつたらくと、楽しんでゐた期待

も何處へやら。貴女は相變らずおとなしいのねと、その實を切れないで焦れつたいわ、と言はれたやうに耳がいたい。

わたしはやつぱり孤獨の人間だ、といふ感慨が深い。無意識のやうに蜜柑を食べる。たあさんも新聞を膝の上にひろげて、一心に読み入つてゐらつしやる。

さ、ささ、さあつと急に雨脚が疾くなつて、一時に雨戸でも引いたやうに、室内が眞暗になつてしまふ。雷様でも鳴り出しさうな氣配と驚く間もあらせず、また徐々に明るくなる。四邊は人跡絶たやうに、氣味のわるいほど森として！ 寂寞を破るのは瀧と轟く雨だれの音ばかり。

退屈しきつた身體をもてあつかひ乍ら、のぼせた頬を恍惚炬燵布團にすりつけてると、心までがじだらくなる。何だか物足りなくて、涙

が滲んできた。

歸らうつたつてこの雨中に、……さうかつてなす事もなくかうしてゐるのも、心苦しくつてたまらなくなつて來ました。わたしにはわかります、わかります！ 邪魔にはされないうまでも、……多枝さんの心の中が。

『わたしの味方はやつぱり四郎さんだ。さう、四郎さんだ。四郎さんさへあれば何にもいらない！』

私には四郎さんがある、四郎さんがあると繰り返してゐるうちに、もう物狂はしいまで戀しいく感情が、胸の底からつきつめてくる。

あゝ留守中に、もしや手紙が來てるかもしれない。さうだ、さうだ、とおもふと急にうれしくなつた。いそぐと障子を開けて空をみる。

『そんな心配さうな顔なさらなくともいゝわ。やまなかつたらもう一晩泊つてらつしやいよ。』

多枝さんはのんきな事を云つてゐる。

でももうこんな沈滞した家の空氣の中には一刻もたえられない。息が停りさうだ、じりじりと、いらくくと。

わたしは四郎さんのために、この頃かうして他のお友達と我から離れて了ふのを意識し乍ら、どうすることも出来ませんでした。

俤を呼んで貰はうか、それとも傘と足駄を借りて出かけやうか、と考へ乍ら、わたしは食ひ入るばかり柱に背を凭せて、冷たいしぶきを浴び乍ら、たぎりおつる大雨をちつと眺めてゐました。

○
私は何處でも郵便脚夫の姿を見かけると、なつかしくつてたまらなくなる。私のところへのはありませんか、と一寸呼びとめてきいてみたくなる。

終日や泊りがけの外出先から歸つて來る時、唯一のたのしみは留守中に手紙が來てやしないかといふことで。……でもそれが見たくもない人からのだと、いつまでも封も切らずに投つておく。よくも目を通さず丸めちやつたり、引裂いて紙屑籠ン中へ投げこむのもある。虫の好かぬその人が切手や封じ目を嘗めて貼つたかと思ふと、手にふるゝのさへ氣持のわるいもある。

好きな人からのや待つてた便りだと、うれしくてうれしくてコートを半分脱ぎかけたまゝ、夢中になつて読みふける。何度もくくり返す。やうくそれを巻き納めて、ほつと夢から醒めたやうに、故しらぬさびしらの湧き上ることもある。

あはれ同じ心に我が文も、待ちたまふ人のありや如何？



でもまださうやつて、出歩いてゐられる内はよかつたのです。終にはおちく外出も出来なくなつた。もしや電話でもかゝつて來はせぬか、などとあてもない事に惹かされて――。一日お手紙を見ないと、また大變遠く離れかけたやうな氣がしました。よく夢にも見た。朝の寢覺の折

折にも、身の震へるほど四郎さんが戀しい。

どうしてゐらつしやるかしら？ 勉強でせう。論文を書いてらつしやる筈だ。わたしは恥かしい、いつまでもこんな事云つてぐづくしてた日には、みんなに愛想をつかされてしまふ。しつかりしなけれやしなけれやと吐りつけては、強ひて執筆に親しまうとした。一方においては出版物の事につき、書肆との交渉もまとまつてゐて、一日も早くと原稿を急つかれるのに、どうしても物事が手につかないんです。いつせもう當分四郎さんには逢ふまいと定めた。黙つて松林ン中へ歸つて了はうかとまで思ひ入つた。

けどたま／＼受話器とつて、あのなつかしいお聲を耳にすれば、また折角の決心も言葉もしどろに亂れて了ふんです。それはある土曜日の晩

でした。明日何處かへ行つてみませんか、と四郎さんはすゝめる。

『だつてねえ。だつて、私まだちつとも勉強が出来てないのですもの。』

へだてのない長上にでも、訴へるやうに私は云つた。その聲音の中にはいふべからざる媚の含まれてることを自分でも意識して、打消すやうに耳の根を熱くし乍ら、『え、よござんすか、出来てなくつても。可、可？ きつと。さう、ではお目にかゝりませう。……え、山内様をお誘ひ遊ばす！ それや丁度いゝでせう、是非ね。』

先刻あんなお手紙書いて出したことを思ふと、……仕事に目鼻のつくまでは、決してお目にかゝれないの何のつて。……止せばよかつた、と頬がほてつてきましたけれど……。

翌日は午時二時まで、兩國ステーションでおちあふと云ふお約束。
私の方が十分程早かつたので、ぼんやり待合室の入口に立つてると、

『や、お待たせしました。』

背後から一寸肩に手をおかれて、はつと胸がときめいた。四郎さんにはその眞新しい薄色のソフトがよく似合つてた。山内様は靜かに會釋なすつた。三人は並んで一隅の倚架に腰かけた。

四郎さんは小聲で、

『昨夜のお手紙拜見しました。堪忍して下さい。すつかり御勉強の計畫を打ち壊してしまいましたね。』

『いゝえ、私こそ。あんな事申し上げて……』『首の抜け出すほど

俯いて了む。

『ま、いゝでせう。今日は何事も忘れてのんきにお遊びなさいね。』

『えゝ、』

涙ぐましくなる。今日もお天気模様が氣になるので、わたしは爪皮のかゝつた日和下駄を履いて、蛇の目傘ぶら下げてゐた。それを持つてやらうと有仰るので、柔順にお渡した。

目的地は千葉の鴻の臺でした。

お互の體內や舌端に火の様な熱のあればこそ、磧の川風に吹きさらされ、霜さけのひさい山裾路の赤土に下駄を吸ひとられ乍らも、三人は元氣よく興じ合つたが、枯野の中を散々に歩き疲れて、暮方市川のステー

シヨンへ戻つた時分にはもうぐつたりと顔上げる勢もないほご切ない。
薄暗い待合室のよこれ切つた堅いシート、火の氣もない寒さ。何處か
北國の未開の地の一寒驛でもあるやうに心細い。一刻も早く明るい都
會へ歸りたい。半日でも東京を離れてゐると、歸途にはつくぐと戀し
くなる。

冷たい木卓を真中に、三人が三角形に向ひ合つた儘何にも云はない。
震へて口が利かれないんですもの。四郎さんが思ふさま大きなお聲で、
何か唱つて下さればいゝと思つたけれど、餘り小供らしい御願ひだから
よした。思はず知らず掌から、あくびの洩るゝも恥しい。おつれがあつ
てさへかうなのですもの、ひとりぼちだつたらどんなでせう。私はこ
の頃、ほんとうに意氣地なしの弱蟲になりました。

夜の車室内は寥々たれど、青いクツションの上の居心地が春の野のま
生のやうに快く、みんなこのスチームの暖氣を、どんなに戀しんでたか
知れないんです。顔見合せて何といふことなしに微笑んだ。が山内様は
そのまゝ俯いて、熱心に詩集を默讀つてゐらつしやる。

龜井戸あたりを通過時、ふと車窓からのぞくと、まあ綺麗！ 何だら
う、あれは。あゝ淺草公園のイルミネーションね。濃い夕靄の空中にキ
ラ／＼と。……十二階がビザの塔みたいだ。思はず立ち上つて眺める、
何と云ふ美觀壯觀！ 俗惡などとけなしてばかりは居られなくなる。御
兩人も御同感で、今夜はこれからよか樓へ行かうか、なんて議も提出さ
れましたけれど。……

いよく兩國停車場へ近づくにつれて、私はたまらなく辛かつた。こ

の夢心地をまたあの寒い夜風に吹き醒されなければならぬかと思ふと、……………まるで戀人とても別れる時のやうに……………。

四郎さん、山内様！ 私下りるのはいや、下りるのはいや、と湧き上る涙に曇る眼をそらし乍ら心の中で叫んだ。今日は私が云ふ。永久に、この鐵路つゞけ、世の終るまで……………。

兩國橋畔から築地まはりの電車に乗つた一行は、日比谷の交叉點に吐き出される。

實際市川の川風があんまり寒かつたんですもの、風邪を引いたか咽喉がいらくする。頭も痛い。背中には鐵板でも負せられたやうに重く、肩が凝つてく——。もう電車の中で幾度か、いつそ私はこのまゝお別

れして、眞直ぐに宿へもどります、と口元まで出かゝつただけれど、
歸りたかない、歸りたかない。よし倒れても力ある君が腕に、抱き起さ
れて見たかつたのですわ。御氣分がおわるいんちやないんですか、ない
んですか、と御兩人が氣にしていきて下さるのを、否、何ともありませ
ん、何故？ さう見えますか、と心にもなくしつこく、反問せずには
居られなかつた。

冬の夜の公園はさびしい。眞暗な樹立の茂みと、落葉樹の梢のみすく
くと天を刺し、池水も氷つたやう、音楽堂も眠つたやう。人一人にも
遇ひません。振り仰ぐと四郎さんのお眼鏡が冷たく光る。行途に高く鈴
實つた花の様に輝くのは、カフエ、マツモトの灯！

とん／＼と階上へ上る。

氣持のいゝ室内に、瓦斯ストーブはめら／＼燃ゆる。美しい女給仕の手にコートを脱がせてもらふ。胸間の銀鎖がユラ／＼水のやうにさゝゆれる。

山内様をテーブルマスターに、四郎さんとは向ひ合つて席に着いたれど、あまりに華やける灯の下よ。顔見らるゝも恥かしや、両手に抑へてうつむいた。せめてはいたましく顫へる頬に、紅の色なりと……。

なみ／＼注がれたペパーミンツの杯を一息に二三分透かす。透きとほる緑酒の色の眞青に手に映つて、爽いほど美しい。

金粉を浮べたやうな細かい脂の、きら／＼とたゞよふスープ。皿の模様のひなげしが底に一輪ぼつとりと紅い。卓上には温室咲か、うす紫の

可愛い花董の鉢植が匂ふてゐる。

三皿目あたりの並べられる頃かり、私はもう盃持つ手も定まらぬほごわな／＼震ふ。同じほごの分量に、四郎さんも山内様も双手の甲まで紅潮して。……

もう／＼口を利くのも臆切になる。我かの心地もなく卓上へ突伏してしまつた。

水をお飲んなさい、とか何とかつて、お兩人に呼ばれたのも夢心地、え、え、と頷いてみせても、袂の蔭なのでわからない。重いのだか軽いのだか、身體中がふわ／＼と。やたらと動悸がする——。コト／＼と心臓が破れさう。

御兩人はしきりと御卒業後のことなんぞ、——自分等の行く先は東京

でなければ、きつとどこか外國の港でありさうな氣がする、なまゝ話しかつてゐらつしやるのが美しい。今こそかうして袖をつらねて陸んでゐても、男と女の生涯ですもの。いつまで共鳴や同情を感じてもゐられますまい。

けさわたしも放浪者にでもなつて、(でも倫落の女ぢやないことよ)漂泊してゆくかも知れないことよ。さうして萬一めぐり合つた時、この若々しい眼ざしや美しいロマンチストの血もかれて、すっかり事務的の老巧な紳士になりすまして居られたら辛からう。わたしの黒髪も光澤が失せ、額に小じわが増えてゐやう。

けど、行かう、行かう。私は、私は。人妻にはならぬ、母にもならぬ私は私自身のものである。思ひのまゝにさすらひもせう。

一本の筆は我が生命である。唯一の慰藉である。權威である。見よや
甜目してわが前途を……。空には死なじ、女なれども。

こんな事をおもひ乍ら、うとくと眠りにおちてゆく……おちてゆ
く……。

やゝ過つて顔を上げると、掌にも生際のあたりにも、絞られたやうな
氣味のわるい汗がいつばい浮いてゐて――。けさそつと懷中鏡を出して
のぞけば、少し眼のふちがとろんとしてゐるばかりで、もう常の顔色に返
つてゐる。ほんの一寸と思つた間に、何十分過つたのであらう。珈琲の
コップから、ほのかな湯氣が立ちのぼつて……。

密柑の一房を口に入れると、ぞつと冷氣が終身を走り渡る。

あゝ此室を出るのがつらい。またあの寒い風に吹かれたら、氣が遠くなつて了ひはしないかとあやぶまれる。あゝ寒い、眠たい、頭がおもひ。やう／＼に椅子をとらへて、立ち上る心細さよ。力なき足の踏こゝち！ 花やかな女達の聲に送られ乍ら階段を下る。

忽ち颯と風一陣!! 君等がマントの袖を吹き上げて、刃の如き氷雨が面にしぶく。おゝいつの間にか降り出したさうな。

濡色を帯びた小砂利の所々が、黄金の破片か何かの様に光つてゐる。暗い雨の中にも何處からとなく、ほの白い電光が流れてゐて――。

あゝもう一步も歩くのが厭! そこの倚架に崩折れてゐる了ひたいやうな。――まあ何故わたしはこの頃、時々こんな無茶な氣分になるのでせう。もう歸る家なんぞなくつてもいゝやうな氣がする。家庭のこと

も母のことも思はずに、かうしてゐられる時が私にはいちばん幸福なんですから……。

雨空にばつと映る電車の洩電が、丁度ペーミンツの色に似てゐる。懐かしい池畔の喬木は暗の空にも高かつた。鶴の羽の寒さうに仄くらい水面には、ぼつりくと大粒の波紋が激しく亂れ出して來て。

○

私はさうした晩には宿へ歸りつくや否や、欲も徳もなくぐつすりと、倒れるやうに眠つて了ひます。

が、四時間ほどするときと目が覺めて。——その時にはもう頭腦が明鏡のやうに澄み渡つております。いつも此様な明晰さでゐられたら、

と思ふ位です。しかし朝になると、まためちやくくに攪亂されて了ひます。

それにぞく／＼と背筋を氷の棒のやうな冷氣が走つて、いくら着ぶくれても着ぶくれても、世の中が味氣なくなるほど惡寒かつた。まあほんたうに昨日風邪を引きこんでしまったものと見える。

床につくほどではなかつたけれど、その後數日の間、私は咳と熱と惡寒のために交々苦しめられた。あらゆるすちを抜き去られてでも了つたやうに身體中に力がなく、朝なんぞ部屋の四枚の雨戸を開けるばかりに堪へがたく息がはづむた。鏡に向ふたびに、赤くさんより曇つてる瞳と總氣立つた頬の荒び方が、顔を背けさせるほど不快だつた。でもわたしの病氣は無理をすれば治つちまふといつも定つてる。亂暴でも何でも、

これは亮様の感化でしたの。四郎さんにもやつぱりそんな半面が
おありでした。

相反せるやうには見えませうけれど、四郎さんと亮様との性格には、甚だ酷似してる點の多いのを見出します。殊に絶ず苛々としてせか／＼として、一時も靜止してはゐられない。何かせずにやゐられない。何物かに觸れてゐなければ、見てゐなければ、讀んでゐなければ。……つて風の激しい御氣性にとりもなふ筈のない、御健康が氣づかはれてならないので、『せめておからだの御無理だけでもなさいますな、心配です。……』つて、よく申上げ／＼たのですが。……私もやつぱり御多分にはもれなかつた。

心身の『苦痛擴張』が一種の快感でもあるんです。意地になつてわざ

と私は盛んに活動しました。

○

がらんとした夜の萬世橋驛構内。

お約束の時間より二十分も早く来て了つたので、波立つ胸をおししづめ乍ら、冷たいベンチに袖を掻き合せた。

寒い、寒い！ 齒の根が合ひません。ガチ／＼と足も地につかぬ。何といふ陰氣な停車場だらう、何處からか灰色の、痩せさらばつた「死神」でもものぞいて、指さして嘲笑つてゐさうな氣がする。思ひなしか人の影もうすい。出札口の男や赤帽や驛夫やは、好奇心に充ちた眼をして時々こそ／＼と此方を見ました。

が、たとへこのまゝ石像のやうに凍結して了はふと、よしや一晚待ち明かさせられたとて、四郎さんのためになら、何ともおもひはしませんの。私の氣性が！ あれほどの氣嵩が！ どこに影をひそめてしまったのでせう。待たれてなどゐる餘裕はなかつたんですもの。わたしは戀しい面影に餓えてゐます。なつかしい聲音に喝いてゐます。一刻も早く逢ひたい、見たい、話たいの。もうもうごうしたらこんなにまで惹かされる心かと、自らのふがひなさをあはれむ涙は、冷たく瞳ににちみまずくれぞ。

頭上のプラットホームでは、電車の發着の度毎に、雜然たる音響が起ります。その中に交つて四郎さんのお着きになつたことは、殆ど直覺的に感じられましたが、わたしは伏目に固くなつてしまひました。顔を合

せるのがこはくつて！ 傍に立ち添ひたまふや、息がはづむだ。胸がふるへた。

『ともかくこゝを出ませう』といはるゝまゝにお後について、光りうづまく須田町の方へ出た。

まあ、あの御親友の山内様が、大へんにおゐるくて御入院あそばしたのですつて。え、と私は吐胸を打たれて、何だか夢のやうな気がする。一週間前にあゝして御一緒に歩きまはつた方が……。さういへばあの日ひごく御大儀さうでも被居たやうですけれど、あゝ云ふ御性質なんだらうと思つて、別に氣にもとめませんでした。……お傷はしいこと、悲しいことゝ胸がせまつた。それに、それに、四郎さんの御様子があまりに御心配さうであつたので、些少妬みをさへ覺えたのでムんす。

でも、僅かに寂しい笑顔を見せて、『今まで病人に附添つてゐて、馬鹿に感傷的になつちやつてゐるんですから、今夜はうんと燥ぎたいんですよ。』と有仰る。わたしも頷いてほゝ笑んだけれど、とてもそんな浮き浮きした氣持にはなれさうもなかつた。賑やかな宵のどよめきに、追はれるやうに目を伏せて…………。

何處の方へ行きませうかつて…………どこだつていゝんですわ。どうせ小笹様と御一緒の時には…………。

ハッと自動車に驚かされて、あぶないと袖を控えられたにも、少女のやうな胸の高鳴り！ 眩さを恥ぢて裏通りに入る。

『どうなのですか、其後御創作の方は？ え、矢張書くのがおいやですか！ 困りますね、どうしたら書きますか。いやだ〜と云ふお氣持

を一掃させる工夫はないもんでせうか。貴女はあんまり諦め、――投げ出しが早過ぎてしまふのぢやないのですか。それならば最後の五分間踏ん止るところに、尊い生の努力があるんじゃないでせうか？ 人爲的に意識的に勇氣を振り起して、やりとげてしまふことは不可能でせうか。僕はたとゝ如何すれば、貴女の元氣を引立たせ得るかとのみ考へてゐる。……』

『ありがたう。小笹様！ わたし、わたしね。……』
こんなに優しく勵はれると、意久地もなく取纏つて泣き出したいやうな氣がする。『それつばかりの物が、さつさと書けないやうな事でどうする！ 死んでしまへ。』とよく亮一様に罵られては、反抗の唇を咬みく燃ゆるやうな眸で睨み返したわたしが！

鎌倉河岸から常盤橋、吳服橋から八重洲河岸づたひ、つひに銀座へ出て、カツフェ、パウリスタへ入る。

四郎さんはまだ夕飯前だと有仰る。私だつてさうなのですけれど、今夜ばかりは虚言を言ふことをお許し下さい。『否、もうすませてまゐりましたのよ。』つて！

この頃食欲の衝動といふものがまるでないんです。見たばかりでも苦しくなるんです。が、青い壁紙。白い柱。ピンク色の天井。大理石張の圓卓。圓鏡。眞紅な玻璃の一輪挿。菜の花。切子形の電燈。など小ぢんまりして明るさと暖かさと優しさとを取あつめたやうな、婦人室の情景はばかによかつたんです。入口のカーテン一重にへだてられた、隣室の

喧囂さに引きかへて。……

ガン／＼と小やかましい、自動ピアノの音も微妙に心を惹きます。私は好きな珈琲ばかりガブ／＼と飲んでみました。苦いのお砂糖も入れないで、……。

給仕の少年がベルモットの瓶持つて注ぎに來たとき、あら、と目を瞠りましたけれど、やつぱり心弱くも唇につけて了つた。ペパーミントほどの芳烈さはなかつたが、口あたりはかへつてよかつた。薄琥珀色の香も味覺もビールに似てゐる、と呑みさしを卓上において、娛しむやうにちつとみつめた。もう直ぐぼつと頬に出てくる。睫の先に霞がかゝる……。

『まるで貴女の身體は、理想的に酔ふために出來上つてゐるやうなもの

ですね。

でも、かへつて少量はおやりになつた方がいゝんですよ。』

と眞面目に云はれて、さうでしやうか、と重い瞳を流るゝやうにそちらへ投げると、

『非常に可愛くなるんですもの。』

と笑はれて、あら、と云つたきりハツと一入耳朶が燃ゆる。

思ひがけない言葉をきくものよ。では、では、私はもう飲まない!!

『僕の友達の千代子様は、いつもく濃艶で、可愛ゆくつてゐらつしやらむ事を望みます、——どうも失禮。でも女がえらく成長して行くと、男は別れなければなりません。僕はいつまでもく、貴女を友として行かねばなりません。』

まあ、四郎さん。あなたに對しては、いつでもこんな柔順な私ですのに、やつぱりまだ可愛氣が足りない和有仰るんですか、ほゝゝゝゝ。

見るともなしに、ちつと四郎さんの顔を見る。額をさゝへて俯いてゐらしたから――。

どうしてこの人がさう私の心を囚へてしまつたらうと、不思議でたまりません。どう最負目に見ても、あんまり美しい人ぢやない。――けど戀は價值づけをもつて始まるものぢやありませんからねえ。

寒いのに戸外へ出たつて行き處がないからと、二人はいつまでもこの白い車から離れやうとはしませんでしたが、きりがないので、ちやそろく立ちませうか、と偶と懷中時計を出してみて、今頃山内は熱の出る時刻だ、と獨りこたれる。私も暗い氣分におそはれる。

すまないやうな氣がしてなりません。山内様のお傍から、今夜は四郎さんを引き離して了つたんですもの。あゝ何故人間つて、病氣なんぞで苦しまなければならぬのでせうねえ！ 今更のやうに人間の生命の尊いことだの、もろいことだのが痛切に恐ろしくなつた。どうぞ／＼悲しい事になんぞ、ならないで山内様!! あゝ寒い日の枯野行を、私達のためにおつきあひ下すつたからだと思ふと、——責任の半分は此方にあるやうな氣がするんですもの。否、たとへ原因はその故ばかりぢやないにもしろ……。

伊東屋で原稿紙を買ふからと有仰るので、私は二三歩先立つて大通りの方へ向つた。と、ふと追ひ継るやうにして、否、よしませう、よしま

せう。と背に軽く手をふれられ、電流のやうな感じが颯と脊髄骨を走つた。いけない、いけない。私に觸つちやいけません！ 袖もふれてはなりません。

地を行くか空を歩むか、………遅々として夢心地。お濠端つたひ、三宅坂の方へ登つて行く。………大内山の夜のみぎりは森々として鐵のごとく、御門御門のアーケ燈のみ、強烈な紫色の燭光を夜更の空に放つてゐる。中にも半藏門あたりの景色がいちばんいゝ。水の底にも都會のあらゆるやうな。紅、緑、紫や黄金の灯影がゆら／＼とちらめきわつて……。

『ずいぶん勞れたでせう。』

『いゝえ、そんなでも！』

とは言ひ乍らも、足の疲れがみんな肩へ上つてしまつて、炎のからむ

だやうに痛熱い。膝から下は一步毎にがくりがくりと、やたらと路上に蹴躓く。おまけに番町邊の櫻木立の下道は暗い。

『もうおそいのでせうね』と訴へるやうに四郎さんのお顔を見上げると『今少し我慢なさいね。今夜はお濠端を一週しやうと思つたんだから。――』

エ、く事情のゆるすものならば、このまゝ徹夜でも歩きつづけてゐたい。けれど、けれど、歸らなくつちやなりませんわ。しかも自分の家でない、氣兼ねの多い中へ歸らなくつちやなりませんわ。あゝわたしもこんな時には、絶對自由の棲家が欲しくなつた。

何かのはづみからふと亮様の御名が話題に上せられました。

『もしか亮様がおなくなりなさらなかつたら、わたしはどうなつたと

『お思ひなすつて?』

その聲は我乍ら、我と我が耳を疑つたほど異様に疳走つてゐました。
通行人が振り返つて行く。

『御一緒におなりなすつたでせう。』

と四郎さんは事も無げに答へられる。

『まあ、さうでせうか!』

つて深くうなだれて了ひました。

わたしは屹度自分が自殺で了つたらうと思つてますのに……。

四郎さんは何もそんな重大な意味のつもりで有仰つたのではないでせうけれど、私にはそのお言葉が免れられぬ強い權威を持つたものゝ様に響きました。

けど亮様の肉が勝つか。私の靈が敗れたか。もう少しあの状態を、持續させてみなければわからない事だつたのです。問題は未解決のまゝ残されました。將來は依然として又です。どうぞ、どうぞ誰も永い目で見たらして下さいますねえ。

九段の坂の上に立ちて、闇の淬に淀む底に深く／＼沈むた大都府の、無數の灯の美しき輝きを見たるもその夜の印象の一つなれど、……不安に焦らるゝあはたゝしき心には、たゞ鋭い羽音立てゝ時間の飛び去る氣配のみ、耳を刺すやうに感じられる。

が、坂下の例の古く小鳥賣る家の前にさしかゝつたとき、二人は思はず小鳥のことを言ひ出して興じた。『文鳥は、千代、千代々々つて鳴きますね、』なんて笑はれて、……わが上のやうに面があからむ。

雨に暮れたる紀元節の灯ともし頃、思ひがけない和田様から電話がかゝつてくる。『いま小笹と銀座のパウリスタにゐますから、御都合が出来らるなら直ぐいらつしやいませんか。え、いらつしやる！ ちやあ御婦人の事ですけれどどうぞなるべく早く！』えゝゝゝ直ぐですよと笑つて、一寸鏡の前に立つなり、わるい方の半コート引かけて。………先日からの風邪氣がまだ脱けきらぬので燃えるやうな咳が出て仕方がない。

雨に濡れた市街の美しさ。またゝき初めた電燈がきらゝと映つて……。早くゝ行きたくつてたまらないのに、また意地わるく今日の電車なのろくさいこと。尾張町本石町間を、うらめしいほど疾いとおもふ

場合もあるのに。

雪の垂る雨傘を下足番に渡して、勢ひよくとん／＼階段を上つたが、求むる姿は何處にも見えなかつた。まあこんな筈ではないのに、……あきれて見まはすところへ、息を切つて四郎さんが馳け上つていらした。

『ま、此方へいらつしやい』と婦人室へ連れて行かれる。何が何だかわけがわからないので、すゝめられる椅子の背を捉へたまゝ『和田様は！』と伺ふまもなく、『實はもうこゝも飽きたので、ごここ他へ行かうと思つて出たのです。そして先刻から彼處の角に見張つてたのですけれど、貴女ごつちの方からいらしたのです。いまこゝへおはいりなさる後姿を和田が見つけたといふので、急いで飛んで來た』とせいく有仰る。『まあそして何うしてらつしやるの？』『和田ですか、戸外に待つてますよ。』

『あら困りましたのね、』と立ち乍ら珈琲を飲みさして顔を見る。

『ぢや呼びませうか、』と先刻の窓のところへ出て行つて、

『おーい、上つて来いよ。』なんてぎなつてらつしやる。

『先夜は失禮しました。』

ふと耳元の聲にびつくりして見れば和田様が。いつもく制服姿の時ばかりお見上げしてるのに、インベネス召した中折帽の、まあけふはすつかりとお父様みたやうなお顔遊ばして——。小倉のお袴短かく召してらつしやるのが、不釣合で可笑しいやうだ。

黒つぽいセルのコート着て、引詰の分髪にした三十あまりの婦人が這入つて來た。卓に向ふでもなく人待顔に、一隅の椅子に腰をかける。

和田様と四郎さんの間には、しきりと暗號電報が交される。私のとこ

へもまはつてきた。『あの婦人（おんな）を何（なん）とみる、』『山川（やまがは）浦路（うらぢ）とちがひますか。』
なんて。

『さあねえ』と思（おも）はず後（うしろ）を振り向（む）くと、その女（ひと）の足袋（たび）のカバーが氣（き）になつた。私は（わたし）これほご嫌（きら）いなものはないので……。まさか、——と興（き）ざめる。

私（わたし）たちはこゝを出（で）てから、すぐとまた程遠（ほどとほ）からぬ、カッフエ、ウエン
ナの二階（にかい）を來襲（きたしゅう）しました。

もうく呼吸（いき）苦（くる）しく、——美（うつく）しう皿（さら）に盛（も）られた、さまぐの西洋菓子（やうやうかし）
なんども見る（み）るのもいや。甘（あま）つたるい紅茶（こうちゃ）も舌（した）だるくつて……。一口含（くちあ）
んだまゝ吐（は）き出（だ）したくなる。眉（まゆ）をあつめて胸（むね）をおさへた。

『此家へは始めてですか。』と和田様にきかれて、『否』と何気なしに答へたけれど、何となくすぐたかつた。だつても……ほゝゝ。そつと見ると四郎さんも、澄まし込んでだまつてゐらした。

あたゝまるとうるさく咳が連發する。いくら堪へやうとしたつて止まない。和田様がいゝ氣になつて弄かふ。『いよく肺病になりましたね。もう三枚目あたりまで進つてゐるぢやありませんか。やあ、黴菌が飛んで来る。』などと袖で拂ふまね。あまり執念くなさると、御申談とは知り乍ら、うらめしくもなつて来る。

『いゝことよ、傳染して上げるから。………』

アイスクリームを食べる。先刻から口が固いてたまらないので、さぞ美味しいだらうとおもつたわりには、冷たいばかりで一匙毎に戦へがと

まらず、ロ^くン中^{なか}が冷^{れい}藏^{ざう}庫^こみたいになつてしまふ。

和田^{わだ}様^{さん}は正^ま面^{めん}からじろく。

『内^{ない}藤^{とう}様^{さん}、けふは珍^{うづ}しくちみな服^{ふく}装^{さう}をしてらつしやるぢやありませんか。』

『あらさうですか。』今更^{いまさら}のやうに、願^{ねが}を襟^{えり}にすりつけて見る。

黒^{くろ}地^ちに朱^{しゆ}と褪^{たい}紅^{こう}色^{しよく}で扇^{せん}面^{めん}散^{さん}らしのぬひのある半^{はん}襟^{えり}と、錆^{さび}納^な戸^とに井^い桁^げ緋^ひの銘^{めい}仙^{せん}のわづかな部分^{ぶぶん}とが、卓^{チャイ}でくぎつた胸^{むね}のあたり、コートの襟^{えり}の下^{した}から表^{あら}はれてゐる。

『着^き替^かもしないで飛^とんで來^きたからですよ。』

『白^{おしろい}粉^{こな}もつけて被^{おほ}居^ゐらないのですか、たいへん薄^{うす}いのですね。眞^{しん}から白^{しろ}いやうに見^みえますよ。』

『まあ！』

『おい／＼君、女性の方の前でそんな事云ふのは失禮だよ。』

四郎さんが眞顔で叱る。

『もう和田様はいや！ いつでも亮様のことはかり云ひ出して、きつとなんですもの。』

『あれほど熱烈に愛せられてゐたら、もう生涯他の人の愛なんぞ、欲しなさりはしないでせうね。』ですつて。

否と、強く頭をふつたけれど、傍に四郎さんがゐらつしやると思ふと氣が引けた。……媚びるやうにみられてはたまらない。

去るもの日々にと云ふ。『もう何でもありませんの、戀しくも、悲しくも、』と笑へば、『でもたとへ口先では何と云つても、忘れられるも

のぢやないでせう。』つて。』あら、和田様、『と私はパツチリみはつた眼をそちらへ向ける。』ね、小笹様はどうお思ひなすつて?』『僕は和田君とは考へがちがひますから。』つて、うまく逃げて了はれる。

『ねえ、和田様、人生つてそんな單純なものぢやないでせう。わたしは生涯基石に戀をして過ぐされるやうな、冷靜な(?)人間ぢやございませむ。』

愛も憎みも怨みも辛みも、何もかも、すべては試験の石に過ぎませんでした。成長とは眞に悲しみの謂であります。いつまで過去や亡き人の上になぞ、關づらはつてゐられませうぞ。わたしは自分自身のために生きなければなりません。

『内藤さんをそんな薄情な女とは知らなかつた。僕ア貴女が憎くなつ

た。偶像破壊者がよつてたかつて僕の理想郷を打ちこはさうとする！』
つて、和田様は頭を抱える。

『ほゝ、丁度よござんすよ、あなたになんか好かれなくつても！』と笑ひ乍らも、わたしはうらめしく和田様を見た。

それや薄情かも知れませむ。それや冷刻かも知れませむ。けれどわたしはまだ若いのです。『主我的であることこそ最も人道的』なんです。

かういふ物のあきらめ方が、どんなに私をおちつかせてくれましたでせう。『和田様はまるでまだ十七八の少女の様な、純な狭い突きつめた舊い世界に住んでらつしやる、』と云ふと、

『何ですつて。これは怪しからん！』

スプーン眞甲に振りかざされた手つきに、二人は失笑してしまふ。

『あまり大きな幻滅の悲劇にぶつからない内に、ドリーマーの夢を醒まして上げるのは、我々お友達の義務ですわね。』

『えゝ徐々にね、』

と四郎さんは思ひやりの深い眸で、和田様をみつめてゐらした。私は恥かしくなりました。

わたしには愛他心が足りない、同情が薄い。とかく批判と嘲笑ばかり先に立つ。眞實の親友の仕方とは云はれない。

で今夜も、——『友情』つてことについていろ／＼論じられた時にはくやしいけれども私も和田様のお言葉を、否定するわけにはゆきませんでした。男の方たちの社會の方が、美しいままで熱く濃かであると云ふことを。わたしも始終さう思つております。女同士なんてお甘いばかりで

それやあたよりにならないものよ。

私には和田様が、こんな質問ばかりを提出なさるお心持はよく解つて
みました。ていのいゝ口頭試験を試みられてるやうなものねえ、女性の
心理研究の材料のために……。

けど女に對して、あまり虫のいゝこと御注文あそばしたつて駄目よ。
但し和田様の『フラウ』はどうで被居るかぞんじませんが、ほゝゝ
ゝゝ。

此家の階段を下りるときつたらね、丁度眼下の玻璃函の中に並べてあ
る種々の西洋菓子に見恍れて、私はいつも一段足を踏み落しそくなひま
す。あら、食べたいんじゃないんですけれど、………ほゝゝゝ。

戸外へ出ると、いゝあんばいに雨はすつかり上つてゐました。三人はそのまゝ日比谷の方へ向つて歩き始めました。しめやかに語り合ひ乍ら……。

問題にされるのは、おもに『リーベ』の事ばかりでした。戀といふものは、それほど重大なものかしら？ 青年のすべてにあるほどの。死んでも惜しくないと云ふほどの。わたしにはわからない、わからない。高下駄の齒にあたる小石を蹴散らした。

たゞ和田様が、『僕には勉強と戀を同時にはとてゝ居られない。二兎を追ふ者は一兎も獲ずつてこともある。』

『否。そんな事ぢやいけない。現時の青年は二兎も三兎も追つて、みんな獲るだけの野心がなくつちや。』

と四郎さんは笑はれる。でもそれは理屈ですわ。わたしその點だけは和田様に深く共鳴いたします、ほゝゝゝ。片手に事業、片手にラブをするなんてことは、到底私には不可能なんでもの。

いつのまにか公園の中に這入りました。まだ夜風は寒いけれども、何處か春の夜のやうに温かな氣分の漂ふ宵で、雨後の盤常樹はきら／＼と白熱燈の光度を受けた半面だけが純白く、燃えるやうに輝いてゐます。檐溜におつる灯影も美しい。

空には羅のごとき白雲が一面に流れてゐました。路には月影のこぼれたやうに、樹影が參差と枝と交してそよいでゐます。三つの影法師が後に尾いたり、前に立つたりしました。

わたしの咳を氣にして四郎さんは、『寒くはありませんか。マントを貸

して上げませうか』なんて優しい。『否、まさか』と笑つたけれど、その聲は妙にうるんでゐた。四郎さん、お願いですから、どうぞ私をそんなに大切にしないで下さい。もつと怖らしい人でゐらして頂戴。さうして戀がらせておいて頂戴。吐つて下さい。鞭撻して下さい。わたしの悪い蟲は打たれても苛められても決して泣きませんけれど、そんな事いはれるとすぐ涙をこぼします。

『及ばず乍ら三人はいつ迄も友達でゐませうね。身體はわかれくになつても』なんて和田様の有仰る言さへ、今宵は身に泌みてなかくうれしうございました。

あんまり歩きまはつたので、一同また暖かい火の氣と飲料が戀しくな

り、園内^{とんない}のとある飲食店^{いんしょく}の椅子^{いす}に崩折^{くずれ}れてしまふ。冷え切^{ひきき}つた六つの手は、卓上^{ていじょう}の手爐^{ひばち}の上^{うへ}にかざされました。四郎^{しろう}さんの指^{ゆび}は赧^{あか}くて太^{ふと}い。和田^{わだ}様のは白^{しろ}くて細^{ほそ}い。私^{わたし}のはきいろくて長^{なが}い。

『まあ暖爐^{ストーブ}がなくちやつまらないのね。』食卓^{しょくたく}被^かけの白布^{はくふ}の色^{いろ}もうそ寒^{さむ}く、いつまでもガタ／＼震^{ふる}へがとまらない。やがて二三品^{ひん}の洋食^{ようしき}とともに、お兩人^{ふたり}の前^{まへ}には生ビール^{きびる}が。私^{わたし}の前^{まへ}には例^{れい}の小^こさい縁酒^{えんしゅ}を盛^もつた杯^{さかずき}が！

また和田^{わだ}様^{さん}が屹度^{きつと}何か有仰^{あつしや}るにきまつてるとは思^{おも}つたが、我慢^{がまん}してはゐられなかつた。一息^{いそ}に啣^{くは}むだ。困^{こま}つたくせがついて了^{しま}つて、……………いつのまにやら恥^はづる色^{いろ}もなく、香^かをなつかしむやうな子^こになつて了^{しま}つて……………いまにこんな刺戟^{しげき}が無^なければ過^すぐされぬやうになるだらう。

疲れ切つてゐる時には効力も早く、直き恍惚と打ち傾いて了つたのを、ふと顔見合せた和田様に、

『おゝ内藤さんの美しい顔色！』

と頓狂な調子で云はれて、思はず双手にかくした。厭！お恥かしうござんすわ。先夜パウリスタで四郎さんがあんな事有仰つてから、私、もう今までのやうに、無心ではゐられなくなりましたの。きつと／＼今夜の瞳はいつもより艶つぽく、可憐な嬌態を含んで輝いてゐるにちがひない。無論何の意味もないのですけれど。……いやしいことですね、一種の品性の墮落だとおもふ。

『危険々々！内藤さん、途歸は大丈夫ですか。電車の中で居眠つてると、車庫へ入れられて了ひますよ。』

『ほゝゝゝまさか、車庫まで運ばれはしませんけれど、乗り越しの失敗はよくやるんですよ。』

額にかざした手のかけでそつと目をつぶると、御兩人の話聲が遠い遠い世界の涯の出来事ででもあるやうに思はれる。時々此方へも飛散の來るのを、その度毎にハツと眼を開いて、いゝかげんな事言つといた。

やゝ我に返つて密柑を食べる。おゝ冷たくつて！ 胸がブル／＼と縮み上る。四郎さんの席からは手をのばしても届かないので、『僕にも一つ剥いてくれゝば、大いに幸福を感じるがなア。』

和田様は柔順に一個取上げて、

『君が爲に密柑を剥くべく、あまりにこの手のデリケートでないのを

憾とする。』

なんて戯け乍ら、

『内藤さんも氣の利かない人ですねぇ。』

『だつても、自分の食へることの方がかんじんなのですよ。』

と私も笑ひ乍ら、盛んに甘い液をむさぼつてゐました。まるで渴いた鈴蟲か何かのやうに……。

『ちよつツ、そんなとこにまで個人主義を發揮して！』『御免なさいね。ほーほーほー』

氣のつかないではございませむ。私は何でも感じます。けぞ出過ぎたやうに思はれるのがつらい。何もかも知らぬ顔で通します。四郎さんは今夜は何だか沈み込んでゐらした。山内様の御容體でも御不良のではあ

るまいかと心がうりでしたけれど、口に出しては問ひ得なんだ。

○

『姉さまとしての貴女もだんく見失つてゆく。——』
四郎さんからのお手紙にこの一句を見出でたときは、白くなつたり紅くなつたりしてぶるくと震へました。

自分の罪を目前に、あばかれたやうな気がしたんです。生々しい傷口をえぐられたやうにもおもひました。それはもう私だつて分に過ぎた。「姉さま」としての愛敬をいつまで受けやうなどゝのぞんでは居りませぬ、否、この頃の私の態度に、どこに一つ姉さまらしい點がありません。う!! けれども、けれども……。

『それが僕の手紙をかくことが出来なくなつた理由です。』つて有仰るんですもの。『友の平癒と貴女の創作が終るまで、何にもせずになまつてみてゐる、』ともございました。どうしやう、わたしはどうしやう。夕闇の柱に御文握つたまゝからみついて、わたしはくやし涙と慚愧の涙をちやんぽんに流しました。わづか二三行の文字がこれほどまでに私の心を引き撈らうとは、或ひは四郎さんは御想像もなさかなかつたかも知れない。でもこの頃の私は、たとさへ我乍ら涙ぐましいまでの、しほらしい弱蟲になつてますものを。

もうくどうしても、家にちつとしてはゐられなくなりましたの。宵暗の空眞黒う凝つてその透間から星がキラ／＼笑つてる。暴風雨前のやうな物凄い晩でした。電車はお濠端の暗をついて走りました。

車中の一隅にぐつたりと身を凭せかけた私は、友戀しさの念が胸に燃えた。あてもなくさんく歩き疲れて！

こんな時たよりに思ふのはやつぱり同性の、——それもたあさんよりほかありませんでした。其家の格子戸に手をかけると、もしやお留守だったら、と急に心が臆しましたが、そこまで考へるには忍びなくつて、

『たあさん！』

とふるへ聲に呼んでみました。

『おあがんやう。』

と凛とした、張のある聲が内から響いたとき、わたしはどんなにうれしかつたでせう。

顔を見るや、涙の滲んだ眼で笑ひかけました。

けれども、座にはもう一人お客様がおりでした。わたしは固くなつてだまつてしまつた。たあさんは例のものごしで、お吸須にお湯さしやり、面白さうに笑つたり話たりしてゐらつしやる。

理不盡なことですけれど、私はそれが憎かつた。妬しかつた。もうちりくとして敵意をさへ含んだ眼に、そのなよくと折れさうな、細い白い美しい襟元あたりをみつめてゐました。

が、そのうちにふと心づいた。

いつたいわたしはたあさんに、何を告白に來たんでせう？

たあさんのお友達はわたし一人ぢやなかつた。いゝえ、いゝえ、私なんか物の數でもないんです。

うつかりしたことを云ひ出して、御友人間の談笑のたねにされてはた

まらない。わたしは、わたしはまあ、あの大切な四郎さんのことを、なぜ一寸のまでも他人にきかせやうなんて氣になつたんでせう。

と悪夢のさめたやうにぼかんとしてしまひましたの。『ごうなすつたの、元氣がないのね。疲れたやうな顔して。――』

とたあさんは笑ひ乍らお愛想の言葉をかけて下さいますけれど、さびしい笑みをみせたまゝ、わたしはうつむいて長火鉢の猫板の上にあつた鏡花集をとつて、読みふける風をしてゐました。

お客様がお歸りになつてしまつて後も、二人はしばらくさうして向ひ合つてゐましたが、人しれぬ涙はポト／＼と灰の中へおちました。私たあさんにすまなくつて、たまらなくなつたんですの。何故びつたりと心が合はぬ!? 焦れつたい! 焦れつたい! 別れてゐれば戀しい人だけ

れや。……

でも他に行きごこはないんだもの。やつぱり泊り込むやうなことになつて了つて。……

また先夜のやうに寢床を敷いてもらつた。『一寸御めんなさい』つて、たあさんは、枕元に座つてねまきの儘でお手紙を書きはじめる。すると巻いたものをほつすが如く、膝のまはりに波打つのをかいやりながら、折々小首傾げて筆を嚙む艶な風姿を、私は夜具の中で、両手にしつかり自分の胸を抱いたまゝしみぐ眺めてゐた。

もうく心苦しさとあきたらなさに、たつた一言でもいゝから、何

か言ひたいくと、舌のこはばつて了ふほご、幾度か唾をのみ乍ら、

『たあさん。』

て、小さく呼ぶと、

『なアに?』と思ひがけなくこそくと此方へ寝返りなさる。

『まだ眠られないの?』

『えゝ。あなたも?』

頬ずるばかり顔をよせ乍らも、こんな事をいひ合ふばかり。

そのうちにわたしは急に切なくてくたまらなくなつてきた。起き上つて括り枕の上に突俯しましたが、總身から絞られるやうな苦しい汗がたらくと冷たく額ぎはを流れる。

『あゝ先刻「湯女の魂」なんぞ讀んだからだ。……』

と意識しながら、夢だか現だかわからない。

ともすれば、唇を洩れさうになる呻き聲をこらへて、食ひつくやうに我が二の腕を噛みしめてゐた。と、頭だけが逆さまに、地の底へくくと引き込まれるやうな氣がして、………こはいんですもの。

切角ねいつたたあさんを、醒まさすまい醒まさすまいとの心づかひに身動きも出来ねば、闇の中だけにいよくいろくな幻影がもやくとして一層息がはづむ。………

○

今日はいゝお天気でした。人生の幸福が湧いて来るやうに思はれるのはこんな日です。僕は森へでもお誘ひしやうと思つて、電話をか

けたけぞお留守でした。

いくたび呼び出して「話中」。しかたがないので新宿邊りまで街を歩いて来て、それからやうやくかゝると御不在だったので、『お友達は僕一人ではなかつた筈だつた。』と微笑まれました。

病友の體溫が八度を切つて、平熱線に下つて行くのがうれしかつたので、僕までも元氣づけられました。フレーシアの黄色い花が萎んだので、せめてゼラニウムでもと思つて、紅い花を持つて行くと、友は嬉しさに笑ひました。僕等のグループでは、切りに「或物」を探してゐるのが、皆の心持でよまれます。溫い日に蒸されて、木ぬれが紅ばみ行くその不可思議の力、岩のやうにガチ／＼と固まつた眞黒な柳の枝から、青い芽をふくその力……美しいもの。悅

びの泉……それが皆のもとめたづねてゐる「或物」なんです。

さようなら、御元氣よく御創作にかゝつて下さい。御風邪の用心も怠らずに。明日もいゝお天氣でせう。いづれ又。

四 郎

千代子さま

みもとに

もう、もう、もう、何故かう行きちがひにばかりなるのだらう。せめて、せめてお聲だけでも伺ひたかつたものを……。四郎さんもあんまりな、私の氣も知らないで！ 此様なのんきな事有仰ると憎くなります。あんまりくさくするんですもの。髪でも變へたらまた些とは、氣が

晴るかしらと思つたんですね。久しぶりで新橋まで、出かけて行つた後
なんでした。惜しい、惜しい、くやしい！ 切角美しう結つて來た唐人
鬘も何も、めちやく／＼にむしやぐり壊したくなる。ちだんだふみたい。
さうしたらこの波立つた胸が安まるだらう。とてもとても家にちつとし
てはゐられない。で、やたらと飛び歩かせる様な思ひを誰がおさせなさ
るんでせう。わたしにはもうお友達なんぞありはしないわ。

先日仲よしの光子さまの許へ行つたとき、笑談のやうに四郎さんのこ
とを少し話した。何處の學校の生徒、何處の方、と光子さまはしつっこ
く追及なすつたが、私はたゞ笑つてた。

『御注意申上げるまでもないでせうが、お氣をおつけなさらなくつち
やね、貴嬢！ 利用されるのだといけないわ。女と交際したり、……』

殊ことにそんな一寸文章ちゆうぶんなんぞのうまい男ひとはなほさら、……得えてそんなのに偉えらい人や眞面目まじめな人物じんぶつはないもんだから。』

と云いはれて、赫あつと目めのくらむほご湧わき立たつた。おゝ何なんといふ侮辱おごだらう、わたしの四郎しろうさんは、四郎しろうさんは、そんな人ひとぢやない。そんな人ひとぢやない。えゝゝ、よしんば信しんじ過すぎてゐて、背そむかれたからつて、あざむかれたからつて、わが不明ふめいをこそ恥はぢて悔くゆれ、つゆその人ひとを惡にくまうなどの念慮ねんりょはもちませんものを……。

○

叔母おばの家の近所ちかくに訓盲院くんまういんといふ門表もんぶかけた私塾ししつがありますの。風あぜの工ぐ合あひで時々ときどきオルガンの音おとや唱歌しやうかのこゑの漂たぎふてくるのを、ある朝何あさなんの心こころも

なくふつと耳にとめると、あゝわすれもやらぬあの一節！
！

ならわぬわざの

まきばもり

くさのいほりの

おきふしに

ひとのなさけの

うすころも

.....

.....

柱に前髪すりよせて、うつとりときゝ入りました。電話々と階下から呼ばれて、はつと夢から醒めたやうに我に返つて馳け下りたのが、どんなに残り惜しかつたでせう。

その後は、訓盲院で朝のおいのりの始まる時刻になると、さつぱり物事が手につきません。何處にゐても、何となく耳に響いてきて仕方がない。毎朝きまつてその時間には、二階の窓を開けてそちらの方を眺めて

ゐるのが、みんなに發見つてからさア弄はれて……。

讚美歌はいろ／＼のがきこえて來ますけれど、私はあの二百番がいちばん好きなのです。否、四郎さんがいつかおうたひなすつたからですわ。月の美しい晩でしたつけね、兩人はすつかり感傷的になつてしまつてゐて……。四郎さんはふつと唇を閉ぢで、あゝもう止さう、こんな歌を唱ふと死にたくなる。つて！あの時のわたしの眼にはやるせないかわいゝ優しいあたゝかいスキートな涙が、あふるゝばかり輝いてゐたのを、御ぞんじではゐらつしやいませんでしたか。

先日日比谷からの歸途の雨の夜、望んできかせて頂いたけれど、もうさうしても先のやうな、ものなつかしい氣分にひたることは出來ませんでした。

わたしはやつぱりこの柱に背を食ひ込ませて、盲學生さん達の聲に憧れ乍ら……。ほゝゝさうしてかう涙が出るのでせう、わけもないことに。笑つて下さい。あれ、あれ、ね、きこえませう！

やれしたもとに

おくつゆも

ちゝのめぐみを

しのばせて

むみやうのやみは

あけにけり

いざふるさとへ

……………

力強いバスと、透きとほるやうに流れるソプラノ。

心はちぎれ／＼になるやうです。あまりに悲しい皮肉を唱はせるでは

ありませんか、無明の闇と訓盲院……………。

おゝわたしも歸りませう、歸りませう。何ものかに惹かされて、つひ

うかくと今日まで過してはしまひましたけれど、考へてみれば際限がありません！

弱い心をはげまして、無明の暗は晴れねども、いざふるさとへ……。母のみもとへ…………。

○

私にと電話がかゝつてきた。もしやとはつと胸躍らせ乍ら出る。あやにく受話器に髪の手が引かゝつて、…………うるさいとやけにかいやり乍ら、もしく何誰？『僕ですよ、聲でわかりませんか。』と笑つてらつしやるので、あら、ほゝとつい釣こまれて笑つて了つたけれど、それが和田様であらうとは思ひもかけず、幾度もく行きちがひになつて憧れ

てゐたなつかしい聲としては、あまりに淡泊し過ぎてゐたと後でこそ氣がついたれ、その時はうれしさのあまりあはて切つてしまつて……。

私はいそいで支度をして出かけた。

須田町で電車を下りると、驛の入口の石段の上に四郎さんの姿が見えた。飛び立つやうに思ひ乍らも自然と頸は垂れて、——四郎さんも見つけて此方へいらした。双方から近づくまゝに私は固くなつて一禮した。わざと視線をそらして立ちすくんだまゝ。……にぶ色の雲低う閉ぢし暗澹たる天候は、一入心を重く壓する。

『今まで和田もお待ちしてたんですが、一足先に三越へ行つてゐるつて……。電車に乗りませう。』

『えゝ。』

電車の中はこんでゐたので、知らん顔して別々に腰かけた。

入口で下足をつけてもらふ時に、四郎さんと御一緒なのが何だかへんだつた。『二階にゐるつて筈なんです』つて休憩室をのぞくと、ゐらした、ゐらした。丁度此方向いて、例のゐかめしく赤い短かいお髭の口元で笑ひかけ乍ら。今日は制服の上に荒褸のオーバをはおつてゐらしつやる。

『随分待たせましたね。僕アまた萬世橋驛と云つたのを、萬世橋とまちがへて、あの寒い橋の上にでも吹きさらされて被居るんぢやないかと可加減氣をもみましたよ。』

と云はれて、始めて先刻の電話の聲が四郎さんでなかつたことを知つ

た。さうして一人面をあかめた。まあよかつた、よけいなことを云はな
いでーと。

和田様たらお口がわるいんですもの。おまけにお目が早いから恐くつ
て、正面に顔見られるのが厭なんです。それにこんな日本髪でせう。伏
目勝にお後に従ひました。皆さんずるぶる三越がお好きな様だけれど、
女とちがつて殿方はいつたいどんな物が目的物なんでせうと、常々思つ
てゐたので、けふは少なからぬ好奇心を持つてついて歩いた。

わたしは三越へなど来たつて、それやあ虚心平氣なものなんですよ。
たとへどんなに誘惑しやうとつとめるサタンがあつたつて、物質欲なん
ぞ嗟の先ほども挑發されたことはありませんわ。どうせ及ばぬ榮華に憧

れる位なら、標準は思ひ切つて高いのがようござんす。だから自分の境遇に相當したやうななまじつかな物なぞ、てんでふり返つても見る氣になれぬ。まして今日の一行は一切そんなとくに用のない方たち、傍目もふらず通り過ぎる。

玩具部の前では一寸足がとまる。各々に大きなお坊ちゃん！ 和田様てば内藤さんく〜と行き過ぎたものを呼び立て、『お妹様のお土産に何買つて上げませう。お手玉なんかどうだらう。』

のんきな方ね、まあ。まさかもう十八にもなつて、と笑ふ。

銀製の器具や新式の机や本箱や美しいクッションなんかには、言ひ合せてやうに三人が歩をゆるめた。が、その他に和田様はボアやヴェールや、とかくハイカラな婦人用の品に御心を惹かれ勝なのを、少し離れて

待ち合せ乍ら兩人はくすく。『和田はどうもあんな物にばかり眼がつくと見えますね。』

けだし意味深長。私は堪へかねて失笑してすふ。『怪しからん、何を笑ふんです。』とお眼鏡を光らせ乍らも和田様は照れる。

梵音もかすかに、春の若草の上を行くやうな快いマツトの踏心地！

階段の途中で立止つて、そつと『和田をまいてまごつかせてやりませうか。』『えゝ。』なんて笑つてると、『何ですつて？』とまたお眼玉がきらり。あら聞えてしまつて、と大まごつき！

寒いから七階の屋上庭園へは出ず。

エレベーターで下りる刹那は、ふと生き乍ら地の下へ埋めらるゝやうな氣持がする。

食堂へ突入して一隅を陣取る。お互さまにこゝが第一の目的地だつたのかも知れませんが、ほゝゝゝ。

ウーロン茶を飲み、三越ゼリーをつまみ乍らいろいろ評議の結果、私達はこれから赤阪の葵館の文藝活動寫真見に行くこととします。が五時からと云ふのにまだ早過ぎる。少しこゝらで時間つぶしをしなければならぬ。

お二人の會話をだまつてきいてると、ほんとに面白い、和田様では四郎さんを頭から子供扱いになすつて、

『これや不可！ これや不可！ 僕アね、君のあの直きばつと紅くなるところが、可愛くつて仕様がななんだ。それがさうさせてみたかつて、いろんな謎をかけてるのに、そう平氣な顔してちやぶらもならん。内藤

さん、小笹は近頃非常に人がわるくなりましたよ。』

仕方なく微笑むわたしと、ふと顔見合せた四郎さんは苦笑し乍ら、『和田は何にも知らないんですね。』

まあ、双方へ御挨拶に困りますわね、ほゝゝゝゝ。それや私の見た四郎さんと、和田様の見た四郎さんと、……どっちが正しいか？ また両方とも當つてないかも知れません。

口に諧謔を絶たぬ和田様も、……今日はしみじみお傷はしうございしました。御近況はよく存じませんけれど、先日からの言葉の端々を思ひ合せれば、臍氣乍ら推察出来ないではありません。四郎さんは和田には口止をされてゐるつて、その戀愛事件については何にもお語りなさいませんし、私も強ひて何はふともいたしませんでしたが。……相思の

君を許婚され乍ら何の煩悶ぞ！ おもひに惱める青年の鳩の様に優しく
若々しい瞳のうるみを私はみた。

隣卓に恰ど四五人づれの西洋人の男女が來ました。

そのまあよく饒舌ること。饒舌ること。食べること。そして表情——
顔面の筋肉の運動が激しいこと。見てゐても目まぐるしくなる。仕事の
方面にもこんなに活動するのかしらん。それなら結構だけれど、日本人
の容貌は矢張平靜の美でなければと思ふ。

和田様では、このアイスクリームをあゝの毛唐のハイスーパーに塗りつ
けたいと云ふ。恰も此方へは背後を見せて、禿頭の光輝燦然と見事な
の……。ほゝゝ、でもきこえたらごうします、およし遊ばせよ。日本

語のわかる人達かも知れないわ、と止めるのに、『何、發音がちがふからわかりやしませんよ』とわざと小聲でしきりというんな悪口有仰る。

それから向ふの卓には、まだうら若い兩親に連れられてゐる三歳ばかりの可愛い女兒、白い羽のついた眞紅いビロードの大黒帽に同じマント椅子の上にちよこなんと座らせられて、見得もなく顔中口にしておすしを頬ばつてゐる。それを手早くノートの端に寫生して見せて下さるのでついでに、

『……………路ともわかぬさびしづくよ』

『落日の光りかなしき夕の戸に……………』

なごとある頁をぬすみ見やうとして、こらツと一喝、あはてゝ奪り上げられる。

氣がつけば、葡萄をからませた西窓の彩色硝子からは、春浅い曇り日の夕陽の色が鈍く流れ込んでゐました。

三人

電車で銀座まで来ると、買物のあることを思ひ出したからつて、和田様は急に立ち上つて、『ぢや左様なら。内藤さんお歸國になつたら小母様やお妹様によろしく！』

引き止める間もなく。まあ、と私は思はず不平の色をかくされず後姿を見送ると、四郎さんも氣が抜けて了つたらしく、活動寫眞もつまりませんね、僕達もやめませうか。えゝ、と同意して顔を見る。だがこのお天氣模様ちやもう郊外へ出かける氣にもなりませんね、なごと相談てる

間に乗替場所に來てしまつて、仕方がないから矢張最初の豫定通り葵館
前まで運ばれて行つた。が、何にしてもまだ早過ぎる。

『山王様へ行つて見ませう。』

二人が星ヶ岡の石段を登りかける頃には、もう黄昏の色が濃く四邊を
包んだ。地には藪椿眞紅にこぼれて。

『内藤さん、先達の手紙は僕がわるうございました。堪忍して下さい。
……昨夜無韻詩の悲調をよむやうな貴女のお手紙に打たれて、大急ぎ
で御返事を書きかけたのですが、それよりもと思ひ返して、……一時
も早くお目にかゝつて、御詫がしたかつたのです。どうぞおゆるし下さ
い。僕が一體に感傷的なのが何よりいけないんです。これからもうあん

な事さへ書かなければようござんすか。』

『否、否、』何にも有仰らないで。……わたしこそあんなに取のぼせてしまつて、恥かしい。みんな、みんな、私がわるいのですわ。「姉さま」でゐなければならぬ答のわたしが、……謹みと威厳とを失つたばかりに、しばしなりとも君の御心を亂しました。わづらはしいおもひもおさせ致しました。と私は面眩さと心苦しさに、暗がりの木下道乍ら頬に堪えがたい火照を覚える。

境内は森として物おそろしいやう。茶店なんぞもうみんな縁臺を伏せてしまつて。……幾度か木の根につまづいたり、高足を踏んだりし乍ら、やがて四郎さんがマントの裾で拂つて下すつた倚架の端に、互に袖の接觸せぬほどの間隔をおいて腰かけました。君が薩摩下駄の緒と、

我が足袋の甲のみ、ほんのりと暮れ残つて。……

もとより二人つぎりの世界なんていふ、そんな狭い境地を望むやうな私達ではないんです。無言つてゐたつて、了解し合ふところはし合ひます。むしろいつも第三者を間にはさんでゐた方が、氣が詰まらなくつていゝ位なんです。ですからかうしてゐることが、別にうれしくもなければ、胸も跳らず、たゞ風の當る方の横顔と頸筋が、そげるやうに寒かつた。そつと手をあてゝみると、氷のごとく冷え切つてゐた。

ですけれど、ですけれど、それも一時で、忽ちはげしく燃え出しました。思ひがけなく四郎さんに、鋭く切り込まれたんではたてたんです。

『昨日のお手紙にあつたやうな、………無明の闇つて何ですか。何にそんなに悩まされてゐらつしやるんです。………内藤さん、失禮なんて言

葉は用ゐますまい、怒つてはいけません。その中に僕のことを入つてゐますか！』

こんな風に追及されても、しどろもどろの受太刀になり乍ら『えゝいくらか！ それもあるかも知れません。さうかも知れません。』投げるやうにいひました。不誠實な答でした。四郎さんはきつと不快にお感じなすつたかも知れない。吐息をもらしてゐらつしやいました。私も固くだまつてしまつた。

ねえ今日までお互に愛してゐるとさゝやいたこともなければ、さゝやかれたこともなくさ。たゞ憎からず思ひ合つてゐたと云ふばかり。私が絶ず何物かに怯ちてゐたのは何のため、おのゝいてたのは何のため。この戀の打ち明けられた時、たゞではすむまいと恐れたからでせう。わた

しは戀のおちゆく先を知つてゐる。戀ではないくと云ひ乍ら、いつのまにか二人共こんなところまで深入してしまひました。四郎さんにちつともわるいことはありません。わたしがわるいんでもないんです……。しかしながら、いくら好きでも戀しい人でも、私は四郎さんを自分一人のものにしたいとは思ひません。同じよに棲みたいとは思ひません。ですから四郎さんに、よしんば他に戀人があらうとも許婚の方が在さうと在すまいと、そんな事は何うでもかまはなかつたんです。

私にとつてはそれが不自然でも、禁欲でも何でもないのですけれど、精神的戀愛なんていふものは、到底實行され得べきものでないときいてゐます。それ故にこそ私の戀には、生涯相手は得られないとあきらめてゐましたのに。……まして四郎さんを同じ道へ引き込まうなどは、

かけても思つては居ませんでした……………。

四郎さんの聲はやゝ慄へて、併し異常の強味を帯びてゐました。

『限られたる只一條の道、……………わかりますか！ え。僕は貴女と、…』

……………むしろかうなつて來たからは、その一條へおちこむより他はないやうな氣もする。貴女がいやだと云つたつて、僕が行かうとさへ思へば、

……………無理にも埒して走りますよ。ようござんすか。しかし、しかし、

それがために貴女の藝術を破壊してはならないから。……………』

むしろ濛莫たる無涯の曠野を行きたいんです。

貴女の性格には極端な二つのサイドがあるんだ。

ペパーミンツのみどりの畑、柔かき胸に燃え立てば、他愛もなく眠り

たまふ君ゆゑに。……僕の心はさまざまに亂れましたけれど……。

よしや小さな幸福でも、矢張平和な安心を與へて上げた方がいゝのぢやないかと、思はせられたことも幾度かあつた。

けれど、けれど、安價な同情は侮辱だとお思ひなさるでせう。

僕は貴女の藝術を強く愛します。否、否、強ひてその方面ばかりを愛するのです。他の一面には目をつぶつてゐますよ。

はてもない靜觀の世界に立つて、彼の神を愛すると共に足下の蟲けらをも愛すること、——理解の手を擴げ、同情を注ぐこと。——それこそ貴女の世界ではありませんか、貴女の所謂『戀よりも大いなる愛』とはさういふものではありませんか。我々はおくまでも『戀よりも大いなる愛』へ行かなければならない。それが生命の本流にちがひない。僕のつ

とめは貴女の胸に、藝術となるべき様々のものを、醗酵せしむることにちがひない。つまらない身を挺して、それに向ひます。なつかしき友よいでや振ひませ！ 苦惱の旅にいさましく……………。

落武者の最後の勇氣でやつと踏みとまつてゐた私は、この時ふつと夢のさめたやうな氣持になつたんです。猛然とそなへを立て直した。眉があがつた。自分が自分に返つてきた。こはゝつてゐた舌もほつれた。この力強い瞳の輝きを、四郎さんが小憎らしいとお氣づきなさはしまいかと恐れた。

空想と笑はれてもかまひません。不可能なことであつてもかまひません。二人は立派にレコードをつくつて見せませう。四郎さん、わたしは嬉しうござんすの、永遠になどとおろかな事は望みませんまでも……………

今宵いまこの一瞬時に満足する！ 生甲斐があつたとおもひます。わたしは理想の戀を得た。これまで私のあてもなく探しあぐんでゐたものは、たづね求めてゐたものは、四郎さん、あなただつたのです。あなたのやうな方だつたのです。

『しかし何を言つても、僕は若い男性です。えらい理想を立てゝも、それはうそになるかも知れません。努力はそこにあるんです。「女優タイス」の様なものを讀むと、僕は恐うござんす。貴女がしつかりして下さい。叱つて下さらなくては。』

『わかりました、よくわかりました。小笹様。』

あなたは御遠慮なくあなたの道をいらつしやい。私は私の道を行く。そうして行けるところまで御一緒に、ねえ。お話が合はなくなつたら

は、喧嘩でも何でもしますことよ。ですからもうあんまりお氣づかひ遊ばさずと、御心のまゝにおふるまひ下さいまし。私も自分の立脚地といふものが、やつとハッキリしかけて來ました。』

『僕の行く道も貴女によく似てゐます。が、男には男のエキゾチシズムがあります。どうぞ見てゐて下さい。それを更に大きく美しく永くして、貴女にお目にかけるのが僕の役目だと思ひます。』

『ありがたう、小笹様！』

私はもう四郎さんの前で、媚を見せる必要も感情を偽る必要もなくなつて了ひました。さうして今迄あんなに弱々しく、寄り縋りたいやうな氣持になつてゐたか不思議です。おそらく愛の確信を得た爲でせう。

『総人、兄、弟、友、他人、味方、そのどれであつても構ひません。』

大きな愛の潮に浸つてゐるのだと安心して、眞面目なる人生をつとめて下さい。』

優しいさゝやきが耳元を掠めました。わたしは子供のやうに頷いた。

『繪畫から彫刻へ、彫刻から實感へ——、貴女へ——近づかうとなすつた人の、反對の方向をとつて、貴女に進みたいと思ひます。それでこそ永遠の生命を有する藝術ができるのだと思ひます。』

つて。……二人はしみくと語りました。

『僕は決して貴女とこんなにお親しくならうなごとは、夢にも思はなかつたんです。たゞ遠くから喝采する一人。光榮に輝く君をのせてすべり行く車のわたちの下に、恭恭敬敬敷かむの願ひ、紅の旗振る應援團の一人として、それで満足だつたのです。』

それやあ二人とも最初から、さうく今日の日を期しては居ませんでしたのに……。

けれどもかうなるまでには。――

『むかし貴女に、「ウエルテル」の泉を教へて去つたといふ人のやうに、――僕も幾度その轍を踏まうとしたか知れませんが。度々おわかれしやうと思つた、沈黙を守らうとした。』

さうして私をお泣かせなすつた。けれどそんな事は、四郎様は御存じないでせう？

『せめては人様の成功を祈る。自分自身は、幼い頃から抱いてゐた藝術の希望を捨て、あらゆる方面で力瘤を入れて見るつもりですが、……然しさびしいんです。この頃になつてまた何故文科に入つてゐなかつたか

としみづく後悔こうかいします。さうしたら少しは貴女のお話相手はなしあひてにもなれたでせうに。……………今更いまさらこんな事言こといつたつて仕方がないけれど、

と寂しくお笑ひなさいました。私もたゞ微笑ほくそんでゐた。かまひませんわ、わたし、何も四郎さんが文科であらうと、法科であらうと工科であらうと。……………またさうで欲ほしかつたともおもひません。今のまゝの四郎さんで結構けっこうなの。

さうして四郎さんの過去くわこも未来みらいも現在げんざいも周囲しうみも境遇きやうぐうも、何にも知りたくはありませんでした。私の四郎さんは私の知しつてゐるだけで澤山たくさんなのですもの。

ふと四郎さんはポケットキャラメルの函はこを袂たもとにさぐつて、

『上げませうか。』

と云はるゝまゝに、私は笑つて手を出した。と、掌の上に七個ばかり
バラ／＼とこぼれた。いつたい私は手袋が嫌ひで、どんな極寒中にでも
用ゐたことがあります。一つには、の土龍の様な、恰好のわるさを厭
ふからです。一つにはわが手入れの行きとゞく美しさに、自信があるか
らです。仄暗い宵闇の紫の中に、その手の色が細々と、浮き出すやうに
白かつた。

それを舐ぶつてゐる中に、ふと河野さんの事を思ひ出して厭な氣持に
なつた。四郎さんは早くも氣取られて、どうしたんです、と有仰る。こ
んな人があるんですよ、つて搔いつまんでお話した。ちやこんなところを
見つかつたら大變ですね、と苦笑なさる。えゝ、と浮かぬ顔してると、

『そんなこと貴女にとつては何でもないちやありませんか。そんな事件ぐらゐにわづらはされるやうぢや。………もつと廣い大きな心持で同情しておやんなさい。貴女は純な直情直行の人——勿論それが尊いところですが——時によつてもつと技巧の女にならなければいけませんね。貴女の廻轉によつて益々周圍を複雑にし、變化あらしめ、その底の底に位して、靜かにそれを觀照なさらなければ。………なか／＼他人を觀察することは出来ますまい。』

『えゝ』と私も笑ひ出してしまつた。

山王の山を下りてから霞ヶ關を抜けて、また日比谷へ出ました。行く先はいつものカツフェ、マツモト………。

私達のいちばん好きな例の小さい室も幸ひ空いてゐた。瓦斯ストーブに近々と椅子引寄せて差向ふと、さてやりばなくちつと視線を落す足の爪先。……雪白の足袋、媚めいた赤い鼻緒の上草履の上に、藤紫の細ぶきが二筋ゆるう波打つて……。

ふと見ると向ふの鏡の中に、白粉の濃い眉の太い、圓い顔が笑つてます。わたしのお友達に繪を描く女があります。御自分は前髪を真中からびつたり分けて、奇抜な柄のお羽織なんか召してゐらつしやいますけれど、けれど決してけはくしくはない。色彩の配合といふことについて大へんおやかましいので、『貴女は顔が明るいに、あんまり服装の好みの刺戟が強烈過ぎる。赤色の用ゐる所を誤つてゐらつしやる。』

などよくお叱言を頂戴しますの。その度毎に痛み入るのですけれど

逝く春の名残惜しさに、無暗と華手な物には執着が強く、紅の入つた紫地の半襟。緋鹿の子の帯揚げ、羽織の裏地も緋綸子。帯も紅地の絲錦！むつちりとした唐人髻は、前から見るとまるで鳴田の前髻みたい。これはね、新橋の雛妓風なのです。思ひ切つて太い縫銀絲かけて、細かい摘細工の花櫛がチラ／＼前髪をのぞく。

一時はつめかけた袖丈まで、また八寸五分にのばしてしまつて、ほんとにこんなに大きな柄して。………氣恥かしさに見るに得堪ず面をそむけた。

疊硝子戸越しの隣室には四五人の連中が、給仕女をとらへてキヤツキヤツ云はせてましたが、間さへあれば氣にして此方ばかり透かすのですもの。私もちつと見返してやりました。四郎さんは笑つてらした。

ナブキン紙に射した盃の影が、まるで螢の燃えるやうだ、青くつて!!
けどもう、なつかしいこの緑酒の色にも、いつかの様に恍惚と心を魅せられることが出来ませんでした。わたしはもう、あの儚い酔心地に飽いたのかも知れません。眞實に餘り儚いんだもの。物足りないんですもの。……それが限りなくさびしい、悲しい。

四郎さんも物憂げにその杯をあげ乍ら、

『束の間の酔心地。……所詮それは儚いものです。』

けれど貴女は、生涯酔ひ續けてみたいとはお思ひになりませんか。』

否、否! 私にはもつと他に何かしなくちやならないことがありますの。そんな眞似しちや居られません、酔ひ死ぬなんて弱者の徒です。え、戀にも酒にも……。

しやんと上半身を立て直しても、ともすればくづれ勝な腫の重さ。そのまゝ人も我もだまつて食後の果物に齒形をあてた。

松本を出てから兩人はまた、数寄屋橋から八重洲河岸の方へと折れました。薄暗に咲く待宵草のやうに暗さを慕ふて……。私は何にも申しませむ。四郎さんのお口からは外國語の歌調が洩れた。そして折々投ぜすてられる蕨の吸殻が、小さな火花をパツと地上に亂した。

『今夜はさびしい陰氣な晩ですね。どんよりと魂が沈むでしまつて、どうしても動かすことができない、できない。』

と頭を振つてゐらつしやいましたが、私は何ともありませんでした。自分は自分の情緒をばしつかりと抱いておりました。從來は知らずく

四郎さんと一色にならうくと、つとめてゐたのであつたことがわかりました。

吳服橋際でまたカフェーを見つける。何だか追ひつめられるやうな氣持で、トンくと三階の一ばん奥の室へ！

紅いカーテンをかくけて入るなり、薄桃色地に金銀箔入りの極彩色で蝶々が飛び鳩が舞ひ、爛漫たる櫻花が匂ひ眞紅な椿が咲き、小川の流るゝ若草の野に、あまたの天女の群れあそぶ四壁畫にまづ驚かされてしまった。給仕女がまた大へんなの。途方もなく海山千年の様な口の利き方と、高笑ひを立てるんですもの。束髪に結つた二十三四の、厚彫な顔立は一寸氣に入つたけれど。……

渴いた舌や咽に、サイダーの味が刺す様に強く泌みわたる。卓上には

梅に似た白い花——木瓜かしら——が、いかにも清らかな葩の色で目を
よるこぼせた。

何だか暗い港の夜のやうな心持で——その窓のカーテンを引けば、黒
い山蔭の海に、高いマストが星光りに照らされてでもゐはしないかと思
はれる、と四郎さんはしみぐ有仰いました。さう云へば、どこか異國
情調……と云ふ程でもないが、まことに奇異な感じをさせる一室でし
た。階下からは、若い女達の笑ひ聲に交つて、コン／＼コンとだらけた
やうなピアノの音が響いて來ました。

日本橋から電車に乗る。

本石町での乗替を切らせなすつた四郎さんが、そこへ來ても立たうと

もなさらないので、御注意しやうかと思つたけれど黙つてました。と、席が空いたので隣席へおかけなさいました。『浅草橋まで行きまうよ』つて小さく有仰る。さうですか、と低く答へたまふ、私は何にも言へなかつた。うれしい様な悲しい氣がして……。

僅ばかりの別れを惜しむだとして、どうなるのでせう。四郎さんが今夜は大へんセンチメンタルになつてらつしやる。いつになくこんな行爲なされると、もうこれつきりお目にかゝれないやうな、——遠い／＼別離でもあるやうな——。泣いてはいけない、泣いてはいけない。と心をはげましましたが。ほんとに四郎さんが子供っぽく見えた。私はまた優しい「姉さまの」氣持になつて、抱き抱えて慰めて上げたかつた。

浅草橋へ來ました。

二三度振り返り乍ら、四郎さんは萬世橋の方へ飛ぶやうに馳けて行ら
つしやいました。わたしは立ち上つて窓硝子に顔すりつけて、長くく
見送りました。電車中の乗客の怪しむのもかまはず…………。

白いソフトに黒いマントのその素朴な後姿は、…………そのなつかしさ
は、あはれいつの世にかは…………。

○

『揃ひも揃つてろくでもない顔に生れつき乍ら、いくら白粉なすりこ
んだつて、いまさら始まらないぢやないか。フ、まるで化物屋敷だね
此處あ。大正の相馬の古御所みたいだ。瀧夜刃姫はおまへかい、いやあ
これやあどうも!』

職人育ちの年若い叔父は口がわるい。わたしたちの化粧室をのぞかれやうものなら大へんなさわざ。だつて何しろ三疊の一室に三人の従姉妹が、一時にお出ましのお仕度なんて場合の騒動つてない。帯の端を踏まれる、鏡臺に蹴つまづく。香水の瓶が倒れる。切角の嶋田を何かに引かけて、こんなに髪を引さ出したとかつて一方で涙聲を立てるのに、一方の柱かけの鏡の前ではくるりく、兎月巻と女優巻とがお太鼓の結び目を氣にして、廻り燈籠を現出してゐる。自分もその渦中にゐる。思はず失笑してしまふことがありますの。

おしやれたなんて有仰るのは何誰？ 殿方でさへお髭立てたり、お髪分けたりなさるのは何のため？

『手入れをしないでもすむやうな、どつちかに徹底した容貌に生れつ

いて來れやよかつたんですけれごね、……………』

と私は笑ふ、女は毎日鏡に向ふ時間を、大きい樂しみの中の一つに數へてもよからう。わたしは丁度美術家が繪筆でも持ったやうな氣持で、黄いろい素地に白粉を塗る、頬紅をさす。その一刷毛ごとにみる／＼生彩をましてゆくのが、ほんとにうれしい。素顔の時とは別人のやうに願のあたりの肉附がふつくらして、女に似附ないと母が氣にする太眉も、そんなにいかつくは見えない。瞳の黒さが玉のやうに牙々と、首筋が細そり優しくみえる。お化粧の手早くよく出來た日は一日氣持がいい。

私が胎内にゐた時分母さんは、近所に赤い縮れつ毛でたゞれ目のみつともない女兒があつたので、もし自分のが今度嬢やだつたら、色は少々位黒くとも、——たゞ髪の毛の濃い眼のバツチリしたのを。とそればか

り思つてゐたら、まあ注文通り眞黒で生毛だらけの熊のやうな赤ン坊が生れて了つたんですつて。

棒ほど願つて針ほどゝいふのに、母さんも欲のない。なぜついでに色も白く鼻も高く、と望んでおいては下さらなかつたんです、といつも笑ふと、そこまでは氣がつかなかつた、母さんも若かつたからね、つてほムムム。

ですが今更いくら悔んだつて仕方がない。せめては不具でなかつた程度に満足しなければならぬ。でもうれしいわ、私は胸を張つて叫びます！

女性が眞の美しさを發揮するのは、二十を越えてからだとおもひますの、けれど大がいな人はその頃にはもう、子持になつたり所帯持になつ

たりしてしまふから……。

あゝこの健康と、このびくした體軀と、「肩に垂れ裾にそよぎし幾尺は、王の手にさへまかれじなとも。」……何ものにも犯すをゆるさぬ我が『處女』の權威の尊さをおもふ。

かくてこそわが黒髪は永久に長く、わが瞳は永久に輝かむ……。

淺碧色の空に春光うら／＼と、すべてはさながら人生の幸福と讚美とに、輝いてゐるやうな日の午後でした。

私はいつもの通り萬世橋驛内で四郎さんを待つてゐました。もうこの時間がいちばんたのしい時なんですの。いくらおさへてもたしなめても、胸の鼓動は禁じ得られません。自然と晴やかなひとり笑みが唇邊を

くすぐります。伏目勝にペンチに凭りながらも、石造の構内に高く反響する下駄の音や人聲やに胸そゝられて……ゐても立つても居られないやうな氣がする。

十分間ほどさうした心持をつゞけてゐると、やがて正面の入口の方から、急ぎ足にせか／＼と四郎さんが。……

わたしは読みさしの「静かな曙」を袂に入れかけたまゝ、微笑しました。眼を見合せて。

二言三言交すまもなく、つゞいてひよつこり和田様が。

思ひがけなくもあつたけれど、うれしかつたんですの。もう歸郷までにお目にかゝれないかもしれないと思つてたんですもの。先日御挨拶まですまして了つて……。先方でも、貴女がこゝにゐらつしやらうとは

思はなかつた、つて眼を丸くなさり乍ら、『どちらへ？』『えゝいゝ處へ。』
『怪しからん。そう小笹ばかり引張つて歩いてると、………みんなにす
つばぬきますよ。先日このあひだも二人であれから赤坂へ行つたつて。何をして來
たかわかりやしない。彼處あそこいらには待合まちあひがたくさんありますからね。』
まあ、とあきれて、私わたしはたゞ笑つてた。和田わだはきたないことを言ふ男
ですね、つて四郎しろうさんが眞氣まきになつてぶん／＼なさると、急にきふ悄氣返しよげかへつ
て了しまはるゝのもおかしい、ほゝゝかわいゝ坊ぼちゃんね。和田様ちなたもおつき
あひなさいました、ね、ね、と私わたしは衷心わかしんから熱心ねつしんに云つた。それをお座
なりや、てれかくしの様にとられては、私立わだつ瀬せがございませむ。
兎とに角途中かくとちうまで御ごいつしよに、つてことになつて須田町すだちやうの方へ出たけ
れど、日曜にちようなので電車でんしゃは大變たいへんなこみ方。何臺なんだいやり過すしても際限さいりがない。

いつそ甲武線で行きませうつて元の驛内へ引返し。

こんなお嬢さんを連れてゐるから、厄介で仕様が有りやしない、と和田様はわざと怖い眼つきする。私もまた和田様に逆らふのがおもしろいので、やたらと楯ついて見たく、揚足の取つこが絶ない。和田はいつでもあゝなんですか、『えゝ』と笑つて了ふ。

いゝお天気なんですの。わたしには少し眩し過ぎる。もう外出には洋傘が欲しい。――本當にこの一月あまりといふもの、日曜毎には屹度お天気がわるくて、空合の心配はつきりしてゐましたが、久しぶりで安心して好きな草履を履いて出られた。

沿道のお濠端や堤の草が、いつの間にか青々と萌えてゐたにはびつくりしました。わたしは物珍しくうつりゆく窓外の景色にばかり見惚れて

ゐたが、陽氣の加減が頬がほてつてたまりません。頬紅のさし方が濃過ぎやしなかつたかと氣になる。和田様ものぼせたやうに、お眼のあたりをポツと櫻色に匂はせて。——それが白哲人種のやうにも見えるのです。ほんとにこの頃お綺麗におなりなすつたものねと感心する。

眞中にはさまつた四郎さんは、重くらしい様な暗いお顔してらして、何だかけふは御機嫌のわるさうなのが氣がゝりな。あんまり下らないことに燥ぐのはよませう。苦々しいと思つてゐらつしやるかも知れない。信濃町で下りて和田様とお別れた。たいへん風が立つて來た。それ故としもなく顔が上げられぬ。私たちはこれから青山墓地へ行くので、煙のやうに舞ひ上る練兵場の砂塵を見乍ら、電車を待つて立つてゐました。

さうかつて別に親同胞や友達が永眠つてゐるわけではない。何と云ふ目標があるでもない。たゞ何となく墓場の空氣が味ひたいからつです。それで今日は私からわざ／＼お願いして連れてきて頂いたんですけれど……。

けれども、ほ／＼まさか「浪さん」の奥津城をたづねて、「不如歸」の紅涙を偲ぶやうな可愛らしい柄でもありませんし、乃木大將の御墓に御参詣しやうなんて云ふ殊勝さでもありません。行きあたりばつたり氣の向くまゝに、廣い坂道を右へと折れた。その邊には子供が大勢、わいわいと遊んでゐました。何だか公園へでも散歩に來たやうですね、と笑ふ。實際青山はどこか花やかな氣分のする墓地です。あまり大きな樹のない故かもしれない。わたしも谷中の方にはおなじみが多いけれど。

掃き寄せた落葉焚く煙が青う流れる。迷ふやうに。……色も香ひも流石目に泌みる。まだ眞あたらしい白木づくりのお須屋や墨痕鮮かな墓標はいやですのね、何だか物悲しくて！ 高臺でも赤土路はベタつくので行きなやみ乍らも、各々生籬や木柵にかこまれて一劃をつゝつてる埜域の間の大路小路を、二人は縦横に縫つて歩いた。

ずゐぶん歩いても涯しがなかつた。灰色の冷やかな墓石が數知れずつゝいてゐた。お墓まゐりに來る人はよく迷兒にならないものだと思つた。

立派な瑞垣をめぐらされたり、見上ぐるばかりの花崗石を滑らかに磨き上げたり、何爵何位勳何等の肩書附なんかのは何でもないけれど、三等墓地の名もない土饅頭や、雨路にさらされた卒塔婆や、杜楮や竹筒が

轉がつてゐたり、石塔の無慘に襲つてゐたりするのが妙に心を惹く。いけないわ、私。お墓を發掘してみたい氣がいつもむらくとするんですもの。狂人になつたらやるかも知れない。

僕の墓はこんなのがいゝのあんなのは厭だの、罪のないこと有仰つてお笑ひなさるのが、美しくもありうら懐しくもあつた。わたしは自分が平和に墓石の下に眠れるやうな死様をするかどうか知らない。――

恐いんですもの、死後まで考へてみたことはありませんが、どつちにしたらつて墓標なんぞいらさないわ。骨だけなりとむくろだけなりと、人目にかけらぬやうに埋めてくれさへすればたくさん。自分が會てこの世に生存してゐたといふ事實は、自分自身の生の消滅と共に、一切拭ひ去つて了ひたい。きれいに忘れられて了ひたい。死後の名なんぞが何です、私

は法要だの年回だのと云ふ行事も笑止でたまらない。

何てつたつて生きてる者がいちばん強いのです。サロメはヨカナアン
の首に接吻しました。ごんなえらい人でも死んで了つちやつまらない。
何の抵抗力もなくなるのですもの。

それや、死んで了へばもう世話はないのに、と云ふやうな氣もする。
何に惹かされてそんなに生きたがつてるのだからわからない。よく／＼考
へてみれば、『死』も些ともこはいことぢやない。いやなものでもない。
むしろ私の恐れてるのは、臨終の苦悶なのかもしれない？

四郎さんにそれを話かけてみやうとしたが、私は何故かこの頃「死」
といふ言葉を口にするさへ恥づる。で、だまつて了つて、……二人は
今日も言葉少なでした。先日戀を語つた同士とは見えなかつた。互にま

た話題のそれに觸るゝを極力避けるやうでもあつた。さわくゝと据さばきの音が耳立つにも、四邊の靜寂さは知れる。

澁谷から甲武線の中野行に乗り込む。

満員でやつと一隅に席をしめる。前の釣革につかまつてらつしやる四郎さんの、御胸の邊りをちつと見つめてた。見失ふまいとつめて！

めくばせされて立ち上る、大久保で。二人が同行であることを今更の様に、眼を噓つて目送する者もありました。

線路を横切つて右へと曲る。鴈岡園も今はうらがれて。まあひざい泥濘の霜解路！ あつちへ飛んだり、此方へはねたり、二歩に三歩に立ちすくむのを、四郎さんが見兼ねて、

『負つて上げませうか。』

『否、』と息をはづませた私は、こんな些細な事にまで弱者扱ひをされるのが口惜しかつたからでした。足袋や草履の裏にボタ／＼と、ねば土が一杯附着いて氣持がわるい。

赤茶けた戸山ヶ原は、行途に遠くひらけてゐました。頭上に風のうなりが、ぶーん／＼と。よく晴れてゐるけれど風が烈い。重い袂がひらひらと、つばさの様にひるがへる。

『あら不二山が！』

『なつかしいでせう。』

『えー。』

私は甘へる様な聲を立て、恍惚と歩をゆるめた。見よ、莊嚴なるむさ

し野の落日を！ 芙蓉峰の靈姿！ 金色の雲！ 黄昏の紫！ ところ
ぐにボツリくと黒點を打つたやうなのは、三々伍々さまよふマント
姿の人達でした。

ぞつと夕風が身に泌みて、思はず袖かき合すと、『寒いでせう、すみま
せんでした、こんな場所へ引張つて来て』としきりに氣の毒がらるゝの
が此方は一層お氣の毒で、否、否、と固くなつて了ふ。

行きく、とある様の木林の中に腰を下した。そこはゆるい傾斜を
もつた丘になつてゐました。風蔭かと思つたのに、矢張寒いんですよ。
けど冷水摩擦の後のやうに、頬が赫々と火照つて來ました。サラ／＼サ
ラと、まるで雨の様な木ずれの音。おどろいて振り仰ぐ梢に、五日あま
りの月がほんのりと。

四郎さんは、森や林の中に入ると嗅覺や聽覺が異常に鋭くなつて、動物性に近づいたやうな氣がする、つてお笑ひなさいましたが、私は無心の境地にさまよひ入つてゐました。何のこともおもひませぬ。自分が人間だと云ふことさへも忘れて、——寒暑も覺えず、空氣中に身體が溶け去つてしまつたやう。魂だけが残つてふわくと、この宇藍色の空に長く尾を曳いて、どこかへ飛んで行きさうな氣がする。わたしの魂の色？さうね、あの、ゆでたまごの黃味の様だらうとおもひますの、屹度……
……。

ふと四郎さんが地上へひれ伏すやうにされたので、暈眩でもなさるかとおどろかした。と、

『かうして耳を地面へあてゝ御覽！』

と有仰るので、何の心もなく『何かきこえて?』と顔を横にしておつつけやうとすると、

『地球の蹻音がきこえる。』

『あらつ。』

ふつと顔見合わせるや、何ともしらず胸を打たれて、……ちつと眼を閉ぢたが、生ぬるい涙がいつばいあふれて来て……困りました。うるさく頬に亂れる髪のを拂ふふりして、そつと指先におさへた。おゝ何の涙でしたらう、この涙!

つと立ち離れてそこらあたりを、さまよひ乍ら歌ふ四郎さんの聲が、樹の間がぐれに響ふるものなく美しくひびいた。

透き徹るの、玉のやうだのと云ふ女性的の麗しさではなく、錆の底に

ふくらみを帯びた、力強い、それが上なく頼もしく快いものにおもはれる。私はどんなに好きな歌でも、自分で口にしやうとは思ひませんけれど、人のをきいてみると、もうく胸を引き扱りたいやうな気がいたします。

濃い夕映の空はさながら金屏の黒繪。松の影がくつきりと黒く。飛ぶよ、飛ぶよ、落葉が！二人の周圍を掠めて……。なつかしい人の呼吸の音さへ手にとるやう。天地寂たる真中に！！

地氣の冷たさがしんくと身にせまつて来る。廣い野原に見渡すかぎり、もう人影はありませんでした。『行きませう』と度々促はれても、わたしはちつと身動きをしませんでしたが、四郎さんだつてお寒からうとふと心づいて、裾にからつみいたちりを拂ひ乍ら立ち上る。颯と息もと

まるばかりの嵐!! 立ちすくんで面をそむけた。

『もう生涯の中に二度と来られないかも知れませんよ。こんな寒い日には………』

まあ、どつきりさせなさるのね、四郎さんは。終りの一句で安心しましたけれど。

二人は薄い影法師を曳き乍ら、寂しく丘を下つた。

目白臺、柏木あたりの灯が、森の中に美しい。青白い月光と、露か霜かを浴びて、一條の鐵路が刃物の様に光つてゐる。踏切を越えようと、右手に高く射的場の堤が三角形に、——まるでピラミットの様に聳えてゐました。ふり向くと富士山が、濃紫にくつきり半身を浮べてゐる。『あゝ

月が出てますね、』と四郎さんは始めて心づいた様に空を見上げなさる。星のまたゝきが数多くなつてきました。ちらほらと沿道の人家は、もうみんな戸をとざして了つて、なつかしい灯影がわづかに透間から洩れてゐる。渴と餓と寒氣とに疲れ切つた私は、その戸の内が羨しかつた。

重い足を引きずり乍ら、いつか早稲田大學のビルディングの前に出た。暗い構内からボウツと灯の射してゐるのが圖書館だと教へられる。故人が母校！ 私は黙つて見上げ乍ら通つた。この邊のなつかしかりしも春や昔よ。四郎さんとの間柄もいつかは、こんなに冷やかになつてしまふ時があるのだらうか。それは時の力ですもの、自然の成行なら仕方がないけれど。

こちらがこんな事思ひつゞけ乍ら歩いてた故でもないでせうが、四郎さんもあんまり愛想氣がなくなりました。私はたよりない心持を抱いて、行き合ふ學生達の視線を避けるやうにとぼくと、早稲田の町を歩きました。鶴巻町つて何だかみだらなやうな、さもしいやうな活氣のない妙なところですね。

夕餐をしたゝめた洋食屋の二階が、小ざつぱりとはしてゐ乍ら、何だか支那人くさい氣がして仕方がなかつた。色づけた水のやうに甘つたるいペーミンツをのんだ。

白熱燈に眩ゆい神樂坂を抜け、夜景の美しい牛込見附を這入つてまた

九段へ出た。さうして青い／＼夢のやうなお濠端の情調をなつかしみつつ、どこまでも／＼とついて歩いた。夜を警しむる撃析の音は、閨府の鬼が打ち鳴らすかとばかり、腸の底まで響き渡り乍ら……。『お茶をのんで行きませう』つて、とう／＼またパウリスタ（神田）の二階で、香りの高いブラジル珈琲に咽を潤す頃は、やつといつもの調子に戻りかけてゐました。私はかりぢやない、四郎さんですわ。心おきなく談話が出るやうになりました。それに氣持のいゝ室の様子や、……給仕の少年の服装までがおなじみなので、何だか自分の家へ歸つた様なうれしい氣がしたんです。

珈琲に浮かされた晩は眠られないで困る／＼といひ乍らやめられないで、二人ともお代りまで命つてしまつた。ふと氣がつくと珈琲の色は濃

茶色ちやいろをして、私わたしの着きてゐるコートと同じおなだつた。……

四郎しろうさんとかうして出て歩くあのも、今度これが當分たうぶんの最後さいごかも知れなかつた。愈々いよく二三日中にちちうに歸郷ききやうするとすれば。……

だからこゝを出でるのが惜をしくつて、……出ればお別れわかしなければならぬ。おそい、おそい、と身みも世よもあらぬほど悶もだえ乍ならも、どうしても自分じぶんから椅子いすを離はなれることは出来できなかつた。他ほかにはもう容影ひとかげもなかつた。コックやボーイ達たちが眠ねむさうにしてゐた。

○

内藤様ないとうさん！

戸山とやまヶ原はらは寒さむくつてお氣きの毒どくでした。いづれ出直でたほしませうね、皐月さつき

の頃。まん緑の草野に派手な躑躅が咲きます。榛の葉は眞晝の光りに蒸されて、生々しい匂を漂はせます。富士の嶺はほんのりと、艶かしい露のヴェルを冠ります。それから小鳥の歌……。あゝ早く五月がこい。

昨日は我ながら不愛想なのが氣になつてゐたのですが、何とも致方がなかつたのですから、お許し下さい。風のさわりもございませんから御安心下さい。貴女こそ何ともありませんでしたか。たをやかなやんとなき御身を、風吹く野に悲しませて……。おわかれしてから、「何故時といふものがあるのだらうか、何故別れるといひ、逢ふといふことがあるのだらうか。何故に死なねばならぬか。」などといふ考へました。大きな永遠の國に住んでるならば、人と自分、

人間と動物や物象との區別もあるまい。時もない。死もあるまい。

.....

.....



その日は肌を脱いで手水をつかふのがいやなほど暗い寒い陰鬱な朝でした。十時過ぎからチラ／＼と、白いものがおちてきた。氣まぐれな位に思ふてゐたが、みる／＼中にほんものとなつて、細かい灰のやうなのが鉛色の空から渦巻いて亂れる。

兎も角もと化粧だけすましたわたしは、いろ／＼に思ひ迷ふて、着替なき取散らして四疊半の柱に凭れて、ぼんやり庭面を眺めると、

『大へんな日になりましたね、どうなさいます。』つて、四郎さんから電話がかゝつて來た。

思ひ立つたことですから、やつぱり今日歸りますわ、と力なく答へた。その實まだその時まで、はつきり決心のついてたわけぢやないのだけれど、「ぐずぐ」と煮え切れぬ、だから女は嫌ひだ、と四郎さんに焦れられるやうな氣がしたからで。

『御見送りに行きますよ、』つて元氣なお聲。でもこんな日に！ とわたしは涙ぐましく云つた。逢ひたいんですの、逢ひたいんですの。それはもうあなたがいらして下さらなければ、御都合がわるければ、出發をもう一日のばしてもいゝとさへ思つてたんですの。けれどもたゞ、すみませんのね、すみませんのね、とばかり繰返してると、『えゝかまひません

きつと行きますよ、』と笑ひ乍ら力強くおつしやつた。わたしもうれしくなつて笑つた。ちや一時頃、東京驛でお目にかゝりませう！

急に燥ぎ出して、手早く支度をとゝのへる。ふと風のやうに來て風の様子に去つてしまふ、いつもの氣質を知つてゐるので、誰ももう止めもしない。その勇氣と物好きさを笑ひ乍ら帶の結び方杯を手傳つてくれる。間もなく俤も來た。書物を充滿つめたので十貫目からある、重い行李と相乗なんだからたまりませんわ。こんな究屈なおもひをするより、自分だけ電車で行くと言ひ張つただけれぎ、みんなが何の彼んにつて、無理におしこめて了ひました。

市街はもう日和下駄の齒を埋める位、微白く布いてゐた。わたしは紺蛇の目さして、塗足駄で雪の中を歩いてみたくて堪らなかつた。かうキ

りつとした風姿して！

忽ちの内に幌のセルロイドへ雪片がいつばい吹きつけて、何にも見えません。目かくしでもされて了つたやう、何處へつれて行かれるのかわからない、と遊戯めいた恐怖の念も一寸おこる。

チリリンと梶棒下ろされて、比較的早かつたのにびつくりした。ぞつと震ひ上るやうな雪風！ 車夫は汗を瀧のやうに流してゐます。

そこらに四郎さんが見えてはしまいかと、取亂した姿が恥かしく、切符や荷物の世話は赤帽にまかせて婦人室へ駆け込むと、いゝあんばいに何誰もゐない。いそいで化粧室へ這入つてゆつくり顔を直し、髪のはつれなどかき上げる。

あゝやつとこれで氣がおちついた。まだ一時には一寸間がある。

亂暴に掛けるとふはり身體の沈淪して了ふやうな長椅子の一隅にもたれかゝつて、戯書のノートを袂に探るとき。つかくとして來てのぞくやうに入口に立つた人。鹿の子まだらの洋傘を小わきに、けふは珍しい制服姿で！

あ、と思はず飛び立つた私は、取継りたいほどなつかしさをおしかくして、一禮したまゝしばらく顔を得上げなかつた。並でかけた君のお靴の先端に、眞白く雪のつもつてゐるのが目につく。

四郎さんはすぐと黄をくわへてマツチをすられる。わたしは黄が憎かつた。

薄水色の高い天井など見上げ乍ら、

『新しいから氣持がいい。きれいな室ですね。』

『やつぱり東洋一でせうね。』

こんな事を言ひ合つた。後には重苦しい沈黙がつづく。

けふといふけふはいつもとちがひ、緊張しきつたわづかの時間なんですもの。もつと何でもいへるつもりであつたのに、……わたしは四郎さんにすみませむ。すみませむ。あれほどお願いして来て頂いといて、満足にお袂れの御挨拶一つ申上げられぬ。俯く膝に散る涙、見とがめられじと打ち背ふ。君は何事も知らず顔に、低聲で何か歌つてゐらした。

もう静としてゐられなくなつて、つと立ち上つたわたしは、あちこちと歩きはじめた。さうして少し離れた窓のところへ行つて身を凭せた儘ふりむいて。顔見合とてにつこり笑つた。はかなさが油然と身に泌み渡つた。戀に囚はれてるのは不幸か、覺めたのが幸福か、何が何だかわか

らなくなつてしまひました。

またふらくと四郎さんの傍に戻つてきた。廣い待合室に、二人の他には人はありませんでした。でも前より離れて腰をかけました。笑ひ乍ら顔を見て、

『僕もついでに行きませうか、鵜沼まで。』

『えい、いらつしやいな。』

と私も申談らしく笑つたけれど。……

きのふ河野さんにも同じやうなこと云はれたとき、私はぞつとして心から辭退した。けふは——けふは——たとへお言葉だけでもうれしいんです。

時計の針の進行も命を刻まれるやう。國府津行、國府津行！ と叫ぶ

驛夫の聲が胸を掻き亂す。息をつめて私は固くなつてゐた。何もこの汽車に乗らねばならぬと、限つたことはない。けれども、けれども……四郎さんも止めては下さらぬ。手提のバスケットを引取るやうにして、先にお立ちなさる。

馳け上つたプラットホームには、粉雪が巴萬字と渦巻く……。

『失敗つた！ 品川邊までも御一緒に行くのでしたね。丁度いゝ。温たかいから、雪見がてらに。』

隣席に腰かけて、スチームの熱氣に面を打たれ乍ら有仰いました。

『さうでしたのね。』

さびしく微笑んだが、何でもかでもさう遊ばせよ、とおし切つてすゝめるほどの勇氣はなかつた。四郎さんは物足りなくも思召したか知れな

いが、どうせ別れねばならぬもの。もう／＼未練がましいことは云ひますまいと、深く心に誓ひましたものを。……

君もそれきり黙つて、蔑ばかりふかしてゐらした。

立ちもやらず座りもやらず、おぎ／＼と私はクツシヨンに凭り添ふたが、何だかこのまんま二人で何處か、遠い所へでも行つて了ふ門出の様な氣がします。もう五分か三分後に引き離されねばならぬ方とは、どうしても思へなかつた。

『ちや。』

と云はれたのではと思ふ間もなく、四郎さんは立ち上つて扉外へ出られた。

『左様ならー』

と窓の内外に！　こんなに近々と正面に顔見合したことはない。互の息も通ふばかりに。

私は大膽に凝視した。と、温度の激變にあひなすつたため、見る／＼顔の色の青白く褪せゆくにつけても、お寒さうで身が縮むのに、容赦もなく舞ひ狂ふ雪奴は、君が帽子にオーバーの袖に、あれちら／＼と、つもる、つもる。

どうぞもう、……………そんな雪中に立つてらつしやいますと、私かへつて心配ですから、つて幾度も申上げたけれど四郎さんは……………。うれしいやら申譯なさやらに、もういつそ早く汽車が發ちやつてくれ／＼はい。いつまでも最愛しい人を、この雪風の中に吹きさらすには忍びない。……………

『しつかりやつて下さい。祈つて居ますよ。うんと精力を發揮してね』
『有がたう。きつと勉強しますわ。眞實にいろく……』

聲が咽につまつて了ふ。仕方がないので笑顔ををつくつた。泣き笑ひのやうだつたかも知れませむけれど。

いざ、さらば。列車は徐々に動き出す。

『や、お大事に！ 御機嫌よう。』

『ありがたう。』

とばかりで、私はうつむいて顔をかくした。身をつみて人の痛さぞ知られける、戀しかり、戀しかるらむ。……これが河野さんに對する我が一片の好意である。

弱い心を取直して、窓から首をさしのばした。四郎さんは會釋なすつ

た。私も頭を下げた。折から颯と舞ひ上る吹雪にへだてられて、何もかも見えなくなつた。……見返れども、見返れども、……見送られたまへど。……

さらば、さらば、なつかしの大都會！ 名残惜しや君！！

○

『お別れすると、貴女はやつぱり優しいしつかりした姉さまです。貴女はおいやでも、僕はそのつもりでゐますよ。……』

歸郷して後のお手紙に、こんな一節がありました。それを否定するでもなく肯定するでもなく、私はたゞ寂しく笑ひました。

書肆の方では氣が早い、すでに出版の豫告までして了つて續々注文申し

込があると云ふのに、かんじんの原稿は一向はかどらなかつた。否、全然手をつけやなかつた。「東京見物記」なんて、そんなのんきらしい物に關り合つてゐる心の餘裕なんぞなかつた。ペンも硯もガチンくに涸き切らせたまゝ、四郎さんへの手紙もあまり書きませんでした。たまゝ書かうとしても苦しくつてたまらなかつた。何にも云つて上げることがないんですもの。

『お手紙をありがたく。……』

昔の俳……去年の五月頃のお手紙の匂ひがいたします。でも此頃は、白粉の匂ひでしたか、あのいゝ匂ひがしなくなりましたね。』

なんて、——四郎さんは何の氣なしに有仰つたのでせうけれど、私はハツと胸を打たれて。——去年の五月頃にはまだ心から打解けてはおり

ませんでした。四郎さんは何でもよく直感しなさる。電流のやうな敏感さを有つて被居る。私はそれがこはかつた。

鉢植のヒヤシンスを一輪摘つて封じこめたこともありました。その色は紅でしたが、白い花の花言葉は、「つゝましやかな愛」と云ふのです。つて！『白のヒヤシンスを嗅げば、別れた姉さまに逢ふやうな氣がするでせうか。』四郎さんのそんな言葉が、詩の句のやうに心に残つた。『姉さまはうそをつきません。お世辭を云ひません。しかし絶對の征服力を持つております。……』

勿論さうあるべき筈でせうが、私にやそんな資格はないものを。……それやお世辭だけは言はないけれど。——うそは、たまには云ふかも知れません……。。

おもひいづるも

はづかしや

ちゝのみもとを

はなれきて

あとなきゆめの

あとをおひ

夕ゆふべの雲くもを仰あはぎ乍ながら柱はしらに凭もたれて、低ひくく口くちずさむこともあつた。「ちゝのみもと」なんて文句もんくはいやだつたけれど、『おもひいづるも……』と歌うたふと、ほんとうにしほらしい、甘い涙なみだが頬ほを流ながれた。恥はづかしかつた。恥はづかしかつた。實際じつさい私わたしはこんな事ことしちやゐられないのに……。こんな事ことしちやゐられないのに……。

四月廿五日、向陵（第一高等學校）の第二十五回紀念祭見物のため上京す。

その夜の六時頃には、四郎さんと山内様と。その他にこの方たちの御親友御兩人と、都合五人づれ、銀座のカフェーパウリスタの明るい婦人室にゐた。

からりと明け放された窓から、氣持のよい夜風がそよくと吹き入りました。鏡の前の生花は鐵砲百合で、何だかもう初夏めいた氣分が漂ふた。まだマント引きまゝとつて被居る方達が多いのに……—

みんなしてドーナツツをかちり、苦い珈琲を啜つた。けど、何誰も眞

實にそれはくお溫和しくつて被居るんですもの。まして異分子の私な
んど、――正面には顔も上げられず。鉢植のアネモネが血の様にこぼ
れてるのを、指先で嘗めては卓上に貼りつけた。對座には四郎さ
んがゐらつしやる。一つ置いての隣席は山内様で、山内様はもうすつか
り御回復なすつて、御血色も好かつたが、私は珍しい方にでも逢つたや
うな氣がして、時々ちつと目を注いだ。お横顔の美しい方だつた。かへ
つて四郎さんの方が大へんにやつれて、圓い頬の肉がへこんでゐらした。

じやりくと砂利路を食む、十個の下駄の音響のみが耳立つた。靜か
な夜の公園内に！

熱した頬に快く、幽かな若葉の匂ひと、濕氣を含んだ露の感觸！ 私

達はいつか植込の中に入つた。

が、ともすればお三人でばかりお話なすつて——一列に並ぶべくあまり人数が多過ぎるものですから、——二人が徐外にされて了ふのを、うらめしくもあり四郎さんにすまなくつて。……例の癖で知らずく道の片端へばかり寄つて了ふと、すれちがふ若紳士連がわざと中割つて通つたり、妙な聲をあげて行きます。私はわざと胸を張つて歩いた。

夜目にも仄白う、牡丹櫻がたわゝと咲きほこつて。……ころく……ころく……かた／＼……かた／＼……ころく……あれ、蛙の音楽がきこえて来る。

噴水池の傍の倚架にやすむ。夜露の凝つてか冷たかつた。頭上には若楓の茂みがこんもりと屋根のやうに生ひかぶさつてゐて。手をのばせば

摘めさうだつた。青銅の鶴の嘴から噴く水が、シヤラ／＼シヤラと玉を
搦むやうにさはやかに鳴ります。

グワア／＼グワと啼きつれて水禽がおよぐ。暗い水の面が掻き亂され
て、もつるゝ燈影はさながら金絲のやう。

この夕、あゝ人生はうつくしい、としみ／＼思つた。

門を出て再びもとの銀座の方へ向つた時には、皆さんちり／＼ばらば
らで、二人きり取残されてしまつたのは何とも云へぬ哀愁を感じさせた。
数寄屋橋畔を左へ折れる。

二月以前幾度往來した道筋だらう。けごあの頃は寒かつた。大地の金
石の音響を立てゝ、吐く息のシヨールに霜と凍るまで……。今宵は一

枚小袖の袂もかろく、襦にうるんだ街燈の色も、ほりわりの水にうつつた建築物の黒い影も、何もかもがなつかしかつた。私は四郎さんのセンチメントを、大切に抱き抱えていたはつて上げるやうな氣持で歩いた。

吳服橋へ出たとき、またいつかのカフェーを見つけ出した。『今一度入つてみませうか。』『えゝ。』二人とも何となく好奇心にかられて、少し行き過ぎたものをわざと立ち戻つた。

三階の窓ぎはに立つて、白いレースのカーテンを上げると、空中には紫陽花のやうな火花が亂れる。線路が十字形になつてゐる場所、電車はひつきりなしに往來する。

つくぐと室内の様子を見まはした。ちつとも變つたことはないけれど、私達の氣分はまるでちがつてゐた。強烈だつた。壁畫の桃色の地も

褪せて見えた。苦しいほど重くやるせなく、濃厚だつたあの夜の空気が、何だか一種のデイスイリュウジョンを覚えて、二人はさびしくほゝろみ交した。

四郎さんはペーミンツと珈琲をお命じになりました。私もだまつて、……別にとめもしませんでした。

久しぶりでまた縁酒に唇をつける？ 私は三息ばかりにのみほした。が、何だか甘いばかりで物足りなかつた。でも四郎さんの盃にはまだ半分あまり残つてゐるのを見ると、急に面眩ゆさがパツと照つた。

四郎さんは笑ひ乍ら見てらつしやいました。兩手に頬をおさへて、私も仕方なく唇邊をほころばすのでした。どうしてかうたわいもなく、酔がまはつて了ふのでせうね。瞼をあけてゐることがいやになります。口

をきくのも面倒くさい!!

階下からはまた眠つたいやうな例のピアノが響いて來ます。『酒は、もとより、好きではないが。……やめておくれよ、やけ酒ばかり。弱いからだをもち乍ら。——』

何だかきいたやうなと思つたら、ドン／＼節ですわ。

さう美登利さんにお約束の、紀念祭の書端書を送らうとして、手提袋の中から萬年筆と共に取出したが、わな／＼と手が震へて、どうしても字性をなさなかつた。

やがて白木屋の前へ出ましたけれど、私はどつちが右やら左やら、方向もわからなくなつてゐました。こゝでお別れしませうか、と云はれても、たゞえ／＼と頷くばかりでした。四郎さんは心元なささうな眼を

して、ちつと御覽だつたので、はつと氣がつくと少しは頭惱がハッキリしました。で、もう大丈夫ですから大丈夫ですから、つて申したのですけれぎ、否。否。すこし川風に吹かれたらいゝでしやう、つてしばらく日本橋の冷たい石の欄干に身を凭せてゐた。薄眼をつぶつて。……

室町から電車に乗つた。はじめ二人は向ひ合つてゐたのですけれど、途中で四郎さんの隣席に空席が出来たので、何だか四郎さんにめくばせされたやうな氣がして、私はつとそこへ席をうつした。——窓硝子に並んだ影の頬が、紅玉のやうな光澤を帯びてゐました。

氣持よくゆられるので、眠くなりました。もう何の事も思はず眠くなりました。早く家へ歸りつゝいての安らかな睡眠を欲するよりほか、………傍に四郎さんのゐらつしやるといふことも氣にはならぬほど。そのく

せもちまへの大きな眼は一杯にみひらいて目瞬もせなかつた。

『いっお歸郷になるんです。』『わかりませんの。でも明後日でしょ、大概。明晩は藝術座を観にまゐりますから。……』

けど、御一緒に？　と言ふ言葉はごうしても出なかつた、何に怯ちてかーそれほど私達は遠慮勝んです。でも四郎さんは屹度、他につれでもあるのだらうとお思ひなすつたでせう。

浅草橋へ來ました。私は腰も立てずに、たゞ目を上げて見送つた。が下りしなにふと、『汽車の時間をしらせて下さいね、』とさゝやかれたのが、絶對的權威を有つてゐました。いつそ今度は、だまつて歸つて了ふつもりでゐたんですけれど。……

けれども、けれども、決して御見送りなご、御心配下さいますな。またお別れがつかなくなります、と私は四郎さんへ手紙を書いた。が、その『決して』と云ふ三字を入れるのが辛くて、添へたり消したりレターペーパーを幾枚書きつぶしたか知れません。

歸る日にはしとくと春雨が降つてゐました。午前中に四郎さんから電話がかゝつてきた。『降つても今日御出發になりますか。』『え、何故？』ときゝ返した私は、ずゐぶん意地がわるかつたんです。自分乍ら悲しくなりました、——わかり切つたことを。——『否、何でもないんですけれど、僕都合が出来たら御見送りに行かうかと思つて！』それをきつ

ぱりふり拂ふほご、そんなに心強い私ぢやなかつた。否、否、むしろ追ひ縋るやうに早口で云つた。『あの二時過ぎの汽車で、……新橋から。』『さうですか。ぢやもしお目にかゝれなかつたら、これで失禮しますから。左様なら、御機嫌やうー』『えゝごうぞもう御心配なく！』後で頭がボーツとして了つた。なまじつかお聲なんぞおきかせなさるからわるい！ だからあれほご御辞退しといたのに、と憎らしいやうなそのくせ、そのくせ、心ひそかにこの電話を、實は待ち設けてもゐたものは誰だつたでせう。

が、いくら待つてもくその日の午後、四郎さんの姿は新橋驛に見られなかつた。私は焦りくくと疳が立つて來た。

それは決して不思議ともおうらみにも思ひはしませんでした。先刻私がつまらないやせがまんなんぞ張つたもんだから。——けれど婦人待合室の長椅子に立つたり居たり、思ひ悩んだ顔が鏡に映ると、それは我ながら人に快い感じを與へるものではなかつた。それほどみにくくやつれてゐたので、こんな様子である時に、四郎さんに逢ひたくはないと思つた。いつそ來て下さらない方かいゝかも知れない。

時間にすればたつた一時間乍ら、その間に私がどれほどの懊惱をしたか、つくづく自分がかわいさうになりました。

とうく堪え切れず、私はふらくと構外へ出ました。灰色の空からポツリくと、雨がおちてゐました。泣くやうに……。雨降らばふれ風吹かば吹け、私の胸中には熱火が燃えてゐた。どうしたらこの炎を消

することが出来るのだらう。

日比谷の公園を抜けました。濃艶な八重櫻や牡丹や八重山吹や躑躅や。青葉がぐれにぼつてりと雨露を含んで、さはらば落ちん風情であつた。びらうどのやうな芝生が美しかつた。一昨夜皆さんで憩ふたベンチの傍も過つた。

ほの／＼と新柳けぶるお濠端を三宅坂の方へ。赤阪見附へ下りて辨慶橋を渡る頃には、紫蛇の目に雫がたまつて、肩を代へるたびハラ／＼散つた。落花を踏みつゝ清水谷公園の内を通つて麴町、半藏門から九段へと。櫻若葉と楓と柳の露で、みぎりの色に染みさうでした。裾も袂も……。

九段下から右へ折れると、満々とたゝへたお濠の石崖、岸にはずうつ

と柳樹がなびいて、ばかに景色のいゝところがあつたので、知らず／＼歩いてくと、竹橋といふ橋へ出た。どつちへ行かうかと迷つたが、青々とした堤の色に惹かされて、そちらへ足を向けました。

廣い道路をはさんだ兩側はきれいな若草の堤でした。龍のやうな古松が聳えてゐます。兵營のラツパの音がきこえます。私はどこへ行くのだったのでせう。何處へ行つてもよかつたのです。行先もわからない。たゞ足にまかせて歩いた。もうそれも大分重くなつてゐました。だつて高足駄穿きなんですよ。久しぶりで思ひつきり高いのを穿いたので、肩が凝つて／＼仰山に云へば死にさうな氣持になつた。頬と胸とがぼつぽと火熱る。足が痛い、首が痛い、齒が痛い、からだ中が痛い。が、わざと意地になつて傍目もふらなかつた。

通行人はみんな兵隊さんや荷車ばかりで、女の人なんかには一人も逢ひません。何だか心細くなつてしまつて、これはどこかへんびな田舎の方へでも出るんぢやなからうかとおもつた。

しばらくしてから遙かに電車の軋りをきいた時には、こんなにうれしかつたでせう。山中で迷兒になつた者が、人里でもたづねあてたやうに！

出て見たらそれは見覚えのある番町なんですもの、先刻通つたばかりのところやありませんか。ばか／＼しい、何處を一まはりしてこんな所へ出てしまつたんだらう。電柱の時計を見ると、五時半でした。三時からそれまで、歩きつゞけてゐたんですわ、一步も休まずに。もう／＼引きずらなくては一歩も動けない。痛いんだかかゆいんだかチク／＼と

百千の蟲が寄つてたかつて刺すやうな、手をやると羽織の上からでも、肩のまはりが熱けるやうに熱い。欲も徳もなくになりました。たゞ四郎さんに逢ひたい、と云ふ念ばかりはいよく燃え盛るのですけれど。

雨はいつか上つてゐた。雫と花片が袖にも髪にもはら／＼散た。狂せんとする心を抱いて、なかばは夢の心地にまた／＼九段の坂を下つた。

.....

.....

かくて、かくて終にさまよひ行きし涯は何處ぞ!! わたしはお茶の水橋の上に立つて、霧に包まれた夕景色をしみ／＼と眺め入つた。

こゝの櫻花はもう残りなく散りはてゝ、ほの紅い萼が點々と地上に逝く春のうらみを止め顔でした。ニコライ堂の塔の金の十字架が、暮れゆ

く空に輝いてゐました。

あゝ四郎さん！ ゆるして!!

わたしはもうあなたとおわかれして丁度いい!!

何のために？ おゝ何のために！ かんにんして下さい。あなたを失つても生きてゐられるといふ、確信が欲しくなつたのですよ。もうこの綿々と、惹かざるゝ心にはたえられぬから……。

別れて後は…… 別れて後は。……それやどうなるかわからない。

わからないけれども、……どうなつたつてかまいやしない。そこにまた曾て知らなかつた新しい自己を見出すかも知れない。

さうしてたとへ消息は絶ても、……世界の何處の涯からでも、四郎さんはきつと私の上を見守つてゝ下さるにちがひない！ 二つの霊の住

む世界はひろい、大きい!!

それとも……………それとも……………。

不可抗力な運命によつてならば兎も角、自分からそんな不自然な、破壊のやうなことをしてはならない。それは眞面目ぢやない。と一方の心は教へました。

否、未練だ、未練だ。それは未練です!

では四郎さん、さやうなら! あゝさやうなら! あ、あ、どうしたらよからう、私にや云ひ切れない、云ひ切れない! でも、でも、やつぱりさやうなら。……………驚かないで下さい。憎まないで下さい、怒らないで下さい。いゝえ、讀めて下さい。成長をよろこんでやつて……………。

四郎さん、……………さらば!

跋に代へて

泣寝してやがてそのまゝ寝死してやさしき人のからと云はれむ
けふのち忘れたまふや盡未來戀やわれ云ふ二様に居む
かへりみれば君やおもひし身やめでし戀は瞬りに添ひて燃えし火

(晶子集より)



大正四年六月廿五日印刷
大正四年六月廿八日發行

(正價金七拾五錢)

惜 春 譜



著作者

內 藤 千 代

發行者

本 橋 佐 三

印刷者

青 木 文 一

印刷所

第三帝國活版所

發行所

東京市本郷區本郷四丁目
(振替東京二七八七五番)

牧 民 社

特約賣捌

神田區錦町一丁目

誠文堂書店

■ 内藤千代子氏著書一覽



スカートホーム

第二十二版
正價金六拾五錢
郵送料八錢

博文館發行



ホネームーン

第十版
正價金六拾五錢
郵送料八錢

同



エングーチ

第十版
正價金七拾五錢
郵送料八錢

同



生ひ立ちの記

第八版
正價金七拾錢
郵送料八錢

牧民社發行



惜春譜

新刊
正價金七拾五錢
郵送料八錢

同

青柳有美、葦上修、原田琴子、天野千枝子、片野珠子、諸氏序

戀の屍、松本青峰氏著

小説 毒藥

四六判總ルビ附六號
紙數四百十二頁函入
正價金九十五錢
郵送料八錢

好評三版

◎時代は『青箱』と言ふ雑誌を産んだ。『青箱』はさまざまの新らしい女を産んだ。就中名古屋の新らしい女は、飽迄も豊満な肉體と、ロマンチックな技巧とを以て、絶えず執固く熱い戀を追ひ廻してゐる。此書は著者が同地に新聞記者たりし過去一年間に遭遇された事實を、其儘創作に上せられたもので、恰も熱湯の湧き返るが如き記者生活の半面と、泣けど泣けても足らぬ熾烈なる戀の懊惱とを、最もデリケートな筆でみしと押詰められた世にもまたなく悲痛を極めた物語りである。殊に此書の卷末を飾る『戀を迫る女』の如きは、正に我が大膽なる新らしい女の殿軍を爲すべきものと云つても差支へない。此書を読む者は豁然として『徒らなる戀』の如何に自他を傷くるものなるかを悟らるゝであらう。戀は必ず弄ぶべきものでない。結婚を覺悟せぬ戀は努めて避けなければならぬ。男女の交遊は飽迄も嚴肅にやらぬとお互ひに取り返しのかね苦しい思ひをする。そんなことはないと言つたつてダメだ。毒藥！毒藥！讀み返すたび息が詰るま。

彌生ヶ岡草人著
(寫眞版廿餘枚入)

向陵生活

四六判美裝
紙數三百廿餘頁
正價金七拾五錢
郵送料八錢

最新刊

縁もど濃き柏葉の、……………と言ふ第一高等學校の寮生活を、一高特有の感激に充ちた才筆で、愉快に描寫されたものである。洵に誰に聞いて見ても、一高の寮生活ほど面白い生活は無かつたと云ふ。その勤勉にして眞摯、快活にして無邪氣、能く喰ひ能く歌ひ、能く泣き能く笑ひ、斯くて倦むことなく肅々と實力の養成に努められつゝある處は、誰人にも一種の期待を感じしめずには措かない。蓋し感激と努力との生活、以て橄欖の香の宇内に馥郁たる所以を知れ

内藤千代子氏著 (寫眞版八葉入)

生ひ立ちの記

四六判 美裝
紙數三百九十頁
正價金七拾錢
郵送料八錢

男女執れを問はず人を戀すると言ふ事は、實に自分を賤しくする事だ。一と度我が胸中を對者に打ち明くる事あらんか、對者は必ず咳一番『我れは勝てり』と反つ繰り返るに定つてゐる。反つ繰り返られたら堪らない。こんな屈辱が又とあらうか。けれどもそれは身から出た錆である。我は我れ自らと那落の淵へ落ちて了つたのだ。

本書の著者は、いしくも此の間の消息を自覺して居つた。著者は正しく男に捷つてゐる。エライ!と三嘆せざるを得ない。けれども著者は之れを以て快とする程の惡魔ではない。亦異性のなさけを知らぬ程の無性でもない『口惜しや乙女の權威地に墮つと知りつゝ猶も戀しかりける』此の一首の歌は實に能く著者の眞情を語つて居る。亦此の書の内容を語つてゐる。著者の性情は實に美しい。現代の女子諸君は正に斯ういふ人を模範とされて間違ひがない。若しそれ文章の靈巧なる點に至つては是れ又天下一人である。敢て江湖に三省を促して置く。

好評八版

目書評好

■ 禪房の一年間

紅燈の下

小説 木乃伊の口紅

小説 恋むすめ

集文落栗

■ ■ ■
曲戲
是が人生だ！

新思想論

新
兵
生
活

新兵生活

郵正
送價
料金
九
八
錢錢

郵正
送價
料金
九
八
錢錢

郵正
送價
料金
五六
錢錢

郵正
送價
料金
五六
錢錢